鱗雲に髦す

雲級幾十層、各層其態を殊にし、皆其名を同うするなし。青冥に遡りて直ちに帝側に繚ふ。金梭の縠紋を織り成すが如く、鱗形を成す者、之を『鱗雲』と云ふ。嶺雲は天上の子也。足地を履むと雖ども、是れ地上の人に非らず。皴鱗雲を起して、往々紫霄に冲せんとす。其嘔心鏤骨して出す所の如き、字々悉く火を吐き燄を吹く。文字の熱して赤きと緋の如きは、盖し其天分に出づ。咳唾珠玉を成すは、嶺雲の文にあらず、吸噓悉く紅火、是れ其文也、地に燃えて火となり、天に麗つて日となる。飛冲上昇を性とす。是れ地上の物には非らず。頃者其文を輯して一集を綴り、命

明治
38 6 17
交内

じて『鱗雲』といふ。雲級最上層の雲、獨り資て以て嶺雲の集に名く可し。

嶺雲曩きに『壺中觀』の著あり、剞劂既に成つて、忽ち忌諱に觸れ、其頒行を禁ぜらる。蓋し其文奇矯其旨熱烈なるに由る。予簡を獲、往いて之に越山内相に詰らんとし、一謦亦囘へす可らざるを知り、乃ち之を止む。當年大學に在り、日本のバイロンと喚ばれ、今や誤つて社會主義と認めらる。筆累を成し寃を搆ふ。蓋し亦天か。鱗雲の上梓、覆轍を再びせざらんとを禱る。

明治乙巳孟夏

犀東居士識す

序

壺中觀は安寧秩序を妨害するの故を以て發賣頒布を禁ぜられたり、吾人は此に對して其何の故たるを問ふの權利なし、たゞ聖代の治の寛仁に忸れて、我識らず言論の自由の範圍を逸脫したるは自らの不覺なり、此篇輯むる所は盡く是れ舊稿のみなれば、予等國民が、憲法の保障によりて與へられたる言論の自由なるものが、時に因り、處に因り、人に因りて伸縮の差あるべき筈なき以上、此書は既に保險附也、壺中觀の厄を再びするが若きこと、必ず之れ無かるべきを確信して、茲に此を公にする者なり、

著者嶺雲

うろと雲目次

閑是非

王氣覇道……一
帝國進運の第四期……一
聖天子登極の初志……三
兵を錬るは兵を用ふる爲め……三
寧ろ平和の一大號鐘を鑄よ……五
邁往か萎縮か……七
大平和は鐵血の後に來らん……八
大流星隕つ……九
歷史的大國是……九
黃禍論は歡ぶ可し……一〇
白種の恐怖……一二
人種的偏見……一三
好望なる國運の發展……一五
人道の名に於て來れ……一五
經濟上の勁敵……一六
釼火以外の經略……一九
海外飛躍の志氣……二〇
經濟上の最劣等國……二一
人口の蕃殖と國家の活力……二二
是亦文明の餘弊……二五
金丹靈液……二七

文明の進歩と人躰の贏弱……二七
醫學上の自然主義……二九
田五加草と所謂化學的捜索……三〇

俗情凡趣……三二

救世軍の克己週間……三二
人形を買ひて情死せる娼婦……三三
男女氣質の相異……三五
流行は愚者の極樂……三五
華と實と色と香と……三六
天才の靈華と翻譯の惡化……三六
欽仰すべき超俗の風規……三八
英雄固首即神仙……三九
天空海濶の至樂……三九
千載稀に出づるの人……四〇
文芸閣逝く……四〇
永圖遠見を少げる國民……四一

縱橫議

露國衰亡論……四二
續露國衰亡論……四三
天佑の過信……四六
縮寫せられたる日本……五三
形式的敎育の大弊……六四
形式的なる學校設備……七一

小品藻

夜色……七三
夢のあと……七六
心のいたみ……七七
八月三日……七九
海の爲めに痩削さるゝ陸……八一

漫月旦

近衛公と西園寺侯……八四
山縣侯と伊藤侯……九一
トルストイ伯……一〇八

同胞錄

送白河鯉洋之金陵……一一二
兒玉篁南に復す……一三三
佐藤秋蘋に與ふ……一三六

切磋契

內藤湖南……一四〇
國府犀東……一四五
笹川臨風……一四五
佐藤秋蘋……一四八

うろこ雲目次

金蘭記……一六一
笹川臨風……一六一
藤田劍峯……一六五
藤井紫影……一六七
白河鯉洋……一六九
藤岡東圃……一七一
國府犀東……一七四

終

うろと雲目次 終

金蘭記……一六一
笹川臨風……一六一
藤田劍峯……一六五
藤井紫影……一六七
白河鯉洋……一六九
藤岡東圃……一七一
國府犀東……一七四

閑是非

壺中觀を哭す

嶺雲

自著壺中觀上版纔に成りて未だ發售するに及ばずして、即ち官司の忌諱に觸れ、五月二十七日秩序安寧妨害の名により其發賣頒布を禁ぜらる、仍て文を爲つて其靈に告げて曰く

嗚呼壺中觀、爾は吾の半身なり、吾の心血を瀝み、吾の肺肝を吐いて、乃ち爾あり、爾は變形せる吾の遊魂也

爾は又吾の愛兒なり、爾の思想は吾に稟くる所なり、爾の精神は吾の賦する所なり、爾は骨肉なき吾の生兒なり。

爾は又吾の使徒なり、吾に代つて吾が教旨を傳へ、吾に代つて吾が福音を布く者なり、爾は忠實なる吾の弟子也。

爾は又吾の伴侶なり、吾憤ある時爾によつて之を吐き、吾悶ある時、爾によつて之を遣る、爾は沈默なる吾の酒徒也。

吾が言はんと欲する所、爾之を言ひ、吾が說かんと欲する所爾之を說く、吾と遇ふ所を同ぐくし、吾と見る所を同ぐくし吾と同ぐく俗に迕ひ、吾と同ぐく時と違ひ、吾と俱に不平に口を開けば世を罵り、吾と俱に猾惡に、吻を衝いて咄々す、吾は即ち吾也、吾の主義、吾の信仰、吾の研究、吾の感興吾が滿肚の牢騷、盡く寓せて爾にある也、吾が哲學吾が宗教吾が學、吾が詩、吾が滿腔の鬱勃盡く藏めて爾にある也、嗚呼爾亡びて復吾が言の是非を天下に問ひ吾が心の知己を天下に求むるに由なき也、嗚呼爾の亡びたるは即ち吾が口の緘せられたる也、吾が手の枷せられたる也、吾が足の繫がれたる也、吾が爲めに四方に馳せ、萬人に說き直截に吾が志を舒べ、忌憚なく吾が思を述ぶる爾なる者は既に亡びたる也、爾亡びて吾は精神上の不具者となれり、此以後吾は自ら吾が良心を欺くことなくして何事をも言ひ何事をも筆する能はざる也、嗚呼爾亡ぶ、吾に口あるも何の要ぞ、吾に手あるも何の要ぞ、吾が半世の苦學竟に亦何の要ぞ。

嗚呼爾は吾が殉教者也、爾は吾が道の爲めに死したる也、爾が身は戮せられたり、爾の軀は寸裂せられたり、爾は即ち從容として其刑に就けり、爾が言へる所、即ち吾が言はんとせし所說かんとせし所の者は、盡く爾と俱に亡べり、噫、盡く爾と俱に亡べり、而かも爾の形は亡ぼすべし、爾の靈は亡ぼす可らず、猶止まつて吾に在るなり、吾の賴に生くる其靈も猶生くるなり、爾既に亡びて復爾が羽翼を藉つて之を一時に宣布するに由なしと雖ども之を一人より一人に傳へて漸くに汎きに及ぼす、爾亡ぶるを以て爲すを得る也、吾の存する限り、吾の靈の存する限り、爾の靈は猶生きて此の天下の間に存する也、爾夫れ安んぞて瞑して可なり。

然れども爾纔かに生れて、其口未だ一たびも開くを得ずして早く此禍に遭ふ、天下一人の爾の容を睹たる者なく、一人の爾の言に接しはるものなきに空しく夭折す、爾の恨想ふべき也、然れども容れられずして即ち君子を觀る、トルストイの著作は、毎に露の內國に刷行するを容るされざれども、是れがために其說の高きことを減ぜざる也、爾の言說を以て之を聖哲と比するは固より其倫にあらざると知るも然れども爾の言說の當世に容れられざるものたる、爾は寧ろ此を以て自ら負ふ所ありて可なるべきのみ。

蓋し理想を說く者は一種の先覺者なり、一種の豫言者なり、豫言者は毎に時代に先だつが故に多く時代に容れられざる也、所謂時代に先だつとは、更に新に、更に善き時代を惝怳して其現時代の秩序なるものを、此理想に嚮はしめんとするの謂也、而して此の所謂時代の秩序なるものは人類習俗の一種の歷史的沈澱に過ぎざるものにして、先覺者豫言者が說く所言ふ所は澄清の上にあり、時に此汚濁なる沈澱の靜止を攪すことあるを亦已むを得ざる可きのみ、但習俗なる者は必ずしも固定せず、時代は毎に推移する也、今日に罪とせらるゝ所、必ずしも明日に罪とせらるゝに非ず、現代に容れられざる者、必ずしも永遠に容れられざるには非ず、庶幾くは爾是の理を以て少しく自ら慰むる所あれよ。

吾が生數奇數々世路の艱難に遇ふ、十年來六處に移り、二たび垂死の病に罹り、一度冤獄に下る、而して今又吾が半身たり愛兒たり使徒たり伴侶たる爾が此厄に遭ふと見る、夫れ宿命ありて天の吾を苦むる歟、爾倘し親と親まずば想ふに此慘厄なからん、想ふに爾吾に宿緣あり而して又宿命を吾と同ぐうする也、吾既に我が生の轗軻に安んず、爾も亦爾が命のある所に安んぞて、願くは天を恨む莫れ、地を恨む莫れ、人を恨む莫れ、爾の古に倣ふて名山に藏れ、以て時の到るを待つ能はざりしは、亦爾の過也、噫、爾既に亡べり今にして之をいふも及ぶ可らず、哀矣。

うろこ雲

田岡嶺雲著

王氣覇道

▲帝國進運の第四期

なぞらへて我が君か代の千代見草、菊の盛を今日は天長の佳節に候、顧みれば今上登極の初、中興維新の丕業を成して、直に祖範の鴻烈に踵ぎ給ひてより、皇威惟揚がり、帝運惟張り、蒸々駸々として我が國勢は年と俱に興隆を進め着々誤る所なきは、偏に是れ陛下稜威の然らしむる所、吾人民生の慶、此に過ぎず候、而して聖朝の治今に至りて三十六年にして、此間國運進歩の歷程之を三期に區分すべく、維新より十年丁丑の亂に至るを第一期とし、二十二年の憲法發布を第二期とし、以上二期を以て內政の經營は略々其緒に就きたるものにして、二十七年の日清戰役を第三期として、帝國は玆に始めて國力外展の

うろこ雲

王氣覇道

田岡嶺雲著

▲帝國進運の第四期

などらへて我が君か代の千代見草、菊の盛を今日は天長の佳節に候、顧みれば　今上登極の初、中興維新の丕業を成して、直に祖範の鴻烈に踵ぎ給ひてより、皇威惟揚がり、帝運惟張り、蒸々殷々として我が國勢は年と倶に興隆を進め着々誤る所なきは、偏に是れ　陛下稜威の然らしむる所、吾人民生の慶、此に過ぎず候、而して聖朝の治今に至りて三十六年にして、此間國運進歩の歴程之を三期に區分すべく、維新より十年丁丑の亂に至るを第一期とし、二十二年の憲法發布を第二期とし、以上二期を以て内政の經營は略々其緒に就きたるものにして、二十七年の日清戰役を第三期として、帝國は茲に始めて國力外展の

期に臻れるものに候、日清戰役後方に十年、帝國は將さに進運の第四期に入らんとして、茲に日露の折衝あり候、是れ實に局面轉捩の關鍵にして、天がまさに帝國に下せる一大試驗に外ならず、百尺竿頭一歩を進めて、國運の上に更に生面を拓き精彩を放つと否とは、實に唯能く此障礙を劈破して直前すると否とに繫り候、若し此機に際り、斷を以て此に處する能はずんば、日清戰役を以て急轉直下せる今の國運は可惜茲に一躓し進取の鋭即ち挫く可く候、夫れ進歩の勢は猶物躰の墜落と同じく加速動を以て直下すれども、一たび其勢を挫いて之を停めば、更に力を加へて、其動を促がさざる可らざるのみならず、其進捗の速度も亦新となるを免れずして、刻下の時局一日の偸安のために姑息の計をなさば、帝國の進運は此がために遲滯を致し、邦家の永圖を誤ること大なるものあるべく候、吾人今月今日此嘉節に方り、聖壽の萬歳を頌し奉ると共に、窃に時艱に對し憂心の沖々たるものあるを禁ぜず候、但天道殺を好まざるも猶四時を平分して秋氣の慄烈あり、聖主豈に戰を樂まんや、たゞ征して天威を將ふのみ、臺閣の諸公事に當つて遺策なくんば幸甚也。（癸卯十一月）

▲聖天子登極の初志

聞道らく明治の初年今上皇帝登極の初、水戸烈公の作らしめたる大地球儀を献ずるあり、即ち此を履んで、即位の大典を擧げさせ給へりと、蓋し其地球儀を履ませられたるは、必ずしも五大州を蹂躙し給はんとには非ずして、皇化を八紘に光被し、君子國たる我皇國が、平和の大義を萬邦の民に普及せんとの御思召に出でたるに外ならざるべく、過去三千年來祖宗の遺訓茲にあり、將來百代の帝國の永圖亦茲にあり、會々天、聖天子を今の時に生じて、此國是を遂行し、此理想に企及せしめんとせるに非ざるべき歟、帝國の興隆は以て東洋の平和を保證するに足るべく、世界の中心點東洋の一角に凝注せるの時、東洋の平和は、即ち世界の平和を催進する所以、而して帝國興隆の機は實に今の日に於て露と一戰し、我が前途の荆棘を排除するにあることを知らば、現下の時局決して推諉遷延を敢てすべきにあらず、閣臣にして斷ずる能はず、決する能はざるは、則ち聖天子登極の初志を贊弼する所以に非ず候。（全上）

▲兵を錬るは兵を用ふる爲

金氣蕭殺たり、貔貅雲の如く播州の野に集り、三箇師團の大兵は既に大演習を開始し、大元帥陛下には親しく之を統監し給はんが爲、六龍西に翔り、方に蹕を舞子に駐め給へり、三軍の士氣激揚して、龍騰虎奮するの狀想見に禁へず候、然れども國家其財を糜して兵を養ひ武を修むる所以の者は、徒に壯士芝居の大なる者に過ぎざる砲煙劒光の活劇を演じて、外國武官に誇衒せんがためには非ず、武は固より戈を止むるにありと雖ども、其戈を止めんには、其戈を宜しく用ふべきに用ひざる可らず、宜しく用ふべくして之を用ひざれば、幾千萬の國帑を民の膏血に徵し、幾十萬の壯丁を全國に募りて、師團といひ、旅團といひ、聯隊大隊中小隊といふが如きものを設けんよりは、寧ろ全國の玩弄具屋よりブリキ細工ゴム細工の兵隊人形を買上げて之を沿海各地に配列し置かんの勝れるに若かず候、演習の砲聲轟き劒華閃めく壯ならざるに非ざるも、國家宜しく戰ふべきに戰はざるに於ては、其演習は竟に演習のみ、僅に三四日の兵馬旁午則ち費す所幾萬圓にして、而して細民これによつて一片のパン屑だも贏け得るといふにもあらず、たゞ幾萬の貔貅が塵に塗れ泥にまみれ馳騁追逐に憊れいたむあるのみ、今や暴露非違、帝國興隆の機と世界平和の運と、實に繫りて開戰と否とにあるにありて、而して當局遲疑決する能はず、邦家の長計を空しく一日の苟安に敗らんとす、而して徒らに師を錬り武を演じて兒戲に類するの虛誇をなすも何の事に益あるなきなり、此の如くんば寧ろ總ての軍備を撤し、總ての兵戎を解き、一切軍國的の覇氣を棄てて、以て民を休し、民を養ふに若かず候、積極的の方針を以て世界の大平和を催進するか、一變して消極的方針を執り、自から始めて列國解兵の魁たるか、已むなくんば齊一變して魯となる、是れも亦可に候、街耀の軍備、趙括的の演習は我が與する所にあらず候、（全上）

▲寧ろ平和の一大號鐘を鑄よ

閱武事畢り、統監を躬親らし給へる大元帥陛下には龍駕を東に回へし給へり、恰かも此時に方り、日露の時局が姑息なる苟且なる所謂協商の訂約によつて、糊縫的解決を見んとするの傾斜甚急なる者あるを傳ふ、一時の小康を庶幾して後患を貽すの恐るべきは、砲火を以て雌雄を一擧に決するの慘よりも甚しく候、

蓋し日露の關係たとひ今年に戰を避け得たりとするも、我に於て其進取的國是と世界大平和の永圖とを捨てて永遠の屈辱を甘受せざる限り、我の發展と彼の發展とは其利害相容れざるが故に、必らず衝突せざるを得ずして、結局戰は必ず一二年遲くも四五年の後を待たずして、開かれざる可らざるの期あるべく、若し戰はざらんと欲せば、全く屈從するか、否らざれば軍備の擴張を增大にして、所謂武裝的平和の權衡を露の上に保たざる可らず候、而して軍備の擴張は今日に於てすら既に國民の大負擔なり、大疾痛なり、此の以上軍備に軍備を繼ぐは、恐らく民生の負擔に堪へざる所なるべく、寧ろ我の武此くの如く惟揚がれる今日、露國の東方經營其地盤未だ全く鞏からざる今日に於て、乾坤一擲の大壯圖を試みんには若かず候、所謂平和的解決を今日に急がば、露に對して我を威壓するに足るの軍備整頓の猶豫を與ふるのみに候、吾人は斷々として協商の訂約を不可とするもの、若し訂約果して成らば、吾人は此以後軍備の競爭に國民を憊らしめんよりは、寧ろ凡ての我軍備を擧げて之を撤し、一切の砲煩、一切の劍戈を巨爐中に投じて之を鎔かし、これを以て一大々的號鐘を鑄造し、鉦して

平和の巨鐘と名づけ、時々刻々殷々たる鯨吼に、自由、平等、正義、人道の先聲を擡き出して世界萬邦のあらゆる帝王、主權者、廷臣、閣臣と、あらゆる民衆の上に平和の警醒を布かん、屈辱を甘んじて平和の奴隸とならんよりは、寧ろ解兵の實を擧げて、君子國の名を以て世界の俱瞻とならんには若かず候、（癸卯十一月）

▲邁往か萎縮か

日露開戰して、戰勝の結果は日清戰役後のそれと同じく軍人の跋扈を見んとの懸念を抱くものあり、吾人もまた勿論、軍人の跋扈はこれを非とするもの、而かも猶敢て開戰に左袒する所以のものは抑も所以あり候、何となれば今に於て幸に兩國交綏、玉帛の間に事を終り得たりとせんも、此は一時を彌縫し、稽緩するのみに止まり、露は決して此とともに全く其禍心を棄つるものには非ざるべく、必ずや其兵力を養ひ其戰備を增し、捲土重來の機を覘ふべく、而して我も亦此に對し備ふる所なかるべからずして、彼れ朝に一兵を增せば我も一兵を增し、彼れ夕に一艦を增せば我も亦一艦を增し、相追ひ相競ふて擴張復擴張、

擴張は窮まる所なくして民力は限あり、國家の財力枯竭して軍備の競爭猶已むを見ず、國は軍備のために罷れ僵れんのみ、若かず寧ろ兵力猶較優れる今に方りて早く雌雄を一擧に決し、彼を掊克して復起つ能はざらしめんには、若し能く此の如くなれば、露はよし戰敗の創痍を以て倒れずとも、猶財政の破產の爲めに覆滅すべく候、此上涯なき軍備の競爭を爲さんよりは、寧ろ一快戰以て禍根を剪絕するは、未來の平和、未來の兵備縮少の基を啓く者なるべく候、抑も人の大成功が一度死生の境を經たるにあらざれば得ざる如く、國運の大發展も亦一たび必死の難關を透貫するを要し候、而して克く此際に處して邁往すると萎縮するとは則ち未來の運命の別るゝ所、且此機は二たび來らずして、其來れるに際り之を捉ふるものは成り、之を逸するものは敗る、人爾り國も亦爾り、日本は方に此難關に處すべきの機に際會し居り候、邁往か萎縮か、國家進運の成敗は實に今の一決心に繫り候、（全上）

▲大平和は鐵血の後に來らん

鐵と血とは苦痛なり、慘憺なり、然れども未來の大平和大光明を購はんがた

めには、吾人は高き價を償ふを辭す可らず、希臘が波斯との戰を經て興り、英吉利が西班牙との戰の後に興り、普魯西が墺太利との戰を經て基を啓き、露西亞が瑞典との戰を經て國を建てたるが如き、國の肇めて建ち、若くは興らんとする、必ずや一たび他の強國との血戰を敢てして、砲火の洗禮を受けざる可らざるは、歷史の示す所、又氣勢の然らしむる所、此時に際りて一日の安を偸んで興國の進運を挫く可らず候、而して吾人が日本の興るを庶幾するは、獨り偏固なる愛國心の上よりのみ之を喜ぶが爲めに非ず、寧ろ日本の興隆は卽ち東洋平和の保證にして、更に進んで日本、世界平和の關鍵を握るに及んで、卽ち大光榮大平和地上に來り降るべきを信ずればに候、（全上）

▲大流星隕つ

曩の夜大流星、怪離たる光芒を曳いて東より西に向つて隕ち、皇祖發祥の地たる日州霧島山、山靈何に怒つてか、近來鳴動頻々なりと傳ふ、殺氣、劍氣、鬼氣、腥氣、極東の天地に磅礴充溢するものあり候、（全上）

▲歷史的大國是

韓半島に向つて我國力を發展するは、我帝國神代以來の大經綸なり、大國是に候、素盞嗚尊の海を踏んで北に渡りしは此が爲めにはあらずや、神功皇后一巾幗の身を以て親ら三軍に帥として遠く征せるもの、亦此か爲めにはあらずや、降つて豐太閤が十萬の兵八道の山川を蹂躙せしもの、實に此大國是が中道失墜せるを再び振はんが爲めにあらざりしか、更らに降つて明治維新の初西鄕、後藤、副島、江藤、板垣等が其榮官を睹して廟に爭ひ議せしも、亦此がためにはあらずや、日清戰役に出師遠く遼東の野に戰ひたるも、亦此韓半島に我國力を發展せんとする大國是の爲に外ならざりし也、今復我帝國が露と滿洲問題に於て確執するも、露の滿洲占領は我の此大國是に礙あればに候、三千年來の大國是を繼紹して、而して陸に十二師團の貔貅あり、海に廿萬噸の艨艟あり、猶露の壓迫に對して其首を俛れんか、此膝一たび屈せば復伸ぶ可らず、滿洲の拋棄は即ち韓國の拋棄也、ア、帝國の歷史的大國是を如何せん。（癸卯六月）

▲黃禍論は歡ぶ可し

白人間に黃禍の論を唱ふも者漸く多し、是れ憂ふべきに非ず、寧ろ慶す可く候、黃禍論は即ち我帝國の勢力の世界に認めらるゝを證明する者なり、黃禍論は慶ぶべき現象なり憂ふべき現象には非ず候、露が黃禍の論を唱ふるは矛盾也、白禍を以て永く異人種を苦めたる彼等にして豈黃禍を云々するの權利あらん哉、須らく先づ齎つて自家が過去百年間に行ひたる侵略の罪惡を懺悔すべき耳、露人が黃禍の說を爲すは其嘗て自らが所謂異人種に對して爲したる罪業の復讐を怖るるに由る、而して恐怖心の生するは即ち其勢力の衰弱を自覺せるに由る、黃禍論は露國の過大なる勢力が漸く縮小に嚮へるを證明する者に候、

吾人は、彼の帝國主義なる者に同意せず、故に又侵略主義を唱へんとする者に非ず、然れども所謂平和なる者は勢力の平衡の上に存するものたるを信ずるが故に、過去に於ける白人の過大なる勢力の跋扈の爲めに攪亂せられたる世界の平和は、彼等が所謂異人種の勢力の發展によりて之を反正するを得べしとなす者に候、白禍に對する所謂黃禍豈に世界の平和を反正する所以に非ざるなきを得んや、

黃禍說は即ち彼等が所謂異人種たる黃種の勢力の增大と、白人自らの勢力の

減衰とを暗示するもの也、而して日露戰爭に於ける日本の戰勝は白人勢力の上に於ける大革新たり、將又世界史上に一ニューエポック新時代を劃すべき者にして、民族間勢力の平衡而る後行はれ、平衡行はれて而る後眞の平和、眞の自由、眞の博愛あらん、黄禍の說は慶ぶべし、憂ふべき所以を見ず候、

外交家は婉辭を尙ぶ、可也、彼等をして黄禍の無稽なるを列強に吹聽せしめよ、而れども帝國の地位、世界の大勢の上より鑑みて、我國民は寧ろ黄禍論を歡ぶべし、而して更に黄白均勢の實を擧ぐるに努力せざる可らず候、(甲辰六月)

▲白種の恐怖

征露の役開けて以來我國の連捷は白人種間に一種の驚駭を與へ、其驚駭が今や變じて恐怖とならんとしつゝあるは事實也、是れ黄禍の語が彼等の間に神經を刺激する一種の流行語となれるを見ても以て徵すべく候、殊に對局の交戰國たる露國に在つては頻りに此說を鼓吹して排日本の感情を煽動せんと試みつゝあり、曩きにノウオイエ、ウレミヤが其紙上に揭げて、日本の野心が亞細亞を覺して之を統一せんとするにあるを論じたるものの如き、日本の將來が亞細亞に

於ける歐米の勢力を脅かすべきを說いて、歐米列國の我に對する反感を挑動するに力めたるもの、其心事や奸黠にして甚だ疾むべしと雖ども、其所論に至つては「吾有心他人忖度之」もの、大に吾人の意を強ふする者あり候、即曰く日本は啻に清韓を籠蓋するを以て足れりとせず、更に手を伸ばして遲羅に結び印度と親しみ、相同盟して亞細亞を白人種の壓迫より救はんとすと、我が國民は果してノウオイエ、ウレミヤの所說の如き遠圖を包藏しつゝありや否やを知らずと雖も、我が國民は此所說に對して寧ろ恬倪たるものあるなきを得るか、

吾人は、民族間勢力の平衡を得んが爲め即ち眞の太平和を永遠に維持せんが爲めに、韓國を鞭撻し、清國を覺醒し、遲羅を濟ひ、亞細亞の列邦を連衡するの義務ありと信ずるものに候、彼のノウオイエ、ウレミヤの亞細亞統一論の如き、寧ろ齷齪たる我國民の他山の石として、我を激勵するに足るもの有り候、(甲辰七月)

▲人種的偏見

人は偏見の上に立つ者也、蓋し宇宙の現象は盡く相對なり、人は此相對なる宇宙の現象の裡に立ち、亦一相對なり、故に我あれば則ち彼なかる可らず、既

に彼我あり、彼我各其是非なかる可らず、是に於てか偏見生ず、各其偏見する所を執つて互に相鬩ぐ、故に莊子の物論を齊ふするを說くは、太一太公の上より大觀して、彼我を一にし、是非を混ぜしめんとするのみ、先づ彼我一己の偏見あり、則ち彼我家族の偏見あり、則ち彼我國民の偏見あり、則ち彼我人種の偏見あり、彼の米國、濠州等の黃人種排斥は即ち此人種的偏見に據る也、蓋し世界の趨勢が漸く太一に歸着しつゝありとするは吾人の素論なり、今や國民的偏見は既に除かれんとすれど、人種的偏見は猶未だ除かれず、人種的偏見にして除かれて、而る後世界的人類的太一は來るべく候、頃日濠州より來りて我邦に觀光する一客イー、ダブルユー、コール氏、其身亦濠人たるを以てして、夙に彼の所謂白濠州法案（亞細亞人排斥條例）に反對し、地球上生物の源なる太陽によりて支配さるる皮膚色の相異を以て人類間に區別をなすの、不道理なる偏見に過ぎざるを唱へ、其說を公にしたるもの既に二三に止まらずして、來朝後も其說を以て我邦朝野の間に意見を叩きつつあるを聞き候、吾人は氏が意見の頗る公正にして、凡俗の免るゝ能はざる偏見の上に一步を拙けるものあるを認め、

窃に氏の爲人を高しとする者に候、願くば我邦の學者たるもの、亦徒らに曲學以て俗に媚び、僞愛國僞忠君の偏見に齷齪するの陋態を脫して、少しくその眼孔を大にせよ、（癸卯十月）

▲好望なる國運の發展

烏港發行の一露新聞は、露國の東亞經營を說き來り、其經營を妨ぐるものに對しては、最後の手段に據るの止むなきを論じたり、其中に曰く若し夫れ良港に富める朝鮮が一朝日本人の手に落ちたりとせんか、曾に滿洲烏蘇里及其以北の地方のみならず、北淸地方は上海に至るまで銳利なる日本人の好市場とならん、是れ豈に警めざる可けんやと、帝國國運發展の好望なる前途は、彼、露人の認むる所も亦此の如し、かるが故に我邦は今に方りて開戰するの必要あるものに候、（全上）

▲人道の名に於て來れ

四海同胞一視同仁を以て宗旨とずる基督敎敎國が、却つて其基督敎國たるを以て自ら高しとし、他の異敎國を目するに蒙昧野蠻を以てして、其邦を侵し、

其民を掠め忌憚する所なかりしは、其實際に於て基督教國たる所以の實を失へるものにして、今次の日露戰爭の如き、吾人は一面より之を見て基督教國（アリヤン民族）の迫害に對する所謂異教國（チユラニアン民族）の反抗なりと做す所也、強者に對する弱者の反抗は、卽ち均衡の來る所以にして、今次の戰爭のため彼の忌むべき宗教的人種的の阻隔は自ら撤去せられ、世界的大同に一步を進むるものあるは吾人之を信じて疑はず、英國某雜誌の日露戰爭防止に關せる論文中『吾人は敢て人道の名に於て此戰爭の防止せざる可らざるを言ふ、吾人は不幸にして基督教の名に於て之を言ふと能はず』といへる、基督教の名に於て傲然異教國に蒞むこと最も甚しかりし英國に於て此言あるを聞くに至れる、亦以て世界が宗教的阻隔より漸く人道的太一に移らんとするの兆を認むべきに非ずや、嗚呼平和よ來れ、而して其平和は卽ち人道の名に於て來らざる可らず候、（甲辰十月）

▲經濟上の勁敵

露國にして今日の武力偏進の國是を悛めざるよりは、露は武力に成功して、

經濟上に破產し、而して國際的關係の大勢が漸く武力的より經濟的に移れるや、經濟上に破產せる者は、卽ち其國の前途唯衰亡あるのみならんとは、吾人の夙に論じたる所、頃日那威の一記者ブョルンソン氏の巴理なる歐羅巴週報に揭げたりといはるゝ一論、大に吾人の論據を强ふするに足るものあり候、其略に曰く

昨年露國の國債は百七十二億五千萬法（約六十九億萬圓）に達し內八十六億六千七百萬法は國外に放資し外に鐵道事業に放下したる額實に四十三億三千三百萬法あり露國政府は其稅斂の苛重にて財政の餘裕なきを掩はんが爲めに公債政略を以て一時を糊塗せんと努むと雖も今や到底其破綻の掩ふべからざるものあり卽ち歲出は益々膨脹して歲入は之に伴はず收利の最も多大なるべき國有鐵道の如きも昨今漸く其作業費を辨じ得るのみにして利子の支拂に達するにはいまだ遼遠なるものあり外債によりて輸入せられたる資本の大部分が警察費幷に海軍費として使用せられつゝあるは事實にして若し佛蘭西なる資本の供給者微かりせば露國の專制政躰は早く旣

に其覆滅を見たりしなるべし若し外國の助け微かりせば野蠻にして腐敗せる露國の專制政治は革命によるか若くは自身の解躰によりて亡滅したるべし

但露國が頃者少しく自ら反省する所の兆として見るべきは、從來全く軍事用のみの目的を以て列國に向つて閉鎖主義を執りたる西比利亞鐵道を、經濟上に利用せんと試むるに至りたること是也、曩に日英兩國が該鐵道を歐亞間の郵便線路となさんことを露に交涉するや、露は種々の口實を設けて之を拒絕し、頑として應ずるなかりしこと久しかりしが、今や俄に從來の態度を一變して啻に兩國の要求を容れんとするの意嚮を現はし來りたるのみならず、更に進んで本邦鐵道業者に向ひ歐亞間聯絡輸送の協商を試みつゝありと傳へらる、彼若し從來の武力偏進の政策を捨てゝ、經濟的飛躍を試むるに至らん乎、經濟上に於ても亦太平洋上の我の勁敵は則ち露ならん、

に奮はんとす、亦必ず滿州の占領によつて不凍港を得ざる可らず、故に彼を滿州に挫くは、彼の翼を殺ぐ所以也、露の

やとして露の滿州占領を捨てしめざる可らず候、（癸卯九月）

▲劒火以外の經畧

所謂國運の振張は必ずしも劒と砲とを以てするを得べきのみに非ず候、鋤を以てするには、滄海滌々たり、國の接するなく境の限るなく到る處手に任せて漁利拾ふ可く候、遠洋漁業に依れる海上の開拓は最も平和なる、而かも最も有利なる國運發展の法に候、從來我邦の漁夫が其鐵の如き筋骨と、巧捷なる漁法とを傳へながら、空しく沿海にのみ局促せしは、幕政當時の鎖國の禁、習ひ性となれるが爲めにして、我邦人は決して冒險心なき國民には非らず、殊に漁夫に至りては平生片舟を以て怒濤と戰ふに慣れ、生を板子一枚に托して怖れざる膽氣と手腕とを有し、最も冒險に適したる者に候、之を啓導すること宜しきを得ば、彼等の爲す所、必ずや劒火の經畧に讓る所なかるべく、特に蜿蜒として長く南北に延び、其の四邊皆海を環ぐらせる斯の我が國、南の方其頭は南洋に呑み、北の方其尾は北洋に奮ひ、東は太平洋に枕み、西は韓海支那海を包む、東西南北往くとして海中の遺利拾ふべく候、北海の鯨、

韓海の明太魚、既に我の採るがまゝなり、更に進んで手を南に伸ばすも亦大に可なるべく候、（仝 十月）

▲海外飛躍の志氣

近時海外に渡航せんとする者俄に多きを加へたるは、久しく內に鬱積したる國民の冒險的志氣が漸く奮ひ來れるの徵として喜ぶべき現象に候、殊に有爲の青年にして外遊の志を立て、渡米（職業を得て旁ら勉學するに最も便宜多きが爲め）を企つるもの亦頻なるは、內國に於ける學制の不備より來る一種の學閥の壓迫に激するも一因なるべきも、兎に角埋骨必ずしも故郷の山のみならざるの意氣壯とするに足り候、蓋し斯く國民に海外飛躍の志勃興せるは即ち國運外展の氣運の熟、之を然らしめたる者、苟くも邦家百年の永圖に意を注がば寧ろ進んで之を啓迪利導すべきなるに、我當局の計却つて此に出でず、齷齪として細節末條に拘泥し、成るべく海外渡航の手續を複雜にして、之を抑制せんとするの傾あるは實に慨すべく候、堂々たる我帝國が國運外展の氣運に際り、自ら屈し自ら輕んじ外國の評判をのみ氣にし居る小國的の襟と器度量とを免れざるものに候、（仝上）

▲經濟上の最劣等國

過去三十年來列國輸出貿易發達の狀を案ずるに、我邦は未だ世界中最も劣等の地位にあり候、

	千八百九十年	千八百八十年	千八百七十年
	百萬圓	百萬圓	百萬圓
米國	一、六九〇	一、六四八	七五四
英國	二、五六四	二、一七〇	一、九四二
獨逸國	一、五八四	一、三七四	一、一〇四
佛國	一、四四八	一、三三八	一、〇八一
和蘭國	八七〇	五〇二	三〇八
印度	六九六	五四四	五一〇
埃及	六一八	五五〇	三八四
白耳義國	五五四	四七〇	二六六
露國	七七六	四九六	四三二
伊太利國	三四六	四二六	二九二
伯西國	二八二	一九四	九八
瑞典	二七八	二五八	一
アルゼンチン	一九四	一一二	五八

西班牙	二八四	二五〇	一五四
支那	二七〇	二一二	一七四
日本	二五四	五〇	三〇
瑞典	一九〇	一二六	八一
智利	一二六	一〇四	五四
諸威	九二	五八	四四
墨其古	八四	五二	五六

即ち二十年前までの、經濟上に於ける我帝國の地位は實に貧弱憐むべく列國中の最下位にあり、十年に至りて較々其地歩を高めたるも猶幾に諸威、黒其古に超えたりといふに過ぎず、去年に於ては一躍其額從來に三倍するに至り、發達大に見るが如きも、而かも漸く瑞典、智利、諸威、黒其古の諸小國を凌げるのみにして、南米の伯西、アルゼンチンにも劣り英米に比すれば僅に其十分の一にだも及ばず、我が前途猶遠しといはざる可らず候、今や太平洋はひとり政治上のみならず亦商業上の中心たらんとす、最も好地位を占めたる我帝國の一大飛躍を試みざる可らざるは方に此際にあり、努めざる可けんや。（仝　八月）

▲人口の蕃殖と國家の活力

佛國が其人口年を逐ふて減退するの傾あるは顯著たる事實也、然るに獨り佛

國のみならず歐洲に於ける所謂列強の孰れもが、其率に於て多少の相異こそあれ、皆同樣の運命に嚮ひつゝあり候、ウイルソン氏の説に據るに、英國に於ける人口の增殖の最盛なりし絶頂は實に一千八百七十六年にして、一年の增加率百分の三、六四なりしもの其以後に於て俄に著しき減退を始め、一千八百七十九年乃至一千八百八十三年の五年間に於ける增加率の平均百分の三、二六となり、次の五年間には減じて三、一二。次の五年間には更に減じて二、九八となり、此の如く遞減して窮已なく、最近に於ける一千八百九十九年乃至一千九百一年の間に於ては實に二、八三に減じ、增殖力の衰退著しきを見候、佛國の增殖力は更に小にして一千八百九十年より仝九十三年に至る增加率は二、五八。仝九十四年より仝九十八年には二、二三。仝九十九年より一千九百年間は二、一五に候、獨逸は增殖力前三國に比すれば較大なりと雖も、猶逐年減退に趣きつゝあるは爭ふ可らずして一千八百九十年に增加率四、〇一なりし者千九百年に於ては三、五九となり、米國も亦一千八百卅年に於て增加率二、八なりしもの一千九百年には僅に一、三となり候、吾人は斯かる所以の原因を推して、是れ即ち現代の所謂文明が齎らせ

る惡結果なりと斷ずるを憚らず候、何となれば則ち所謂文明の先進國に於て特に此の如き現象を見るは、一面に於ては彼の唯物的進歩が人民の生活程度を高めて生存競爭を激成したるより、子孫の增殖は重き負擔大なる苦痛を感ぜしめ、從つて之を避忌するの風起りたると、又一面に於ては文明の華耀は驕奢淫逸の習を馴致し、放逸不節制の生活を以て身躰を虚弱にし生殖力を衰へしめたるのみならず、甚しきは婦人が交際場裡に翩躚せんがために育兒の煩累を避けて、墮胎其他の背德を敢てする等いづれも皆增殖力減退の主因なるべく、而して此等の由て來る所を擇ぬれば、則ち所謂文明の惡化、之を然らしめたりと謂はざる可らず候、而して更に進んで之を論ずれば個人に於て生活力と生殖力とが正比をなすは疑ふ可らざるが如く、國家に於ても亦其國家としての活力は其人口の增殖力と正比を爲すべく、增殖力の減退は即ち其國に於ける衰運の兆したるをいひ得べく候、果して然りとせば歐米列强の增殖力減退は强盛を極めたるアリアシ種衰退の兆現れたるものにあらざるなしともいひ難く候、之に反して我日本の增殖力逐年遞加するは興復の運に嚮へる吉兆なりとも申す可く候、獨り

日本のみならず支那も亦大なる增殖力を有し候、果して然らば蒙古種今日の沈淪は永久ならずして、或は遠からずアリアン種を凌駕するの日あるべく、前途の希望洋々たるもの有り候、但忌はしきは露の增殖力亦甚大に、千八百九十二年より仝九十七年に至る六年間に四、七七の率より四、九五に增加し居り候、將來に敵として最も恐るべきは露國に候、亜細亜黄種の休戚を双肩に擔へる日本たるものの努力せざる可らず候、（仝 十月）

▲是亦文明の餘弊

太陽殁する事なしと誇言せる英國の隆盛も、ヴイクトリア時代を其子午線として漸く八ッ下りに傾きかけ居りはせずやと存ぜられ候、前いふ如く人口の增殖力が遞減しゆく者、既に退歩の萌せるとして見るべきのみならず、一般男子の躰格が脆弱となり、下級社會殊に其弊を受け、倫敦の就學兒童中躰質虚弱のため就學不適當なる者六萬人に及べりとの事に候、何れの時に於ても國民の躰質は文華の進歩と逆比例を爲す者、文明が齎らす驕奢逸樂は人を文弱にするものに候、但下級社會の躰質脆弱は生存競爭の奮闘の爲めの過勞亦其一原因たるべ

く、而かも是亦現代文明の餘弊たるは勿論に候、（全上）

金丹靈液

▲文明の進歩と人體の羸弱

矯僞矯飾なる所謂文明なる者は、人類を自然より阻隔し、從つて其本來の野性と天稟の本能とは之がために撓揉せられ、人類の躰質は所謂文明なる者の進歩と共に漸く羸弱に趣むきつゝあるは疑ふ可らず候、試に思へ、文明なる者は人に衣を着くべきことを敎へたり、而して之とともに人の寒暑の變に抵抗すべき所以の皮膚の力は漸く薄弱となりゆけるに非ずや、文明なる者は又人に屋を搆ふべきを敎へたり、而して之とともに人は自由なる外氣の呼吸を礙けられて呼吸の機能は漸く衰へつゝあるに非ずや、文明なる者は又人に火食を敎へたり、而して此の如くにして人は調理し鹽梅し、食ふに甘脆を貪つて、消化の機能は漸く害はれんとするに非ずや、文明なる者は又一方に船車其他の發明を漸く精巧にして人の躰軀を安逸ならしむるの法備はると共に、一方に業務の複雜を加へて人の精神を勞せしむる所以却て劇甚となり、神經機能の衰弱漸く著しきも

のあるに非ずや、文明彌々進んで人は彌々其自然に背き、彌々其自然に背いて、人身各種の機能彌々衰へ、各種の機能彌々衰へて、其病に侵さるゝ所以彌々多く候、或は文明の進歩と共に、醫療の術、亦進歩したりといふと雖ども、其醫療の術は寧ろ病症を逐ふて進歩するのみ、其本に溯つて病源を杜すに非ずして、其末を逐ふて發病を塞かんとするのみ、故に醫療の愈精巧になりゆくは、寧ろ病症其者が愈々複雑となりゆくを證するの外、病の增加に對して何等の効力有るものに非ず候、但近時肺結核に對する光線療法がフインセン氏に由て發明せられたるが如き、醫療の法が區々たるチンキ、エキスとランセットとの人爲的なる小細工より、直ちに自然の大化に任ずるに反らんとするの傾あるは較々喜ぶべき事實なりとすべく候、聞く頃者アン、サッカレー、リッチー女史なる人、泰西諸國の各都市に於ける高層家屋を以て住居に當つる風が、空氣の流通と光線の透入の十分ならざるがため住居人の健康を害すると多大なるを慨し、富豪等が一般公衆のため圖書館公會堂等を建設するは稱揚すべき業なるも、更に急を感ずるは開濶なる住居によりて空

氣と光線の恩惠を普及せしむるにありと、我國に於ても大阪等の如き人家網密のため、嬰兒の腦膜炎に罹りて斃るゝ者極めて多きは吾人の傳聞せる所東京市に於ても亦同一事實あり、見るべし、病氣は文明の進歩と逆比をなして增加するものあるを、

更に之を我邦全躰の上より見て、人口の二分を超へ、就中消化器病、神經系及五官病、呼吸器病に因るもの最も多し、此等三種の病症は文明の餘弊此が因をなせるにて、其多きは亦以て吾人の所見を確むるに足り候、（癸卯九月）

▲醫學上の自然主義

米醫デユウヰー氏は、凡て疾病の原因は血液の不純にあり、血液不純の原因は即ち消化の不良に在りとし、而して消化の不良は、吾人人類が自然に背ける人工的の生活法即ち定刻喫飯の惡習に慣れて、之がため偏へに食慾官能をのみ助長し、自然的飢餓官能を亡失したるに由るものにして、人は自然的飢餓官能の命ずる處に隨うて、始めて圓滿なる健康を保持し得べしとの說を以て、斷食の最良療病法たるを唱へ申候、其結論たる斷食の功過は醫學者の研究に委ぬべく

吾人の論ずる限にあらず、但氏が食慾を以て自然飢餓に別ちたるは、頗る吾人の意を得たるものにて候、予は其自ら依憑せる哲學的見地よりして、人欲の私を去つて自然の大公に復歸するを以て、人生の極致なり理想なりと信ずるものにて候、是を以て予は矯僞矯飾、餘りに智巧的なる所謂文明を排し、是を以て予は交換的にして、一種私欲の發現たる權利義務を根本思想とせる、現代の功利的主義を排し、而して經濟上に農本主義を信じ哲學上に唯心主義を信じ、宗教上に神秘主義を信じ、倫理上に禁欲主義を信ずる者に候、

故に予を以つて觀ればデユウヰー氏の所謂食欲は人間の智巧が馳致せる矯僞なり私慾なり人なり、眞の飢餓は自然なり大公なり天なり、自然の飢餓に任すは卽ち人の智巧私慾を去つて自然の大公に隨ふ所以と信じ候、且予は凡て進歩とは人類が此自然の大公に嚮往する謂なりと信じ、凡ての科學の進歩亦其歸着する所は、自然に復るの天地間の大眞理なることを吾人に示すに至るものと信じ候、デユウヰー氏の說は卽ち醫學上に於ける一種の自然主義に候、（仝 十月）

▲田五加草と所謂化學的檢索

此ごろ東京衛生試驗所に於ては田五加草（タウコヤ）の化學的檢索を行ひ、肺病の特効たるべき成分を認めざる旨を發表したり、吾人素と此等の事に關する專門家に非ざるが故に、此に對して敢て支吾を挾むの權能なしと雖ども、但吾人が此公表に就き先づ聞かんと要する所は肺病に對する特効の成分なるものが果して既に確定されありやといふ事是也、化學的何々の成分を有するものは肺病の適劑なりといふこと藥學上確定されありやといふ事是也、若し肺病に對する適藥未だ發見せられたるものあらずとすれば所謂肺病に特効あるべき成分とは何を標準にして之を認め得べきや、且既に一特効成分發見せられありとするも、更に他の成分の特効あるもの絶無なりといふを得べきや、是れ既に疑問に非ずや、且夫れ諸般の科學徒らに分析的に偏して綜合的なるを忘るゝは現下の通弊也、今田五加草の成分が化學的檢索の下に、樹脂、揮發油、蠟、鞣酸、無機鹽類粘液質、苦味質と分析され、假りに其各自が肺病の特効ある成分を含まずとするも、之れを綜合して一の田五加草なる具體物となれる時、果して其綜合したる成分は各箇々々の成分と其作用を異にせざるべき乎、各箇々々の成分が肺病に特効

なるべき作用なきが故に、綜合したる成分も必ず其作用なしといふを得べき乎、更らに之を論ぜん乎、衛生局が分析したる成分中の粘液質といひ苦味質といふものゝ類果して今日に未だ分析せられ得ざる或成分を含み居らずといふを得べき乎、是等も亦學問上の大なる疑問にあらずや、吾人は敢て世の有難連と共に必ず草根木皮に渇仰せんとするものにあらずと雖ども、徒らにハイカラ振りて一切の事を唯分析的にのみ説明せんとするの學問上の缺點たるべきことを信ずる者なるが故に、吾人は猶衛生試驗所の發表せる所に慊焉たる者あり候、（甲辰十月）

俗情凡趣

▲救世軍の克己週間

予は其自己の即ち神たり即ち佛たるを自ら信ずるの外、凡ての宗教を信ぜず、予は宗教家の指斥する無神論者たるに外ならず候、然れども予は又凡ての宗教を拒まず、其迷信的なる強制的なる信仰箇條を除き去りたる其精髄に於ては、

我は天理教蓮門教の夫すらにも光明を認むる者に候、最も活動あり、氣魄あり、實行的方面に於て所謂靈の救に努むる、耶蘇法華とも稱すべき救世軍の克己週間は例年十一月一日よりに候、濁慾の塊肉なる人間が、一日よし二日よし一週更によし、精進潔齋其己に克ち其人欲を節して、少くとも神（人欲の煩惱を解脫せる我は之を神といひ佛といふ）の清淨無垢に遜づく、亦好からずや、一たび入り一たび出づ、猶入らざるに勝る、克己週間は一週に過ぎざるも、猶一日も克己なきに勝る可し、人其克己を一にして渝らざるに及んで、人は即ち其人たる所以に克ちて之に超越する者にして、神たり佛たりといひ得べく候、然れども千里は一歩に始まる、一週の克己、必ずしも救世軍の信徒としてにあらざるも、亦天下の人が金氣肅清人心收斂の好時期に方り、自克反省の功を養はれんことを望み候、（癸卯十一月）

▲人形を負ひて情死せる娼婦

東京洲崎に一娼妓の、其平生愛翫せる長二尺許の人形を背負ひて、客と偕に毒を仰ぎて情死せる者あり、冷酷なる社會は之に對して其痴を嘲けり其愚を嗤

ふべし、左れども吾人は其事の甚だ詩的にして、而して其裏面に痛切なる悲慘の含まれたるを想ふて同情に禁へざるものあり候、蓋し此等賣笑の婦、彼も亦人なり、然り女なり、彼等と雖ども亦女としての優しき情と溫かき心とを有せり、但不幸にして火宅に落ち風塵に混じ、辛らき浮世の波風に揉まれ、なぶられて、其婦道と淑德との上には汚玷を印せるを免れずと雖ども、而も猶其本能たる慈母的愛情（子を愛する）と女性的柔情（男に賴らんとする）とは全く硬化し冷却せられ得ざるものありて、時に觸れて則ち發洩するものなる、此例を以てしても見るに足るべく候、人或は娼婦、賣笑の婦たる彼が情死するを矛盾なりといはん、然れども寧ろ情死なるものが、毎に此娼婦に多きは何のためぞ、彼等の苦痛なる境遇に加ふるに、社會的桎梏は虛僞なる形式なる金婚、門閥婚を正當なりとすれど、自由戀愛の眞情よりする配偶を礙げて遂げしめず、其前途は絶望の闇黑のみ、彼等の死を以て纔に慰安を求めんとする、寧ろ甚だ憐むべきに非ず耶、且又彼等は不幸にして娼婦たるが故に、生理的に生殖の上に不具者となり、又其母的本能を滿足せしむるに希望なきや、乃ち又已むを得ずして其

痛恨を一土偶の上に寓せて、此に滿腔の愛情を灑ぐ也、彼の娼婦の徒が多く、人形の類を愛翫すること子の如きものあるは彼が絶望に於けるセメてもの心やりにして、此例に於けるが如く、人形をも其死の道連とせんとするに至りては其情洵に慘の極なりといはざるべからず吾人は此一娼婦に對して一掬の涙を惜まざると共に、彼をして此の如きに陷らしめたる現代社會制改善の急なるを愈々感じ候、（全上）

▲男女氣質の相異

男は氣を以て勝る者、老うるに隨うて其氣銳漸く銷磨すれども、女は情を以て勝る者、老うるに隨うて其情熱冷やかとなりゆく者に候、故に老うるに隨うて男は圓熟すれども女は凝晶し、男は摯實に遜づけど女は酷忍に黠ひ候、老いたる男に親しむべきが多く、老いたる女に憎々しきが多く、嫁虐の、舅に少しくて、姑に多きも此所以に候、（全上）

▲流行極樂

流行は愚者と女の本事に候、輕き物躰は早く流る、流行を趁ふは其人の輕浮

膚淺を表示するものに候、俗を超えて時と移らざる、剛健の意思と廉正の操守あるもの、始めて之を能くすべく候、節晩秋に入りて、呉服屋と新聞紙と、衣更の新流行紹介に忙はしく候、但此等の事吾人窮措大と風馬牛なり、予は寧ろ弊褞袍の由に與すべく候、（全上）

▲華と實と色と香と

華さく多ければ實ること少く、色好ければ匂高からず候、豈に獨り花のみならんや、人事亦然り、故に古聖は巧言令色に仁寡しといへり、聞く歐羅巴に生長する四千二百餘種の花の中、芳香を有する者は四百二十種にして、之を其色によりて區別すれば、白色の花に匂ある者最多く、其千百九十四種中五分の一弱あり、黄色のものは九百五十一種中七十七種にして即ち十二分の一強、赤色のものは八百廿三種中八十四種即ち十分の一強、青色のものは五百九十四種中三十一種即ち二十分の一弱なりと、果然匂の最高きは即ち色の純なるものにあり候。（甲辰八月）

▲天才の靈筆と翻譯の惡化

水蔭飜案の「オセロ」を覗き申候、終りの二幕を見たるのみなれば、全局に就きての評は下し難けれど、大向の客受も宜き様にて又吾等の見たる所も面白く候、左れど其面白きは藝の妙なるがために非ず、脚色の妙なるがために非ず、原著の妙なるが爲めに候、藝の上よりいへば室鷲郎は瘋癲患者の如く、伊屋剛三は輕薄才子の如く、科音は高等淫賣の如く、性格の表現は全然失敗し居り候、脚色の上よりいへば、吾が見たる僅に二齣中に於てすら不合理不自然の點少なからずして、總督寢室の場に此悲劇のカタスロープの唯一因緣たる手布を科音が現在自らの手より總督に渡しながら、健忘病者の如く忽ち忘れ果てゝ、之が爲めに死を招いて猶想起し得ざる、若くは又洪辰門前の場が室の嫉妬を激し後段のカタスロープを迫出す緊切なる因緣となり得べきを、櫓取刃傷以外無意味の一齣となしたる、杜漏の大なる者に候、此の如く妙ならざる技藝との上に演ぜられて、而かも能く惻々として人の感を動かし、觀る者をして涙を歸結（カタスロープ）の悲慘に揮ふを禁ぜざらしむるものは、畢意是れ時と處とを超越したる、大天才大詩人の神筆、

能く人情の微に入り、心靈の奥に觸るるものあり、飜案の惡化、技藝の惡化、可惜金を化して砂となせるも、而かも猶掩ふべからざる一脉の靈光、古今を異にし東西を殊にして、猶髣髴の裡に認むべきものあるに由るに外ならざるべく候、（癸卯九月）

▲欽仰すべき超俗の風貌

トルストイ伯が其堅固なる宗教的信念より出でたる博愛主義の主張を操守すること確く、實踐躬行其獨を愼み、其風を高うして、一代の宗師たるは何人も知る所なるが、伯が其誠を推して人に及ぼす好個の逸話あり候、或時一偸盗伯の家に忍び入りて薪を窃み去らんとして其重きに堪へかね持ちあぐめる折、偶々伯の認むる所となりしに、翁は更に此を咎めざりしのみならず、其盗賊に力を添へて、首尾克く之を持ち去らしめたりとの事に候、當世の人は之を聞いて或は愚に近き行なりとせんも、是れ胸中に一毫彼我の私念を挾まず他を視ること猶我の如くする大公至仁の伯が理想の實行にして、超俗の風貌掬するに餘りあり候、（仝 十月）

▲英雄回首卽神仙

孤軍奮鬪能く英の大軍を駈け惱まして、驍名一時に高かりしッランスヴアールの猛將ジューベルト將軍は劒を釋てゝ鋤に代へ、墨其古の邊陬に駝鳥飼の閑日月を送るべしとの事に候『英雄回首卽神仙』なる者なるべく候、（仝上）

▲天空海濶の至樂

露帝の詩なりとして傳へらるゝ所其調凄凉哀切を極む、曰く

我が幸福は夜半に生ず、只暗黑の裡に生ず。
我れは人生の喜びを失へり、只力なく憂鬱の間に彷徨ふ。
我が精神は悲みて、朦朧たる雲霧の中に何物かを求むるが如し。
我は精神の平和を慕ひ且禱り且煩悶すれど、此世にありては望まれじ。

想ふに是れ或は好事者の手に成れる者なるべしと雖ども、然れども元來神經質にして悲觀的なる露帝今日の心事を忖度するに正に此の如き者あるを疑はず候、歐亞兩洲に蟠踞する大帝國の九五の尊位を踐みながら、内に近親の覬覦するあり、外に革命黨の危害を加へんとするあり、疑惧身を去らず、憂心忡々常

に薄氷を履むの想をなしつゝあるに、更に連戰連敗の打撃を受く、ザールたるもの蓋し沈鬱幽憤の感に禁へざるものあらん、嗚呼天日炳たり、其心ひとり暗黒に彷徨ふ、不幸なるザールよ、璎珞を以て飾れる爾の帝冠は鐵の如く爾の頭に重く、棘の如くにして帝冠王位果して何の値ぞ、天空海濶鳶飛び魚躍る、這裡の至樂は唯江湖に放浪する者にして始めて之を享け、始めて之を解するを得べきのみに候、（全上）

▲千載稀に出づるの人、

梅幸前きに世を捐て、今や又團洲の逝くを聞く、我は、政界に大隈、伊藤の二立物を失ひたらんよりも、寧ろ梨園に此双璧を失るを痛惜するものに候、政界に大隈伊藤を失ふも、我邦家の進運は之がために何の損ずる所莫るべし、否却つて之がために益する所あるやも亦知る可らず、但技藝界の天才に至つては、天の大靈智大靈能を以てするも、百年にして、千年にして、僅に一人を出だし二人を出だし得るに過ぎざるのみ、此稀に出づるの天才を會今之日に得て、親しく其技を觀、其妙を味ふを得たる、是れ洵に今之日の珍とし、今之人の福と

すべき所、而して此再び逢ひ難きの珍と福とを失ふは、今之日今之人の大なる損失なること、豈に一伊藤を失ひ一大隈を失ふと日を同じくして較す可きに非ず候、且夫れ政界や學界やに於けるものは老ねて而して迂となれど、技藝は老ねて愈々熟すべし、政界に於ける老而迂なるの人の逝くは猶可也、技藝界に於ける老而熟するの人の逝くは婉惜に禁へたり、嗚呼梨園の双璧相踵いて逝いて其入神の技復觀るに由なきは悲しむべきの至りに候。（全 九月）

▲文芸閣逝く

逝水回らず、浮雲止まらず、嗚呼芸閣文先生逝く先生名は廷式清國江西省の人、予の曾て滬上に客游せしの日、先生官を罷められて亦滬上に放浪せり、故を以て往來益を受けしこと多し、先生資性磊落拘はらず、後生予の如きものを待つに猶且墻壁を設けず、一見舊知の如く、即ち筆を援つて談論を試む、其學儒佛に往來し博覽達識其隨抄隨筆の一書の如き殆ど等身なり、議論口を衝いて出て又善く人を罵る、其利に淡く且邊幅を飾らざる清人中稀に見る所、惜哉其簡傲豪放なる守舊派の容る所とならず、竟に卓落の材を抱いて數奇の裡に逝け

り、哀夫、嗚呼其人既に亡うして、而して其肥大の軀を仰いで口を開いて呵々大笑するの態、今猶宛として目に在るを覺え候、（甲辰十月）

▲永圖遠見を少げる國民

日本は個人としては嘘許りいふが、國家としては又馬鹿正直過ぎるとの井口少將の言、よく邦人の弊に中れる者に候、但國家として馬鹿正直なるは形式の儀禮に拘々するが爲め、個人として嘘吐きなるは表面を糊塗せんが爲め、共に邦人が膚淺輕浮にして深沈痛刻なる永圖遠見を少げるを證する者に候。（全上）

小品横議

り、哀夫、嗚呼其人既に亡うして、而して其肥大の軀を仰いで口を開いて呵々大笑するの態、今猶宛として目に在るを覺え候、（甲辰十月）

▲永圖遠見を少げる國民

日本は個人としては嘘許りいふが、國家としては又馬鹿正直過ぎるとの井口少將の言、よく邦人の弊に中れる者に候、但國家として馬鹿正直なるは形式の儀禮に拘々するが爲め、個人として嘘吐きなるは表面を糊塗せんが爲め、共に邦人が膚淺輕浮にして深沈痛刻なる永圖遠見を少げるを證する者に候。（仝上）

縱橫小品

藻議

露國衰亡論

世界の大勢は歸一に嚮ふ、封疆相限りて列國が相角逐する武力的の爭鬪は、之に較ぶれば更に共通平和の性質を帶ぶる經濟的競爭によつて代はられんとす、現下の勢は財力を本とせる武力の競爭なり、故に偏に武力を賴み、軍事を主とせんとするは、大勢に逆ふ也、大勢に順ふものは興り、之に逆ふものは亡ぶ、武力の邦、過去に於ては或は興隆ありたらんも、將來に於ては衰亡あらんのみ、露が世界統一の大野心否寧ろ大空想に驅られて、偏に武を張らんことを力め、財力を之に傾注して悔ゐざるの狀ある、彼が一頓蹉躓するの秋夫れ或は必ず來るべきか、先是露が西比利亞を經營するや專ら武力によれり、而して其翼を展べて滿洲に南下せんとするや、露と雖ども世界の大勢が漸く經濟的に向はんとするを認め、則ち西比利亞鐵道と東淸鐵道とを布設し、經濟的經營の外粧を以て武力的經營を遂行せんとす、而かも露立國の本既に武力的侵略にあり、故に鐵道經營なる者、亦主として軍事の用にのみ供へんとするの傾あり從て其經濟

上の利害を藐視するを以て、費す所甚だ大なれども獲る所極めて小に、露の財政は之がために紊亂す、彼の西比利亞鐵道に就て之を見るに起工以來其費す所既に七億五千萬留の巨額を投じたるに拘らず、之を經濟的に閉鎖せるを以て旅客貨物極めて尠く、支出は毎に收入に償ふ能はずして、國庫より莫大の補塡をなすの已むなきものあり、況んや其鐵道に要したる巨萬の資本の其一部は增租の斷行に據れりと雖ども、然れども其大部分は元利の償却を必要とする公債に據れるをや、露の一新聞に記する所の一千九百一年に於ける鐵道收支決算表によるに、鐵道公債の利子並に償却額は實に一億三千六百萬留に上り、而して缺陷額九千百五十萬留に及ぶといへり、果して然りとせば露は借金政策を以て不生產的なる經營をなしつゝあるものにして、西比利亞鐵道は軍事上には或は有用なるべし、經濟上には寧ろ露の財政を紊亂するの病源たり、露は今日の立國國是を革め、武力偏進の弊を悛めざらん限りは、露は武力に成功して、財政に破產すべく、抗し難き世界大勢の波瀾は露を拍つて之を其根基より撼蕩せん、露は則ち衰亡あらんのみ、

更に一步を進めて之を論ずれば、露は極東經略に殆ど其全力を注ぎ、而して極東經營の目的は實に滿洲を占領して之を其富源となさんとするにありて、露が慘憺たる經營を以て此の如く不生產的なる西比利亞及東淸鐵道の布設を敢てせるもの、滿洲開拓より生ずる前途の財源を見越したればこそ也、故に彼にして滿洲の占領を實にする能はざるあらんか、此を豫定して鐵道建造に投下せる巨億の資本は盡く徒費となり了るべく、是に至つては左なきだに紊亂せる露の財政は、此がために募れる公債の償却のために其財力を枯竭し、一蹶復起つ能はざるの否運に陷らん、露の興衰實に繫つて滿洲の占領と否とにあり、故に尋常口舌の抗議によつて露をして滿洲を拋棄せしめんことは、到底望み得べきの事に非ず、日本にして眞に露の勞力を滿洲に一掃し、其野心を杜絕せんとせば、口舌の折衝固より爲すなし、滿韓交換の協商亦甚だ不可、唯一戰あるのみ、戰ふて而して露をして滿洲を拋棄するの已むなきに至らしめば、露は此によつて獨り滿洲の地を失ふのみならず、極東經營の野心を遂げ得ざるのみならず、彼の衰亡は實に此より始まらん、武力の邦衰亡して世界の平和漸く庶幾すべけん、

露をして其志を滿洲に恣にせしめんか、彼は太平洋に稱せんか、露雄を太平洋に稱せん、隆々たる日本の進運は之がために大阻礙を受けん、否らずして之を滿洲より逐はん乎、彼は財政上の破産とともに屏息復爲す所ある能はざらん、吾人は帝國將來の進運の大局上より觀て、將又世界大平和の催進の必要に、日露開戰の今日に已む可らざるを信ずる者也、

續露國衰亡論

露は其所謂膨脹政策のため入るを量つて出づるを制することを忘れ、爲めに財政上非常なる否運に陷りつゝありて、彼にして若し滿洲を捨てざるの已なきに至らん乎、其衰亡は此より始まるべきは前に論ぜる所、今更にヲスラボシコデンエ雜誌が報ぜる、露國の秘密閣議に於ける當時の藏相ウヰッテ氏の財政報告なる者に據りて之を見るに、露は其鐵道經營のために財政上大たる損害を被

りつゝあるは爭ふ可らざる事實なりとす、而して就中其損害の最も大なるものは實に西比利亞鐵道にして、即ち其鐵道經營を三期に別ち、第一期（一八八五—一八九四年）は私設鐵道の買上及鐵道改善の爲に巨額の國庫支出を要したりしも、第二期（一八九五—一八九九年）に於ては作業の利益常に支出に超過し稍順境に嚮へり、而るに西比利亞鐵道の起工は此に對して一頓挫を與へ收入超過は漸次減少の傾向を呈し、第三期（一九〇〇年以後）に入るに及んで鐵道は全く國庫の損害に歸するに至り、一千八百九十九年には收入超過猶百万留なりしもの、一千九百年には二百六十萬留、一千九百一年には更に一躍して三千三百九十萬留の支出超過となり、一千九百二年には損害額約四千五百萬留に達すべき豫定にて、今一千九百三年には東淸鐵道の損害を加へて計六千萬留に達すべく、明年は此東淸鐵道の損害更に倍加すべくして、其國庫の損害は七千萬留に及ばんとすといふ、見るべし、露鐵道經營の失敗は實に西比利亞本支鐵道の布設に始まれることを、而して更に之をウヰッテ氏の極東巡回復命書に見るに、露が西比利亞鐵道本支線敷設のために僅々數年間に糜せし所七億五千八百

九十五萬五千九百七留に達し、更に此に急施を要する貝加爾湖迂回線敷設の費用と、鐵道布設に附帶せる極東接壤地の官吏の增員、兵備の充實、艦隊の增遣、及び要港修築等の經費を加算せば、實に十數億以上の巨額に上るべしといへり、斯の如く巨大の資額を投じて經營せる鐵道にして、而して此より贏け得る所は却て七千萬の支出超過なるのみなりとすれば、露は極東鐵道經營の爲めに殆ど其一國の財力を傾注して悔ゐざるものにして、而して此鐵道經營や滿州經略を得て始めて其意味あり其效果を見るべきものなりとす、ウヰッテ氏が『今日投ぜし幾多の犧牲は國家百年の長計より見れば敢て惜しむに足らず』といへるは、正に今日の報償を滿州の富源開拓によりて得んと期するにあるや勿論にして、露にして若し滿州の經略を實にするを得ざるの已むなきに至らん乎、彼の西比利亞鐵道布設に投下せる十億萬の財帑は烟散霧消竟に之を回收するに途なくして、此によつて露が被りたる財政上の大創傷は到底癒療に由なく、露の命脈は其創傷よりする流血のために漸く衰滅に就かんのみ、

且夫れ露が此鐵道經營に費したる所の資本は、概ね國債殊に外債に仰げるもの

のにして、露の鐵道公債十億八千三百二十五萬留中十億六千二百五十萬留は實に外國債に係るものなりと云へば、露の是がため支拂ふべき利子少くとも四千萬に近かるべく、此に鐵道の損害を加ふれば露は則ち鐵道殊に西比利亞及東清鐵道のために、其外債の元金を据置にして、猶年々一億萬以上の損害を財政の上に被りつゝあり、故に此缺陷を補塡せんが爲には露は之を增稅に待つか、若くは更に外債に仰がざるを得ずして、而してウヰッテ氏自ら謂へる如く其自國民の負擔已に其極點に達し、國內の經濟狀況は復租稅增徵の餘地なく、寧ろ此際租稅の低減をなさざる可らざる地位に立てりとせば、露の此際爲すべき所は更に外債に次ぐに外債を以てして其財政は愈々紛糾を加へ其創傷は益々大となるあらんのみ、

而して露が此の如く其財力を傾けて西比利亞鐵道の布設に投し、財政の此の如く糜亂するをも顧みざる所以の者は何ぞ、他なし、ピーター大帝以後歷代相承け、相紹いで今日に至れる世界統一の大雄圖を遂行せんがため、其南下の途を求むるに外ならずして、彼は之を黑海に求めて得ず、バミールに求めて得ず、

愈々東して終に之を極東に求めんとするものにして、而して極東に於ける彼が南下の途は朝鮮に由る乎、否らざれば滿州に由るか、二者其一に出でざる可らずして、朝鮮は日本の經營既に牢乎として拔く可らざるものあり、已むを得ずして滿洲に由るの途を採れるなり、故に彼若し滿洲に於て亦其進路を挫かれんか、彼は此以東復南下の不凍港を求むるに由なくして、彼の雄圖は玆に大頓挫を來たさざる可らず、故に日本にして露をして滿洲占領を拋下するの已む莫からしめん乎、此に依て露は啻に其ピーター大帝以來承繼せる大雄圖が一蹶するのみならず、此がために國力を傾けて投下せる財資は、其財政恢復の上に唯一の恃とせる滿洲富源開拓の希望水泡となり、竟に回復するに途なかるべくして、例へば重力一方に偏せる者、其重を失へば則ち傾覆を免れざる如く、露は其財政のために國力の傾覆を免るゝ能はざらん、國力一たび傾覆す、其外債は愈々低落して、利子を拂ふことは愈々多からざる可らず、而して其外債の償却と利子の支拂のために要する財源は之を國民の負擔に求むるの外なかる可らずして、左なきだにウヰッテ自が明言せる如く負擔の苛重に苦める國民は、更に政府の

誅求を受くるに及べば、怨嗟に踵ぐに內亂を以てすべく、外に破れ、內に亂れ、彪大なるザーの國は終に土崩瓦解收拾す可らざるの運命を見ん、

縱ヒ滿州の失敗が、直に露の衰亡の基とまでには至らずとするも、露にして既に滿州に一蹶せば、復太平洋に其不凍港を獲取するに途なきを以て、彼は已むを得ずして、更に西に反りて太西洋に之を求むるの外なし、而して露にして若し果して那威の地を侵略して北海より太西洋に出づるの策を劃せんか、是れ獨り歐洲列强の權力平衡を攪亂するのみならず、米國も亦枕を高うする能はざるものありて、歐米連衡して露に打擊を加へ、以て其谿壑饜く無きの欲を懲らさん、此の如くにして露は東に出づること得ず、西に出づること亦得ず、其巨腕終に揮ふに地なく、困頓して自滅するの外なきに至らん、

何れより見るも、今日に於て露の勢力を滿洲に一掃するは、露の世界征服的大野心を遏塞する所以にして、ひとり我國自衛の爲のみならず、淸國保全のためのみならず、朝鮮獨立の爲めのみならず、更にひとり極東の平和の爲のみならず、實に世界の大平和の爲めなり、而して之に當るの重任を帶ぶるものは實

に我が帝國ならずや、我帝國たるもの今に於て因循事を誤り、露をして一たび其の志を肆にせしめんか、是れ彼に大雄圖大野心を展開するの機を與ふる者にして、露をして世界の覇王たらしむるか、將た疲弊衰亡の弱國たらしむるか、繋つて實に我邦今日の決心如何にあり、機逸す可らず、彼を掊克する今日を措いて夫れ何の日ぞ、

近者露が清廷に提供せし案件なるものを見るに、露は名を盛京を退くに籍りて姑く我の鋭を避け、而して實に吉林黒龍の間に盤踞して、他日捲土重來の地盤となし、且牛莊の關稅と撿疫とに干渉することに由つて一種の保護貿易策を採り、鐵道經營より起れる經濟上の失敗の恢復のために徐ろに其財力を養ひ、而る後また大に動かんとするものゝ如し、是れ露が、其偏に武力的膨脹を力むるの財政的破産に終るべきを悟りたる政策上の一變動にして、而かも露の眞意竟に滿洲奄有の宿圖を棄つるに非ざること勿論なれば、我は此の如き姑息の緩和に誤られて、百年の大計を決するの期を失ふ可きにあらず、我は彼にして其非を悔ゐ、全く滿洲經畧の志を棄てざる限り、武力に訴へても彼を滿洲の野より斥攘せざる可らず、（癸卯九月）

天佑の過信

既に天佑をいふ、則ち亦天棄をいひ得べきてある、開戰以來我海軍の連戰連勝にして、三ヶ月餘の長きに渉り、數次の旅順攻撃を以てして未だ一艦艇をだも失ふこと無かりしを天佑なりとせば、旅順港既に殆ど閉塞せられ、敵艦既にその勢力の大半を殺ぎたる後、五月に入りて十二日より十五日に至る僅々四日間に、第四十八號艇を失ひ、宮古を失ひ、更に而かも十五日の一日間に初瀬吉野の、最精鋭なる一大戰闘艦と、日清役以來歴史あり名譽あり、「花は櫻の」と唱はれし一巡洋艦とを失ひたるは、之を天棄なりといふべきか、然れども飜つて之を思ふに天佑なる者は必ずしも天佑にあらず、天佑は人力の至り極まる所を竭くして始めて待つべき者である、天棄なる者は必ずしも、天棄に非ず、天棄は人力の至り盡くさゞる所ありて始めて降るべき者である、故に天佑天棄之

を天にありといふも、實は人自らにあるのである、所謂天佑あらば是れ其功は人にあり、天業あらば其罪は亦人にあるのである、今夫れ人力の至り極まる所を竭くして而して其功を天の佑に歸するは謙抑の德猶可なり、人力の到り盡きざる所ありて其咎を天の業に嫁せんとするが如きは斷じて不可である、今回の初瀨吉野の沈沒の如き、之を揣るに必ずや人力の到り盡さざる所ありしものなるを想ふに難からずである、

吾人が人力の到り盡くさざる所ありといふは、敢て艦の操縱が何の、善後の措置がどうのといふのでない、吾人は專門家に非ざるが故に此の如き物質的器械的方面に對して容喙すべき權能が無い、吾人の言はんと欲する所は是で無い、夫れ安きに慢るれば則ち慢ずるは人情の免れ難き弱點である、慢ずれば則ち心に弛みを生じ、心に弛みを生ずれば則ち事に當りて懈を生ずる、懈は則ち事を敗る所以である、彼の事の敗るゝの往々危きの時即ち艱難の時に於てせずして、却つて安きの日即ち得意の日に於て之有るは是が爲めである、何となれば則ち人、危きに處するに際りては氣充ち心張り造次顚沛、唯其危きに處るを念

として之に對するの用意を怠らざるに察知するの明あるを得て、禍の生ずべき餘地なけれども、一旦其危局去れば張詰めたる心の緩み、凝りたる念の散ることの幾分あり多少あるは、如何に深沈なる人物と雖ども避け難き所にして、此心の緩み、念の散ること縱令寸毫なりとも之有らば、其思慮亦之に應じて其明透を缺き必ず多少の昏昧を來たすは免れざるべく、禍機は即ち此時此裡に伏して、竟に不慮の災蘖となつて發するものである、否之を不慮の災蘖といふは誤てある、人慮及ばざるの災蘖には非ずして人慮到らざるの災蘖である、天の爲せる蘖には非ずして、人の爲せる禍である、其責を受くべきものは天に非ずして人である、

今回の初瀨吉野の變災に關して吾人の言はんと欲する所は即ち是である、今回の變災に對しては局に當るもの其咎なき能はず、

敵が旅順の天險に蟠踞して、精銳なる艦隊十萬噸以上を擁し、其勢殆ど我と相伯仲するの際に於て、我はあらゆる危險を冒して之を攻擊した、驅逐艦の夜襲、閉塞の奇策等聞くさへ人をして戰慄せしむるが如き危險を冒して之を遂行

した、而かも此間に於ける我の損傷は甚だ少に、人を損ずること僅に百を以て數ふるを得べき程て、而かも其奏功は甚だ大に、殆ど敵艦を殲滅するに至つた、而かも何事ぞ此敵艦既に業に殆ど殲滅に至りたる今日、却つて我が海軍の變災相踵ぐを見んとは、抑も此の如き所以の者は我が將士が較々連勝に恃れて其意驕り敵を侮るに至つた結果てはあるまいか、吾人は我が將士の忠勇を信じ、勇敢を信ず、而かも彼等とても人てである。最初に於てこそ歐人との交戰は初めてなり、且敵は世界の最強國を以て傲れる者なり、我海軍全躰を擧げて必死の覺悟あり、油斷なく弛みなく奮鬪したれ、其頑強なりと信ぜし敵が案外にも以外にも朽木を拉くが如く脆く敗北し了りたるに至ては、先きに張詰めたる氣勢の鋭かりしだけ、夫だけ張合ひ拔けの感もあるべく、又自ら得意驕泰の念萌し來ることも亦禁じ難い所である、氣合の充ち滿ちたる時にこそ一矢能く巖をも射徹すの勢あれど、氣合一たび弛み緩まば強弩の末魯縞を穿たざるの有樣となる我海軍今回の失敗は畢竟此程に外ならぬのである。

二度あることは必ず三度といふ諺は、人の安きに恃るゝを警めて、禍は之を

其早きに警戒して、其未だ大なるに及ばざるに防ぐ可しとの意を寓したもので ある、抑も禍の相踵いで起るに當りては、必ず其微なるより漸く其大なるに及ぶものである、何となれば其始めに於て禍の大なるものに遭へば、人は直に自ら警戒する所あるを以て、能く禍の繼ぎ起るを絶つを得れども、其始めに起れる禍甚しく大ならざれば、人は早く此時に警戒すること能はずして、愼密の用意を等閑にし、終に漸く大なる禍を馴致するに至るが故に、其小なる者より大なるものに及ぶの結果を見るのである、且又其禍の始めて起りし時、猶人の安きに恃るゝの度薄きが故に、從つて愼密の用意の存するものありて、たとひ其起りたる禍は大なりとするも、其結果に於て害を見ること少なきを得れども、其第一の失敗に戒むるを爲さずして依然として安きに恃るゝが如きものは其用意の愼密の度、時とともに彌々減ずるが故に、其禍害の度は之に反して彌々增大しゆくは免れざる所である、『三度目は大事』なる諺は卽ち之をいふのである、之を神秘的にいへば天は其禍の未だ大ならざるを先づ人に降して、人を戒め、而して人の之に對して尙愼まざるに於て、更に大なる禍を降すものとも

見るべきてある、然れども前にもいへる如く是れ決して天の爲す所に非ず人の自ら招く所、其責は全然人にありて所謂天といふが如きものの關せざる所、天道に非ずして人理である、所謂天佑に忸れたる我當局は此人理に於て到り盡さざる所ありて、終に禍を二たびし三たびし、一回は一回より其禍害を大にして、終に初瀬吉野の沈沒の不幸を見るに至つたのである、

彼の金州丸の轟沈されたる、既に我海軍の連捷の安きに忸れて稍々懈る所ありしを見るべく、陸兵を搭載せる運送船を何の護衛なく夜間單獨の航行をなさしめたるが如きは、餘りに浦鹽の艦隊を見縊り過ぎたるものといはねばならぬ、且夫れ浦鹽の艦隊が元山に入りたると、我第二艦隊が元山を出てたるとは、其間殆ど髮を容れざるの差にして是がため唯に北海に陸梁する敵艦隊を殲滅する好機會を逸したるのみならず、却て彼をして其兇手を我に加へしむるの大不幸を見たるは、たとひ上村司令長官の公報にいふが如く濃霧の爲に妨げられたるものありとするも、猶我艦隊が計策の愼密と用意の周匝を缺ぎたるの過は辭す可らず、蓋し機會なるものは偶然にして來り、偶然にして去るものにして之を

捉へ得ると否と亦偶然の運命にして然るが如きも、決して然らず、機會は天の興ふるものに非ずして、人の爲る所である、人力の到る所を竭して、則ち始めて機會生ず、能く機會を捉ふるとは卽ち能く機會を生ずるの謂である、我當局が彼の間髮を容れざる機を逸して、却て金州丸擊沈の不幸を招きたるは、浦鹽の艦隊は全く我武威に慴伏して、敢て出で來り得ざるものとの高を括り、彼が逆襲を試むる場合を豫想せざりし我計策の缺陷の結果に外ならぬのである、今少しく愼密に今少しく周匝に意を用ふる所ありたらましかば、或は敵艦は元山に入るに及ばず、況んや金州丸を擊沈するに及ばざる以前、我艦隊の爲めに粉碎せられたらんも亦未だ知る可らずである、

金州丸が夜間單獨に航行せるは、餘りに敵を侮りたるなり、陸兵を載せたる運送船が、何時襲擊を試み來るかも計るべからざる敵艦隊を前に控へて單獨に航行せるは、餘りに大膽といはねばならぬ、輕率といはねばならぬ、浦鹽と元山との距離は二百四十八海里に過ぎぬ、卽ち東京神戸間（三百四十七海里）よりも一百海里許りの近距離である、假りに敵艦隊が一時間十節の速力を有する

ものとするも僅に一晝夜を以て達し得べきで、更に況んや敵艦は何れも其倍以上の早さを有する快速力のものである（グロンボイ、二十節、ユーリック十八節八、ボツカチイル二十三節）、左れば優勢なる軍艦に非ざる以上元山附近の航行の危險なるは言を待たざる所、然るに金州丸が單獨の航行を敢てしたるは、此れ萬一否寧ろ萬之有るべきの危險を等閑視したるものである既に備ふべきの危險に備へず、其遭難は決して不慮の天蘖なりといふ可からず、固より金州丸は始より單獨の航行をなした者ではない、武部司令の率ゐたる水雷艇の一隊が之を護衛し居たるは公報の示す如くである、然れども此の如き優勢なる敵前に於て僅に一水雷艇隊の力以て之を護るに足るべきであらうか、

金州丸の掩護の爲めに僅に水雷艇隊一を以てしたることは、啻に我當局の用意のある所を見ざるのみならず、寧ろ其不用意を證するものである、試みに浦鹽艦隊の武力如何を顧みよ、其艦種は固より一等戰闘艦にあらずと雖ども、而がもボツカチイル（一等巡洋艦六六七五噸）を除く他の三隻は孰れも其噸數に於て我富士八島（富士一二六四九噸、八島一二五一七噸）に匹敵すべき堂々た

る裝甲巡洋艦である（グロンボイ一二三五九噸、ロシヤ一二一九五噸、リユーリック一〇九三六噸）而して其最も劣れるボツカチイルすら其快速力を有する點に於て最良のものと稱せられてゐる、更に其備砲の上より見るも其三裝甲巡洋艦は孰れも我が裝甲巡洋艦に優つてゐる、露の三艦は何れも八吋砲四門、六吋砲十六門なるに對し我が裝甲巡洋艦中の最優勢なる淺間、常磐、出雲、磐手の諸艦（噸數各九七五〇）孰れも八吋砲四門六吋砲十四門を備ふるのみである、故に敵の此艦隊と能く相當つて必勝を期せんには我が精銳なる淺間以下の四隻を以して猶足らずである、（敵は其四隻の總噸數四二一六五噸にして我は四隻の總噸數三九〇〇〇噸なり）、我が裝甲巡洋艦の精銳四隻を以てして猶遜色ある此敵艦隊に對し、僅に四隻より成る吵たる一水雷艇隊以て能く之れに備ふるに足らざるは智者を待ちて後知るべき所でない、故に金州丸掩護としては一水雷艇隊は何の用をもなさぬのである、左れば此水雷艇隊は敵艦隊に對する掩護のために非して、寧ろ金州丸搭載の我陸兵上陸其他の場合に於ける掩護の爲なりしを想像し得べくして、畢竟我海軍は敵の艦隊逆襲の場合を其胸算中に置かなか

つたのであるといはねばならぬ、即ち我當局の眼中には浦鹽敵艦を空しうしてゐたのである、其意氣は則ち可なり、其用意の粗漏は辭す可らずである、此用意の粗漏は即ち我が連捷の勢に怪れて稍々安泰の念を萌し來りたる結果といはねばならぬ「滿は損を招き謙は益を受く」此一念の萌生實に慘事を招き出したのである、

假りに一歩を讓り、一水雷艇隊能く敵を拒いて金州丸の護衛に當るに足るとするも金州丸轟沈當時の如く水雷艇隊が船とともに行かざるに於ては其所謂護衛なるものゝ實は果して何處に在るのであらうか、公報に依れば水雷艇隊は天候險惡の兆ありしが故に遮湖浦に假泊したりといへり、然るに金州丸生存者の談ずるところに依れば其夜は月明皎々として海上を照らし波浪靜にして、毫も所謂天候險惡の兆なるものありしを認むる能はずと云へり、又此天候險惡の兆ありしこと事實なりとするも、既に水雷艇隊が此故を以て航行をなす能はずとせば金州丸も同じく假泊すべく、之にも拘はらず金州丸必ず航行を續けざる可からざる所以ありとせば水雷艇隊亦航行を續くるを辭す可らざるは、護衛の任

にあるものとしては當然執るべき處置である、然るに艇隊のみは止まり金州丸のみをして單獨航行せしめたりとせば、艇隊果して掩護の任務を帶びたらば、其任務を曠しうしたるの責は免れぬのである、然れども吾人が前きにいへる如く艇隊にして單に陸兵上陸其他の際に於けるのみの掩護の任務を帶びたるものならば、其上陸偵察の事既に終りたる當時、必ず責を艇隊に負はしむ可らず、而して結局竟に我が當局が連勝に怪れ必然竭すべき用意と警戒とを怠りたるに歸着するのである、敵前に於ける運送船護衛の任を怠りたる、戰時に於ける動作としては頗る妥當を缺けるものといはねばならぬ、

金州丸の轟沈せられたるは、即ち我當局者に萌生したる驕泰の念に由因するの結果であると云ふを憚からぬのである、而して其誡しめの第一着であつたのである、故に若し此時に於て惕若として自ら警むる所あり、其驕泰の念を去りたらましかば、或は第二第三の災禍相踵ぐが如きことはなかつたかも知れぬ、然るにあまりに天佑を過信したる我當局は雨既に至て猶其牖戸を綢繆するの用意を怠つたのである、是が爲め終に第四十八號艇を失ひ、宮

古を失ひ、遂には初瀬吉野をすら失ふの慘劇を見るに至つたのである、

某史家はナポレオンの覆亡を其運星の過信に歸した、吾人は我海軍の失敗を天佑の過信に因るものといふを憚らぬ、（甲辰六月）

縮寫せられたる日本

所謂勸業博覽會

一

博覽會とは入場料を徵る勸商場なり、陳列品を賣る共進會なり、卽ち博覽會は大なる勸商場、大なる共進會なり、勸商場は各個商人の手に成る博覽會、共進會は町村若くは郡縣の間に行はるる博覽會にして、而して博覽會は實に一國政府の開催にかゝる勸商場、共進會なり、勸商場共進會の類にして、而して東京の淺草大阪の千日前に於ける興行を加味したる者なり、更に細かに之を別てば、工業館は勸商場なり、繊物反物の絹布錦綾に始りて、陶器の茶椀、德利、

皿、鉢より、漆器の膳盆其他女小間物一切、更に下つては仕入の洋服靴に至る、勸商場と大小の外異なる所何ぞ、農業館、林業館、機械館、水產館は共進會なり、敎育館、美術館は展覽會なり、而して美術館は其出品の性質に於て數量に於て上野に開かるゝ展覽會に劣ること數等なり、高島屋の世界三景の圖が正面の階上に神々しく飾附けられ、之に繩張りして、敢て近づき觀るを許さざるが如き僧上の太は、私の展覽會にも有らざることなり、博覽會とは此の如き者なり、吾人の眼に映じたる博覽會は實に此の如き者なり、勸業博覽會とは官業勸商場のみ、官業共進會のみ。

二

號して勸業博覽會といふ、而かも日々の入場者幾萬を以て數へて、其中幾人か眞に其所謂勸業なる旨を體して觀覽する者ぞ、其十中の九分九厘迄は無意味の見物者なり、珍らしきものがあるべしとて見物する者はあり、大阪見物のために見物する者はあり、掘出物を買はんがために見物する者はあり、他人がすればとて見物する者はあり、見ぬといふを恥と心得て見物する者はあり、富を

誇らんがために貴き物品を買ふべく見物する者はあり、人に見られんがために見物する者はあり、人を見んがために見物する者はあり、游樂のために見物する者はあり、細君小供を慫ばせんがために見物する者はあり、狎妓にねだられて見物する者はあり、勸業の熱心家たるを鄕黨に誇らんがために見物する者はあり、自腹をきらぬ旅行をせんがために見物する者はあり、而して此等以外、眞に勸業上の智識を得んがために見物する者果して數萬人中幾百人ありや、將た幾十人ありや、更に問はん、今の博覽會を見物して眞に勸業上の知見を弘め、之を齎らして歸り去る者果して又幾人ありや、博覽會は字の如く博覽會なり、此以外果して何の實益ありや、勸業の二字は寧ろ贅なり。

三

博覽會は純撲なる地方の民を都會に誘ひて、其業を休ましめ、其働を廢めしめ、瀛車賃を拂はしめ、瀛船賃を拂はしめ、宿料を拂はしめ、土產物を買はしめ、帽子シャツを購はしめ、車馬の譽に忸れしめ、掌のタコと瞳のアカギレを軟にせしむる者也、幾日の滯在、而して家に歸る時、會場の宏大なる建物の輪廓を朧氣に記臆する外、博覽會に見たりし一切を忘了して、眼底に印象かたく存らんものは、羨み見し都風の華奢華美のみ、博覽會にして果して知見を弘むといはゞ、其弘めたる知見なる者は蓋し是れ。

四

博覽會なる者は出品人の上よりいへば廣告料を拂はざる大廣告場なり、見物人の上よりいへば、入場料を徵せらるゝ大公園なり、開催地の上よりいへば大規模の營利場なり、政府の上よりいへば、國を飾らんが爲めにする一種の粧飾なり、

五

博覽會は幾十萬坪に縮めたる小日本なり、極彩色の日本也、最も粉粧せる日本なり、滿艦飾の日本なり、物質的文明化せる日本の標本なり、最も誇大に日本の長所を發揮せる戲畫(カリカチュアー)にして、又最も明白に短處を暴露せるパノラマ也、

京都の博覽會には著く京都を俗化せしめたりき、幽雅なる京都を物質化し、儉素なる京都を驕奢化し其雅趣を傷ひ其美風を壞りたりき、大阪は由來物質的の土地なり、商賈の府なり、故に博覽會のために墮落するの度は、京都ほどは甚しきものあらざりし、甚しからざりしにはあらず左程には目立たざりしなり、而も終に博覽會は其開催地の民の品格を高尚にせざりしなり、大阪の民自らすらも斯く認めしといふにあらずや。

七

博覽會とは細君娘が織物反物を素見に工業館に行く者也、敎育館に三味線を陳列したる者也、便所に入るに錢を要し、而して高等と並等とを別てる者也、美術館に呉服屋の廣告が仰々しく掲げられたる者也、通運館に鐵道局が沿道の風景畵を掲げて廣告する者也、黑紋附海老茶袴の看護人が仔細らしく椅子に腰掛けたる者也、俗惡なる大阪人種が男は一瓢を携へ女は卷鮨の折詰をベンチに開く者なり、

八

最も綺羅紛々たるは工業館なり、最も雅趣あるべくして而して最も俗臭あるは美術館なり、最も高尚なるべくして而して最も鄙俚なるは敎育館なり、唯比較的趣味あり有益なる出品あるは通運館なり。

九

工業館は大なり場中を三分して殆ど其一に居る、機械館は小なり、工業館に比して其五分の一に當らず、工業館は最も細小たる出品の陳列にして、而して其館は宏、機械館は最も巨大なる出品場にして、而して其館や隘、工業館の宏きは日本の長ずる所玆にあるを表する也、機械館の隘きは日本の短たる所玆に存ずるを表する也、蓋し工業館は最とも日本の長處を發揮せる者也、其の織物其の陶磁器其漆器は博覽會中の精也粹也、即はち日本産業の精たり粹たる也、而かして機械館は最とも日本の短處を暴露せるもの也、小規模なる模造、拙劣なる發明、唯戛々囂々の響の耳を聾するを覺ゆるのみにして、機械的動力に特有なるべき崇峻と壯大とに至ては殆ど全く之を缺けり、工業館は技術に於て長ずるを表する也、機械館は機工に於て短なるを表する也、工業館は手藝に於て巧

なるを表する也、機械館は發明に於て拙なるを表する也、工業館は島國的小規模に於て勝れたるを表する也、機械館は大陸的大氣宇に於て缺けたるを表する也、工業館は雅麗に於て優りたるを表する也、機械館は雄壯に於て劣りたるを表する者也、工業館は模倣に於て妙なるを表する者也、機械館は創造に於て陋なるを表する者也、工業館は日本人が手の人たるを表する者也、機械館は日本人の心の人にあらざるを表する者也、工業館は日本人が情の人たるを表する者也、機械館は日本人が智の人にあらざるを表する者也、工業館は日本人が感興の人たるを表する者也、機械館は日本人が推理の人たらざるを表する者也、工業館は日本人が輕浮を表する者也、機械館は日本人が深遠ならざるを表する者也、工業館は游惰の民たるを表する者也、機械館は逸樂の民たるを表する者也、工業館は勞働の民たらざるを表する者也、機械館は拮据の民たるを表する者也、工業館と機械館とは最も趣味ある相比にして、而して最も意味ある敎訓を吾人に與ふる者也。（癸卯三月）

形式的敎育の大弊

過ぐる日　皇后陛下が上野に開かれたる敎育品展覽會に行啓あらせられたる砌其日會非常の强雨なりしに、玆に奉迎せる二萬餘人の童女は傘をもさゝず、濡れながらに雨中に佇立したりしを、至仁至慈なる陛下は、之を憐はされて、御心をや惻まされ給ひけん、可愛相なりとの御語を下し給ひしと云ふ、

吾人は、陛下の此一語を仄聞して感激に禁へざると共に、又今日の敎育があまりに形式に拘泥するに過ぐるの弊に想到りて悚然たるものなくんばあらず、

夫れ陛下の行啓に際し之を奉迎するは固より、臣子の誼當さに然るべき所なりと雖ども、奉迎に當りて柔質可憐の少女を雨曝しになさしめざる可らざるに果して何の理がある、よし傘を用ひざるが至尊に敬を致す所以なりとするも、此の如きの却て、至仁至慈なる、陛下の御心を體ばし奉る所以に非ざるは、陛下の御一語を恐察し奉りても明かに、此の如く敬を致す所以の却て御心を惻ませ奉るが如き不敬に陷りたるもの、畢竟彼の敎育家なるものが事理を解せず、

大躰に通ぜざるに是れ由らずんばあらず、

盖し今日の教育者なるものが、小量小心、偏狹にして時處を辨ぜず、局促として變通を知らざるや、只管形式にのみ拘泥し、皮相にのみ齷齪し、同樣の模型に入れ、齊一の陶冶をなさんとして之がため兒童の靈能を損ひ、天材を傷くるを顧みざる、是れ後繼の國民をして、元氣を失はしめ、活氣を失はしむる所以にして、其弊たる勝て云ふ可らざるものあり、殊に彼の徒の忠君愛國を說くや勅語を捧讀する事、御眞影に敬禮すること、君が代を三唱する事、軍人を送迎することのみを以て能事畢れりとなし、精神的に、國民の當さになすべき所、臣子の當さに努むべき所を感化するとを忘れ、徒らに偏狹なる愛國心、固陋なる忠君の情をのみ鼓吹するの傾あり、抑も我が祖宗建國の洪圖は進取にあり、今上中興の丕謨は、知識を宇內にもとむるにあり、彼の徒らに偏狹なる愛國心と固陋なる忠君の情を鼓吹するものゝ如きは寧ろ　聖慮に稱はざるものたるやを疑ふ可らず、

彼の上野行啓に於ての　皇后陛下の御一語は彼等に對する好敎訓也、彼等たるもの須らく恐悚して克く大本に反り、大義に反り、拘節曲謹を以て即ち忠君愛國なりとするの迷妄を醒すべき也、（壬寅五月）

形式的なる學校設備

さなきだに國家財政の膨脹に伴へる租稅の苛重に苦む國民の上に、更に疾痛を加ふるものは地方民としての市町村經濟の過大となれるは自治政の運用其宜しきを得ざるの弊に坐せざるにも非ざるも、亦其經費の主なる者は敎育及衛生二費なりとす、而して此二者固より國民の智識と生命の係る所、其重大なるや論なしと雖ども、然れども此等の經費が今の如く膨大する所以は、徒らに其外形の設備を修飾華美にするに是れ職由せずんばあらず、吾人は敢て修飾華美といふ、然り、今日の如く世が物質的文明に趨るに際りては、之に伴ふて一般の傾向が形式と外形に重きを置き、徒らに備はるを外觀にのみ求むるの弊に陷るに至る、彼の今の地方に於ける小

學校避病院等の建築を莊にし設備を大にする、之を整頓なり、完美なりといはばいふべしと雖ども、然れども其整頓や完美や主として外形外觀の上にのみ止り、且地方民人の富の度と相適せざる者あり、之を修飾華美にするといふ、吾人其不可を見ざるなり、姑く之を小學校の設備についていはん乎、文部省は命じて曰く窓の搆造は如是々々にせよ、机と腰掛とは幾尺幾寸ならざる可らずと、而して以爲らく事此の如くならざれば生徒の視力に害あり、健康に害あるなりと、然れども試に思へ、彼等生徒の家庭に於ける狀は如何、陰鬱なる茅屋の裡に住み、粗糲の食をくらひ、卑濕の席に坐す、家に在ては此の如し、而して曇に上れば其窓や明暗眼にかなひ、其席や高低體に適ふといふと雖ども、一日中家に在ることは多く、曇にあることは少し、所謂整頓なる完美なる設備彼等生徒に果して何の要ぞ、寧ろ其家に於けるの不一致其視力を害し、其健康を損するの虞あらざるなきを得んや、是を以て之を觀る外形や外觀の整頓完美は寧ろ無用なる修飾華美に非ずや、而も齷齪たる文部省は之を命じ之を令し、其命ずる所其令する所に合はしめずんば已まず、而して又地方の市町村

に長たるものも此等の設備の修整を以て己の治功に誇らんとし、これがために生民の財を徵收して、曰く校舍の改築、曰く避病院の新築、曰く何、曰く何、催租の吏忙々として民生疾苦に泣く、是れ畢竟自治の政を司どる者其人に非ざるに由ると雖ども、更に深く其由て來る所を釋ぬれば、國政の大局に干かる者の、皮相形式の文明に心醉するの弊に本づくにあらざるはなし、吾人毎に今日の地方市町村經濟の狀を見て深く痛慨に禁ざる者あり、頃日文部省は學校設備規程を改正し師範學校、中學校、實業學校等の設備に關して、從來の嚴密なる干涉を廢し、建築修築等一々文部大臣の認可を要したるを改めて、單に圖面を具して文部大臣に開申するを以て足ることゝなせり、是れ一方には文部省の事務を簡易にするのみならず、又一方には地方經濟の上に節約する所必ず多きを得べし、吾人は大に文部省の此擧を贊するとゝもに、文部省が更に一步を進めて小學校設備準則に就ても亦從來の如く同一摸型に入れんとする皮相形式なる主義を廢し、市町村各其地方の事情を斟酌するの餘地を得せしめんことを希望する者也、（全上）

小品藻

夜色

一夜外に歩す更闌けて月なく仰げば蒼澄みたる空の色宇宙の幽之れを表するが如く鎖落燦爛たる滿天の星は天上の秘密を相瞬するに似たり、四顧沈々夜氣森然獨り寥廓の間に立てば覺えず此天地の大景に打たれて瞿然として畏れ肅然として愼しむ、美なる哉自然大なる哉天地夜は天地の至大を表はし自然の最美を示す、夜色は天地自然の光景の尤も純なるものなり、毫も人間塵埃の氣を雜へず、夫れ人間は情欲の奴なり名利の役なり、物と相刃かひ相磨ひて役々として勞生す、晝間は此等人間のために占斷せられ其紛擾のために亂らるる故に俗了し故に汚れたり、光景夜色に至りて全く人間を絶す故に最純なり故に天地其至大を現はし自然其最美を揮ふを得るなり、故に之に對して畏れ且歛むの念を禁ずる能はざるなり、眞善美是に至りて別致なし美の極致はそれ夜色にある歟

然れ共翻てまた之れを思ふ此大なる蒼旻の下此美なる夜色の間、其闇黑を利して苞苴は行はれ賭博は行はれ姦淫は行はる、黃白のために主義を賣るもの此間に於てし朱門を叩いて哀を乞ふもの亦此間に於てす、あらゆる敗倫惡德多くは此間に行はる、今の所謂文明なるものは外に飾て內に腐るゝなり、僞善の徒彌多くして夜色は徒らに彼等をして暗黑を利せしむるのみ

恥ぢよ恥ぢよ僞善の徒汝の多く其僞善を行はんとするの暮夜俯仰して天地の大景に恥ぢよ

夢のあと

長法寺の曉の鐘に夏の夜の明け易きを怨みしも今は夢なれや、錦川の瀨音はもとのまゝにして枕に聞きし昔を偲ぶ、逢ふに泣き、別るゝに泣き、冷たき人の心に泣きし、悲しかりしこと、つらかりしこと、恨めしかりしこと、其の折の悔と憤と悶と、六年を經ぬる今日の我に今更のやうに想ひ起されて、眼に入り耳に聞くもの、物として銷魂斷腸のたねならぬはなし、我を識れるものは昔

を語りて我がために泣けば、我は坐ろに、我がためには仇なりし過ぎ越し方の、懐かしくも覺ゆ、日はいへ維ぐ可からず、既往は回すべくもあらず、地は昔の地なり、我も昔の我なり、されども時や移れり、人や此に在らず、懐かしの人よ、何處にか在る、何處にか在りとも復見る可らず、復見ること或は有らん、復相語るによし無けん、復相語ること或は得ん、されど昔の我の如く昔の彼の如く語らんことは能ふ可らず、語らんことは能ふ可らざるも互の思は夢にだも通はざらめや、

朝な夕な我が昔を偲ぶ折々も彼が人知れぬ思に泣く其時か、彼が越し方の恨にいたむ時しも、我が今さらの悔に悶ゆる其折々なめれ、彼が懐裡には我の貌、我の血、我の精神を其貌、其血、其精神に感應して、我と同じき彼、彼と同じき我を抱けり、彼がつゝむに餘る思ひを其耳にさゝやく、せめてもの心やりあれど、我は男の、此思ひ此悲しみ、人に語らは痴なりとや笑はれん、已れ一つの胸に秘めて、獨りかへらぬ昔の夢に泣く、嗚呼懐かしき夢よ、戀しき夢よ、昔や夢なる、今や夢なる、觀ずれば人事渾て夢なり、見果てぬ昔の夢のあと、

されど今にかへさん由もなし。

心のいたみ

予は羸弱の身なり、少年の時一たび瀕死の疾に罹り、今又不治の痾を抱く、予は竟に今の痾によつて逝く可し、餘命幾何ぞ、而して功名成り難し、之が爲めに悶え、之がために悲む、

回想すれば予が閲歴は失敗の歴史也、予が一身は失敗の權化にして、悲み悶えんが爲めに此世に生れ出でたる也、事業毎に蹉跎し、覇氣空しく渇けり、志疎大なれども行ふこと拙に、眼徒に高けれど手は則ち低し、文を賣つて纔に口を糊する、豈に予が志ならんや、而かも已むを得ざれば也、

予は幸に温き家庭に鞠育せられたれど、世情の冷きを感ずること、あまりに過敏なり、而して人間の僞を憤ること、あまりに多感なり、人を容るゝ能はず

世に容れらるゝ　はず、獨り憤を懐いて聊るなきに悶々す。

予盾と撞着との世、予は此間に立ちて自ら堪ふる能はず、強て酒を仰いで磊塊に澆ぎ、骯髒の不平を柔情の纏綿に慰む、予は、今に於て、十年依然たる青衿飄零して猶出頭の地を得る能はざるもの、職として此あるに由ることを知る、故に醉ふて春に和する能はず、心頭毎に一片の欝塊を存じて、而かも猶清醒を粧ふて世上の偽と混するに堪へず、

戀は慰藉なりといふ莫れ、予が戀はつねに失敗に終れり、悲痛に終れり、初戀の名も知らぬ人の清き高き俤は今に猶予が胸に刻まれ、父を知らぬ哀れなる吾が兒は、父ならぬ人を父として薄命なる其母の懐に眠れり、色に沈湎すといはゞいへ、偽りの戀にも予は眞情を以て對す、偽るは彼の罪なり。偽らるゝは予の罪にあらず、偽らるゝを愚なりと人は嗤ふとも、予は寧ろ偽らるゝも兒女の輩を偽るに忍びず、予が經驗せる戀は毎に苦痛なり、悲悶なり、

數寄の予、薄倖の予、多感多病の予、想ふに予が心のいたみは竟に癒ゆるの時なかるべし、予は此の心のいたみを抱いて墓に入るの時の寧ろ速かならんを

望む、

八月三日

八月三日、午後九時、

何物を見るも皆暗慘の色を帶ぶる時あり、此世界も、大空と同じく濃き霧に掩はるゝなり、咫尺にあるものも辨ず可らず、只悲酸と慘惻と痛楚とあるのみにして、世界は恰も主宰なくして害惡なる機會の手にのみ委ねられたるが如し。

前日予は此の悲しき感慨を懐きて、長時間廊外を散歩したり、而して家に齋らし歸りたるは、悲しみと失望となりき、予が見たる凡ての物は、吾人が今誇るべしとせる文明の罪を鼓らずに似たる者あり、予は名も知らぬ狹き横街に彷徨へり、而して予は忽ち貧者が、生れ、悶え、而して死する、恐るべき住家に圍まれたる處に立てり、予は時が其醜きを以て掩へる壞れたる墻や、醃臢き繿縷を吊し乾かせる窓や、毒ある蛇の如く家の前を迂曲せる汚溝やを見たり、予

は悲しき思に得禁えて、急ぎ去れり、

行くこと少焉にして予は施濟院の柩車に出會ひて歩を停めぬ、木棺中に收められたる死人は、葬儀の列も、式も、伴もなくて、其最後の住家に去りつゝあり、然り此かる卑しき者の最後の友、即ち書家が受濟者の埋葬に於ける唯一の從者なりとせる狗さへも在らざりき、彼は生時に於て世人に遇せられたる如く死しても亦獨りにて墓に往くなり、何人か其終焉を知らんや、此社會の激戰に於て、何が故に此の如く兵士は最も卑しめらるゝ歟。

此の如く社會の一員が風に吸拂はるゝ木の葉の如く消え失せるとせば、此人間社會なるものは畢竟何なりや、

此施濟院は兵舍の傍にあり、其門前には老若男女等兵士等が惠みたる糧きパン屑を得んとて爭ひつゝあり、此の如く、吾人自らと同類の者にして貧窮の裡に日を送り、其生より告別するまで吾人の、矜恤を待ちつゝあるなり、無籍者なる全隊は凡ての神の子等に科せられたる審判に加ふるに、飢と寒さと屈辱との痛楚に堪へざる可らず、不幸なる人類の一團よ、玆に在りては人は蜂窩の蜂

地下の都に於ける蟻よりも惱むべき狀態に住むなり、於戲此の如くにして道理なるもの何の用ぞ、若し吾人彼等を更に智に、更に幸福ならしむる能はずとせば、許多の高き材能も何の利ぞ、誰れか此苦勞と苦痛との生命を以て、彼の其世界は、唯喜びの生活のみなる空の鳥と相易ふるを欲せざらんや、

予はフオイローブレトンの俗話に於けるマヲの逃懷を宜なりと考ふ、マヲは飢渴のために死せんとして菓樹にある大鷲を見て嘆ずらく、

嗚呼彼の鳥類は基督敎徒よりも幸福なり、彼等は宿屋をも、屠肉者をも、パン燒をも、園丁をも要せず、神の天は彼等の有なり、地は彼等の前に間斷なき饗宴を開けり、小さき蠅は彼等の獲物なり、熟したる草は其禾田なり、屋背や、庭地は其菓實の藏倉なり、彼等は價なく又准しなく、何處にても採りて得るの權利を有す、此くの如くにして小き鳥は幸福なり、終日たゞ歌ひ囀るのみ、

然れども人の生も其自然の狀態に於ては猶鳥の如く平等に自然を享樂し、地は間斷なき饗宴を其前に開きたりしなり、果して然らば人は此國民なる者を形

成する利己的なる不完全なる會合に依て何の贏ち得る所かあるや、若かず自然の豐饒なる懷裡に復歸し、其自然の仁惠に生きんには、（エミール、スーヴエスツル）

海の爲に痩削さるゝ陸

巴里は年々五百萬金を海に擲つ、而して此は譬へてにはあらず。如何に又怎樣にしてか、晝と、夜とが。何の爲にか、何の爲にもあらず。何と思ひてか、思ひてにはあらず、何物をか酬ゐらるゝ、何物も有らず。何の機官に依つて、其腸に依つて。腸とは何ぞ、其下水是れ。

五百萬金、是れ專門科學の計算に據れる眞に近き數目の、最も其中を得たる者。

科學は、其永き經驗の後、今や漸く肥料の最も養分に富み、最も效果多きものは人間の糞尿なるを知れり。恥づらくは支那人は吾人よりも夙く之を識れり。エッケベルヒのいふ所によれば、支那の農夫はいづれも皆街に往くに竹の兩端

に、二桶を擔ふ、其中吾人が稱して穢物（フィルス）となす物滿ちたり。人間の肥の有り難さは、支那の土地は今猶アブラハムの時のまゝに若々しく、其の小麥は百二十倍がけも實るなり。肥としては鳥糞も都市の碎塊（デトリタス）に比ぶ可きもあらず。大なる市街は最も優れる積糞處なり、田野を沃腴にせんがために市街を利用せば其功を見るや確。若し吾人の黃金穢物ならば、又吾人の穢物は黃金なり。

此穢物、黃金なる此穢物を如何か爲せる、奈落に掃き去るのみ。

吾人は南極に於て、洋鷹（パトレル）と企鵝（パンガイン）（海鳥）の落糞を蒐むる商船の、警備艦の艤裝に鉅資を投ず、而かも吾人が其掌近に有する無量の富は空しく之を海に流し去るなり、世界が失ふ凡ての人間及禽獸の糞尿を水に投ぜずして、之を陸に復さば、以て全世界を養ふて餘りあらん。

▲石垣の隅に積みたる獸腸や、夜間街を曠り過ぐる糞泥車や、見るに恐ろしき掃街者の車や、舖石に掩はれたる地下の粘泥の腐臭ある流や、爾は凡て其何たるを知れりや。是れ靑靑たる嫩草なり、是れ華さく牧場なり。是れ靑靑たる嫩草なり、是れ藥草（アジローラム）なり、香草（タイム）なり、茨路花（ヒーデ）なり。是は野獸也。是れ家畜也。是れ夕暮に於ける食に飽け

る肥牛の群なり、是れ香ある秣なりの麵包なり。是れ爾の脈絡に於ける溫き血なり。是れ健康なり。歡喜なり、生命なり。地に變形あり天に變容ある玄秘なる造化なる者は其爲す所此の如し。

大なる坩堝に之を置け、爾の豐富は其中より噴溢れん、田野を養ふは則ち人間を養ふ所以也。

爾は此富を擲拋し而して却て予を嗤笑するを敢てす。是れ爾の無知の頂上に更に冠するものに非ず耶。

統計の示す所に據るに、佛蘭西のみにて年々其河により大西洋に一億萬圓の揮霍をなすを見る。試に想へ、此一億萬圓は政府歲出の四分の一を辨じ得べきにあらずや、人なるものの智は此の億萬金を小渠に投下して悔ゐざらんとす、而して此は民衆自の實質の、此方に流をなせるが下水の苦しげなる嘔吐によりて河に注ぎ、而して河の巨大なる集流によりて太洋に運び去らるゝ者たる也。我が下水の一咳逆は千フランに價すべし、是に二の理由あり、陸は瘦せ、水は汚さる、哇よりは飢生じ、河よりは疫生ず。

例之へば現にテームス河が倫敦を毒しつゝあるは著明なり。

巴理に於ても過ぎし數年間に下水を殆ど皆、流の末の橋より下に排出せしむるの要ありしにあらずや。

實に公衆の富は河に流入し、漏滅は已むなし、漏滅といふ、猶足らず。歐羅巴は此の如くにして涸れて滅びんとしつゝある也、

佛蘭西に於てとしては既に其數目を擧げたり、今巴理は全佛國の人口の二十分の五を有ち、而して巴理人の糞尿は就中最も養分に富みたれば、全佛蘭西が年々拋ち去る一億萬圓の損失中五百萬圓は巴理に屬すといふべし、若し此五百萬圓を救濟と享樂とに用ゐしめば、巴理の光彩は加倍せん、而るに市は暗渠中に之を費消す、故に吾人はいふ、巴理の大なる奢侈、其異なる祝祭、其饗宴、其黄金の傾嚢一揮、其粧飾、其華奢、其偉觀は其下水なりと、

吾人が一切者の繁榮を溺らし、流し、深底に沈ましむるは彼の不完全なる經濟學の盲目のため也、公衆の資財のためにサンクラウの網なからざる可らず、經濟上より觀て、一言以て之を蔽へば、巴理は目漏する籠也、

巴理、模範の市、各人之に習はんとする經營完き首府の模型、理想の帝都、着手、振奮、企圖の偉大なる國、中央にして心の住處、國民の市、未來の蜂窩バビロンとコリンスとの渾下たる奇異の巴理は、前に說ける點より見て、福建の農夫をして肩を竦てしむる者あり、巴理に倣へ、爾は自らを滅さん、

且殊に此の記臆されざる、感ぜられざる消費に巴理は自ら倣ふ、

此等の甚しき不合理は新しきことにはあらず、癡愚に若しといふことなし、古人も亦近人の如く爲せり、リーピヲヒ曰ふ羅馬の暗渠は羅馬農夫の凡ての幸福を漉呑すと、羅馬のカムバナの羅馬の下水のために滅びし時、羅馬は伊太利を注ぎ次にサルデイニアに、次ぎに亞非利加に注ぎ入れり、羅馬の下水は世界を呑みたり、此下水は都市に世界に其胃腑を提供したり、Urbi et orbi（都市羅馬を指す及世界の爲めに）不朽なる都市、無底の下水、

此等の事並に他の事に於て羅馬は例を置けり、

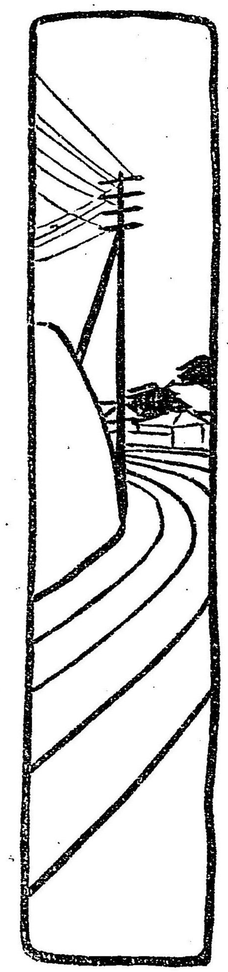
此例に巴理は倣へり、天才の市にのみある惱悦を以て、

巴理は其下に他の巴理を有す、下水の巴理是れ、此に徜あり、徑あり、街道あり、直目なる狹路あり、此に動脈あり、循環あり、人の形なき濕泥の其れなり、

吾人は何物にも、縱使大なる人民にも、媚びず、あらゆる物ある處には、其華嚴と相副ひて亦其恥辱あり、若し巴理が光の市なるアゼンス、力の市なるタイアー男の市なるスパルタ、怪離の市なるニヲヴエを含まば、亦泥の市なるルーテシアを含めり、

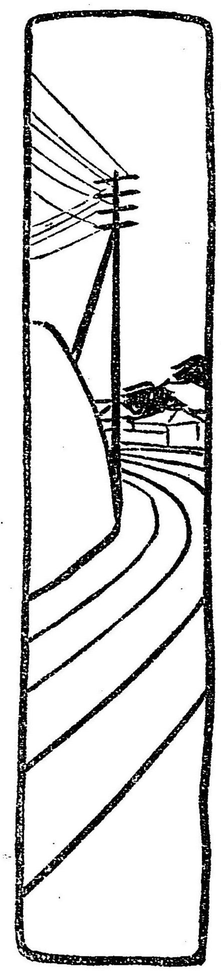
且巴理の力、封じられて又茲にあり、巴理の巨大なる下水は、紀念碑と同じく、マキアヴエリ、ベーコン、ミラボーの如き或人々によつて人道に實現せられたる一の奇なる理想を實現す、即はち卑陋の崇高是れ、

若し巴理の下層土に透徹するの眼あるを得ば、昂大なる珊瑚の觀あるを觀ん、海綿と雖どもかほどの狹路と通徑を通ぜざらん、而して是れ十五里周圍の土の房にして、其上には古き大都立つ、間隔ある洞ある塚は姑くいはず、瓦斯管の紛糾せる方眼格子は姑くいはず、又噴水器となる淸水の分配の爲の大なる管組



織をも姑く算せず、下水道のみについて見るも兩岸に伏せられたる怪異なる暗き羅網を成す、是れ一の迷路にして其末は其の舒緒なり、其濕れる霧氣中に鼠を見る是れ巴理の分娩の産兒なりとも見るべし、(ユーゴー)

漫月旦



織をも姑く算せず、下水道のみについて見るも雨岸に伏せられたる怪異なる暗き羅網を成す、是れ一の迷路にして其末は其の舒緒なり、其濕れる靄氣中に鼠を見る是れ巴理の分娩の産兒なりとも見るべし、(ユーゴー)

漫月旦

近衛公と西園寺侯

一

優柔いふに足りない長袖者流の中て、珍らしくも立派な見識をも備へ、德望をも有して、闇夜に輝く明星のやうに、異彩を放つて居るものが二人ある、それは近衛公と西園寺侯とだ、ともに名門に生れながら、少しも長袖らしい臭味を帶びてゐない、而して今の政界て相對立して各一方の重をなしてゐるのは面白い事だ。

元來近衛公は伊藤の知を得て、今日の地を爲すに至つたもので、貴族院中て未だ年の若い公を議長に抜いのたは、誰あろう伊藤であつたのだ、だから謂はゞ伊藤は近衛公の知己だ、公は伊藤の味方となるが當然てあるのだ、所が公は却て伊藤の敵となつた、公が華胄の嫡流てあるだけ、それだけ伊藤のためには貴族院中の勁敵となつた、終には公は國民同盟會の會長として伊藤の政友會と全く正反對の公敵となつた、公自らも私に於ては伊藤の友たるも、公に於ては

伊藤の敵だと公言して居る位だ、此と反對て西園寺侯が初めて佛蘭西から歸つて來た時は、恰も我邦では自由民權論で騒がしい最中であつた、侯は此自由民權の本家たる佛蘭西に居つて、長く極端な民主主義の空氣を呼吸したのであるから溜らない、自ら眞魁になつて、中江篤介や、松田正久や其他二三の佛蘭西主義の同志と、東洋自由黨なる者を組織し、東洋自由新聞を發行して、盛んに危激の議論を唱へた、當時では、華族といへつば無氣無力で、總に藩閥政府の蔭に身を托寄せてゐるやうな有樣であつたのだから、西園寺侯が華族の身として、かく突飛な民主論を唱へたのは實に破天荒といふべきて、頗る世間の耳目を聳かした、終には至尊の、宸憂を煩はされて、侯の兄たる德大寺侍從長をして特別の御申達があるに至つた程であつた、だから侯は決して伊藤と兩立し得可き人てない、而るに今では却つて伊藤の下に立て政友會の副總理ともいふ可き地位に居るのである、是はよく考へて見ると洵に可笑しい事だ、近衛公は其經歷からいへば、寧ろ伊藤系をひける在朝黨てあるべき筈てあるのに、却て伊藤よりは大隈に近づいた在朝黨となつて居るのである、西園寺侯は其最初の

主義からいへば、どうしても伊藤と合ふ可き筈がない、侯は在野黨として藩閥の敵たるべき人てあるのだ、それが伊藤と合うて、伊藤の高級參謀となつてゐるのは實に可笑しい事だ、だが更に深く考へると是には、またそれ〳〵の理由があるから面白い、

二

近衛公は英國へ留學した人で、西園寺侯は佛蘭西で學問をしたのだ、一躰英國と佛國とは非常に氣風が違つてゐる、英國は貴族的で謹嚴、寧ろ冷酷だが、佛國は平民的て快活寧ろ輕率に近い、蓋し英人は情に冷て、佛人は情に熱する風がある、是れは一はアングロサクソン人が北方の濤と寒さとで鍛へたのと、一はラテン人が南方の溫かい日光と薫風との中に育つたとの違から起つたものであらう、從つて英人は一寸見が高慢で、そして辛抱強い、英人が殖民に成功するのも是がためてある、之に反して佛人は一寸見は優しいが飽つぽい、其殖民に失敗するのも、政躰に革命が數々あるのも是がためてある、此の英國風と佛國風とを表してゐる近い例は、嘗昔の改進黨と

自由黨とだ、自由黨が佛國主義で、改進黨が英國主義だ、改進黨が氣取つたやうな風が見みたのは英人の冷酷な所に似たので、自由黨が狂じみてゐたのは佛人の熱烈な所に似てゐたのである、それに改進黨が秩序的で、漸進的で、温和な立憲の君政を唱へた所は全く英國風なので、自由黨か破壊的で、急進的で、極端な平權説と民主政を主張したのは佛國風である、當時に於ける政界の二大分野は實に英國主義と佛國主義との衝突であつたのだ、そして當時の保守主義官權主義と稱せられた帝政黨は獨逸主義の代表であつたが、當時に於ける獨逸主義の勢は頗る微々たるもので、然るに伊藤が勢を宮廷に得て官制の大改革を行つて、自ら總理大臣となり、且自ら憲法の制定者となつて欽定黨法が發布になつた頃から、獨逸主義は芽を出しかけた、それと明治維新後日の淺い間は、工業や技術やの形而下の學問を採るのに忙がしかつたので、學問上にも物質的な英國風が勝を制してゐたのであつたが、恰度此頃には人が漸く深遠なる高尚な學問を要求するに至つたので、獨逸風の政治論や哲學説が漸次研究せらるゝやうになつた、然るに獨逸風の帝國的政治論が、當時の藩閥者流の自らの政府

を庇ふためには適度であるので、獨逸主義に據るとともに、老猾なる伊藤は大學へも獨逸主義を吹き込んだ、穗積のやうな帝室神權論を皷吹した結果は、漸次獨逸主義が勢を得てきた、世の中の聲が學問は獨逸に限るやうにいふとともに、政治上にも獨逸主義が漸次勢を得てくるやうになつた、それで議會開會後の政界は獨逸主義對英佛主義となつた、在朝黨が獨逸主義て、在野黨が英國主義若しくは佛國主義であつた、英國主義と佛國主義との衝突は從來の行掛上中々融和しなかつたが獨逸主義が漸次勢を得てくるとともに勁敵外に在り、内閣に遑あらずといふので此兩主義が一度合同して、獨逸主義と衝突した、憲政黨たるものが出來たのは即ち是だ。

話が傍路へ外れて飛んだ長談義となつたが、兎に角英國風と佛蘭西風とは全く違つてゐる、だから此間に留學してゐたものも、自然と其各々の國風に感化せられて、特殊の氣風を生じて來るのである。

三

英國に留學して居た近衛公は、英國風で、謹嚴な沈着な、紳士的な所がある、

英國では階級を重んずる風があつて、今でも貴族は貴族として、其門閥によつて重をなしてゐる、一言ていへば英國は貴族的である、名門華胄に生れて、世の中の波風は少しも知らぬ身で、直ちに此階級を尙ぶ貴族的な英國へ留學したのであるから、近衛公は浮世の世態人情といふ方には割合に疎い、忌憚なくいへば、お坊ちやま育である、お人好である、動もすれば策士連にかつがれやうとするのも是が爲めである、其容貌の童顏で豊頬象眼なのは確に之を證してゐる、しかし其謹嚴なだけ其學び得た所に忠實である、飽くまでも英國主義の責任內閣論者である、其伊藤と合ひ得ないで、寧ろ大隈の一派と相合ふの傾があるのは是が爲めである、但政黨の紛爭渦中に投ずるを避けて、專ら外交問題殊に東洋問題に力を注いではゐるが、全然伊藤とは敵て、どちらかと謂へば進歩黨に緣が近いのである、而して更に其東洋問題に於ける近衛公の主張の由て來る所を繹ねると、矢張英國の系統を引いてゐる、即ち東洋問題に對する近衛公の主張は支那保全である、支那開放である、英國の支那に對する政策は從來是てあつた、語を換へて曰へば近衛公は日英同盟論者である、公の會長となつて

ゐる東亞同文會も、國民同盟會も皆主張を以て立つてゐるのである、英露は今の秦楚である、常に相反目してゐる二強國である、英と結ぶは卽ち露と衝突する所以であるのだ、だから公は伊藤の日露同盟政略、寧ろいへば其怯露政策には大なる反對者たらざるを得ないのである、伊藤は滿洲を露に與へて、朝鮮を取ろうといふ考へだ、近衛公は露と戰ふてまでも支那の土をも露に與へないといふ考へだ、是が公と伊藤侯とが到底相合することの出來ない所以である、是が公が宜しく伊藤と合すべくして、而して却て在野黨と緣を引いてゐる所以なのだ。

西園寺侯は公とは反對だ、佛國風の氣風を帶びて洒落だ、平民的だ、近衛公は貴公子の風があるが、侯は風流才子の俤がある、近衛公が品行方正と稱す可きに對して、侯は隨分巴里でも浮名を流した、いはゞ身持の修らない方だ、近衛公は下手ながらも詩をつくる、西園公は俳諧をやる、是が二人者の面目を表してゐる、一躰佛蘭西歸りの者は皆洒落で、不羈放縱な所があつて、而して奇矯な奇激な所がある、死んだ中井篁介でも、光妙寺三郎でも皆そうだ、中江は

畸人だとまでいはれてゐた位で、物に頓着しない、やりつぱなしの男だ、哲學者じみた、氣違じみた事を平氣でやつてゐる、そして議論はといへばルーソーの崇拜者で、大の民主主義者である、自由黨で後に政黨も倦たといふので、北海道で紙屋をしたが、先生勘定だけは合ても算盤があはない、是もやめにして常總鐵道の社長となり、己れは金をこしらへて、金が出來たら、樂に著述をするのだといつてゐたが、終に金も出來ず、其理想として居た大著述をも、其志とともに黄泉へ齎らして逝つたのは惜しむべしてある、琴平バノラマの考案者は即ち此中江氏だといふ事だ、

四

光妙寺三郎氏も極めて奇矯な行のあつた人てあつた、隨分艶名をも流したが、終に轗軻不遇のうちに死んだ、死ぬる時分に、唯籠の鸚鵡が話對手てあつたといふほど小説的な悲慘な終りてあつた、一體佛蘭西派の學者は皆不遇である、行の奇矯な爲めに世に容れられないのてあらう、酒井雄三郎氏の如きも、中江氏の高弟として有名な佛蘭西學者てあるが、巴理博覽會當時事務官として同地

へ行つて、將さに歸朝せんとする間際、突然高い高い層樓から落ちて不歸の人となつた、其死については、事務官長てあつた林氏に疑の雲がかゝつてゐた位てあつた、是も不幸な最期といはなければならぬ。

それは兎に角、西園寺侯の如きも隨分奇矯の行のある人だ、其華族の身で東洋自由黨を組織して、突飛な平權論を唱へたは姑く措くも、候は四十を超へて今に無妻だ、其無妻の理由は糖尿病の爲めてあるともいふが、兎に角無妻主義て推し通してゐる、渡邊國武子も無妻てある、大學の哲學教師のコエーベル氏も亦無妻だ、コエーベル氏は純粹な學者風で、質素な生活をして、扮裝や外貌などには毫も構はない、大學の卒業授與式で、他の教授連は禮服禮帽で、いかめしい裝をしてゐる中で、獨り七ツ下りな背廣の日常服を着て平氣でゐる、それかといつて奇な譯てはない、買物をしても剩錢をとつた事がないそうだ、そして酒も飲む、煙草を喫む、酒と煙草とを喫まぬものは哲學者になれないといつてゐる、いはゞ渾身哲學者的の奇行を以て滿されてゐる人てあるのだ、だから其無妻についても、彼は學者風に無妻なのてある、即ち自己の信ずる所によ

つて無妻てあるのだ。

渡邊國武子の無妻もコエーベル氏に似た傚がある、或人は子の無妻は現鳩山夫人の春子を、鳩山と競爭して輸けた失戀の結果だといつてゐるが、兎に角氏の無妻は學者らしい所がある、麻布の片隅に閉居して、獨栖の寂しい生活を送つてゐる、彼は野狐禪との評はあるが、禪理には多少達してゐる所がある、又西洋の哲學書も少しは讀んでゐるやうだ、此哲學者然たる所は、コエーベル氏に相似てゐるが、しかし子は政治的野心を有してゐる、子は寧ろ英雄を以て自ら任じてゐるものである、コエーベル氏は全く恬淡無慾であるが、子は政治的野心を禪僧的の行動のうちに包んでゐる、全く恬淡無慾なのではない、新聞紙などで一寸々々吉原の稻辨での浮れ筋を素破抜れるのを見ても、子の無妻がコエーベル氏のと同じからぬ事が譯る。

五

西園寺侯も同じく無妻ではあるが、コエーベルや渡邊などに比べると、大變其趣を異にしてゐる、尤も西園寺侯でも幾らか俗を超脫した所がないでは無い

がコエーベルのやうな、全く俗世界には無頓着な、哲學者風なのではない、さうかといふて亦渡邊子のやうに政治的の野心を抱いて、英雄を氣取る譯でもない、謂はゞ洒々落々たる一個の才人風である、通人肌である、浮世の酸も甘も知りぬいた、近衛公から見れば惡摺れて、惡くいへば、一種のすれッからしで、ある。此點に於て侯は酷だ光妙寺に似てゐる、哲學者風に、も芋の煮ふたも御存じない樣なのでは勿論なく、さうかといふて又、乙う氣取つて高くとまつてゐるのでもない、一口にいへば巴里仕込の粹人であるのだ、だから佛人風の情に熱する所があつて、また案外當つて碎けるのも早い、が、侯が其敢たる當き伊藤と容易に合ふたのも此邊の事情がある、侯はいつまでも〳〵執念く一つ事に固着はしない、惡くいへば浮氣て、善くいへば淡泊だ、是も矢張侯が佛人的の氣風を帶びてゐる所である。

だが其の伊藤と合ふに至つたについては、他に猶重なる理由がある、それは西園寺侯の主義の轉歩てある、侯は平權主義から、世界主義に一轉したのてある、其轉歩には自から連續がある、決して軌道を外れた轉歩ではない、蓋し佛

人の、彼の大革命時代から腦裡に浸こんで居る思想は、平權に對して同胞といふ考をも有してゐる、卽ち佛人の平權主義はやがて同胞主義であつて、同胞主義はやがて世界主義てあるのだ、だから西園寺侯が個人主義の平權說から世界主義に轉歩したのは、可笑しい樣ではあるが、其の實別に怪しむにも足らんのだ。

然るに世界主義は國家主義とは反對である、深く奥の奥の眞相を究めたらば、相一致する所のないでもないが、兎に角表面は枘鑿相容れないものだ、國家主義は一國の隆盛の擴大を主とする所より、流れて自然に帝國主義となるのだ、帝國主義は卽ち軍國主義、軍國主義は卽ち武斷主義てある、同胞主義は博愛主義で、博愛主義は卽ち平和主義であるから、故に世界主義は文治主義である、帝國主義はサーベル的て、世界主義はハイカラ的てあるのだ、西園寺侯がよく伊藤と合ふを得たのは、卽ち此文治主義によつて合ふたのだ、ハイカラ的なる所によつて合ふたのである。

六

一體佛蘭西はルイ十四世の頃以來、歐州文明の中心てある、ルイ十四世が覇を歐州に稱して以來、佛語は歐州諸國の上流社會の交際語となつた、從つて外交上の用語となつた、而して巴理は凡べて全歐流行の魁となつた、髮の刈り方ても、服裝ても、靴の形ても皆流行は巴理がつくるのだ、こういふ風であるから自然巴理は華美な華奢な風が行はれる、香水ても、石鹸ても化粧品はすべて巴理製が最上てある、所謂巴理ッ兒なるものは意氣を以て、通を以て誇つて居る、從つて流行に遲れぬ樣遲れぬ樣と心掛けて居る、此の如き風に浸こんで來るのてあるから、巴理歸りの洋行者はいづれも意氣がる風がある、長田秋濤などは其好標本だ、光妙寺三郎は厚ぼつたい服は無意氣だといつて、薄地の洋服て多は戰へてゐたといふ話もある、西園寺侯とても十年も巴理に居たのてあるから、巴理の風には餘程染込んてゐる、是れ侯がハイカラ黨の御大將たる所以てある。

だがよく考へるとハイカラにも種類がある、米國製のハイカラもあれば、英國製もある、獨逸製もある、布哇あたり製のもあれば、極手近な和製のもある、

和製のは毒黨の志賀矧川のやうなのもある、布哇製は毎日の石川安公のやうなのもある、望小太のは英吉利製で、松本君平のは米國製で、上田萬平などが獨逸製といへばいうのであらう、だが獨逸歸りは割合にハイカラが尠ない、それは獨逸の國風が虚浮でない、尚武的で、而して學者的で古樸な所があるから、從つて流行にかぶれる樣な事が少ない、ハイカラ黨の中でも最も鼻もちのならぬのが米國製のである、米國は新開新興で、歴史のない國である、從つて農工業のやうな形而下の事は發達してゐるが、深遠な學問は發達せぬ、だから米國ではエデイソンは出たが、大詩人大哲學者は出ない、一體に平凡で常識的である、唯一つのエマルソンがあるが、予の觀る所では、エマルソンも常識的で平凡で、とてもカーライルにすら比す可きものでない、こういふ風な淺薄の國柄であるから、時好を趁ひ流行に趨るのである、元來流行を趁ふといふ事は、輕浮な者のする事だ、米國製のハイカラ黨は氣障で厭味が多い、商人的ハイカラだ、英國製のは米國製に似てゐるが、重くろしい所がある、こッてりした所がある、いはゞ紳士的ハイカラだ、佛國のは同じハイカラでも洒脱な所がある、

氣障や厭味が少ない、通人的のハイカラだ、だから佛國製のハイカラは同じハイカラでも所謂ハイカラ的臭味が少ない樣に思はれる、がまた意氣がつた所があつて矢張ハイカラたる所以は免かれない。

七

吾人の考では、或は近衛公と西園寺侯とが、各一黨を率ゐて政敵として相爭ふ時がありはせまいか、即ち二人者が首相の印綬を相爭ふ時がありはせまいかと思はれた、西園寺侯は臨時ではあるが、既に一度總理大臣の椅子に倚つた事があるが、近衛公は未だ其地位を得るのには遠い樣だ、或は近衛公は在野の側では威望隆々たるものであるが、其割に上御一人の御信任が足りないといふ風說である、是は近衛公が毎に御信任厚い伊藤侯の攻擊者の地位に立つて、在野黨と交を通してゐるからでもあらうし、又近衛公は年は若いし、至尊の御眼には如何にも重みが足りない樣な御思召もあるからであらうと思はれる、此樣に御信任が足りないとしては、到底今上陛下の下に首相の印綬を帶びるようになることは、中々難かしくはないかと思はれた、尤も至尊は天の至公を以て其

大御心となし給ふ以上、輿望の歸する所をみそなわさるれば、之を容るゝを吝み給はざるべきは勿論なれば、また案外に公が早く首相となられる樣な事がかつたとも限られぬ。

西園寺侯が歸朝早々危激な民主平權論を唱へた際に於ては、上御一人の御覺の目出たからざりしは勿論であるが、今日では伊藤の執成の故からでもあらう、近衛公などよりは御信任が厚い樣である、近衛公は變通に乏しい、從つて頑な所があるが、西園寺侯は伊藤の如く頗る如才が無い、是も亦多少御信任に影響する所があるであらうと思はれる、此の如く近衛公は其攝家の出といひ、其重望を下に負へる所といひ、其地位人望共に確に首相たるに足るべきものあり乍ら、嘘であるかは知らぬが、御信任が足りないから、容易に此位に昇り難い、西園寺侯も其地位といひ、人望といひ、近衛公に下らぬのみならず、御信任も厚いといふ事だが、惜しい事には病軀重任に堪へない所がある、侯はあまり上品な病氣ではないが、長く糖尿病に罹つてゐる、それに佛蘭西公使であつた時に盲腸炎で危篤な事があつた、それ等此等からして侯の健康は到底多難の今日

の首相たるを許さない、若し侯の健康が許したならば、侯は桂が首相となる前に臨時てない首相の椅子を贏ち得てゐたであろう。

一躰民間では餘程階級閥の思想が減じてはゐるが、宮中などでは從來の因襲上、華族は皇室の藩屏であるといふ樣な考が依然として滅しない樣だ、民間でも平權主義が浸みこんではゐるといひ乍ら、矢張人爵を貴び、門閥を重んずるのは、人情の弱點として、全く脫する事を得ない所である、況んや帝室に於ては華族、其中での舊華族、殊に其中での公卿華族は歷史的に帝室と親近の關係を有してゐる所からして、自然大名華族や、足輕や馬廻り上りの新華族に比較しては、どうしても御覺が殊なる所があるは當然である、今の總理大臣といへば太政太臣の變名で、いはゞ古の關白である、關白は從來必ず藤氏の五攝家のつとめた者である、我邦、殊に宮中の間に貴族主義の思想が全滅しない限り、一度は復公卿華族の總理大臣を見るやうなことが無いとは斷言せられない、世運は一昂一低の波瀾である、或は平民主義、平權主義の反動の時が來て、舊公卿でなければ首相の任に膺り得ないやうな事が、一時の現象として起らないにも

限らない、若しかゝる時が來たらば差詰め、其任に當るものは近衛公と西園寺侯とであらう、其他の長袖者流は　々としていふに足らず。

山縣侯と伊藤侯

一

政界は常に、二個の相反する者の衝突によつて、波瀾が生ずるのである、板垣と大隈との衝突時代もあつた、大隈と伊藤との衝突時代もあつた、而して今日は伊藤と山縣の衝突時代と稱せられてゐる、山縣と伊藤とは同じく長閥出身である、然るに何故に今はかく相反目するであらうか。

明治維新以後朝廷の上に薩長の爭權もあつたが、更に深く之を考ふれば要するに武斷派と文治派の爭權たるに過ぎないのである、征韓論のための內閣の分裂は何である、外征論者と內治論者の衝突とも云はばいひ得るが、又語を換へていへば外征論者は武斷派で、內治論者は文治派である、而して當時に於ては

文治派が勝を制したので、袂を連ねて職を去つたのは皆武斷派である、大久保甲東は文治派の領袖で、西郷南洲が武斷派の巨魁であつたので、南洲と甲東は同じく薩閥出身であるて、此衝突は決して薩長土肥といふがごとき藩閥間の爭權では無い、而して武斷派に屬した者は、西郷の外佐賀の江藤、副島、土佐の後藤、板垣、萩の前原一誠等皆是てある、文治派に屬する者は、大久保の外、肥の大隈、長の木戸等其重なる者である、而して此征韓論以後は全く文治派の天下であつて文治派は在朝黨、武斷派は在野黨となつたのである、武斷派は前原先づ倒れ、江藤之に次ぎ、西郷の滅ぶるに及んで、殆ど其跡を絶つた、而して其餘燼は薩長藩閥を敵とする民權論に形を變て再び燃へたのである、而して民權論の張本は誰かといへば板垣である、武斷派中の一人であつた板垣である、民權論は武斷派が變形して、文治派に向つて復讐を試みんとしたのである、敵とする所は大久保と木戸とであつて、薩長藩閥ではないのだ、が大久保が薩で木戸が長であるからして、藩長攻撃の名を假りて、文治派攻撃を試みたのであるのだ、而して民權論も始は武斷派が

文治派攻撃の藉て口實としたる所に過なかつたのであつた、一方からいへば外征派は國權論者で進取論者である、內治派は退嬰論者で、漸進論者である、だから明治十年以後の政界は、外征派と內治派が形を變へて內治上に於ける民權論と帝政論となつた、進歩主義と保守主義となつた、故に明治十年以後は此二主義の爭であつた、茲に一言辯じて置かなければならぬのは、外征派中の一部は、其國權論者である所よりして、中には國權を張るは即ち天子の稜威を張るの所以なりとする尊王攘夷主義のやうな意味のある一派をも含んでゐたのである、それで此外征論が民權論と變形した時、此一派は尊王と相近き帝政主義に變じて民權論の敵となつたのである、熊本の紫溟會の一派の如きは即ち此である、いはゞ此時武斷派が變形と共に二派に別れたのである。

此の二派に別れたのは武斷派のみでない、文治派中でも亦た二派に別れたのである、松菊(木戸)病に死し、甲東(大久保)刺されて後は、文治派も其首領を失ふたのである、此時に頭を擡げ出したのが伊藤である、而して民權論に對する帝政論を擔ぎ出した、帝政論は即ち一種の君主專制論である、君主專制論であるから、民權論者が當時潮の如き勢を以て政府に迫つた國會開設論に反對して、尙早論と欽定憲法論を主張した、茲で同じく文治派であつた大隈が、伊藤と分離して、一種の漸進立憲論を唱へた、是が內治派の分裂である。

二

斯くの如く武斷派も文治派も各二派に別れて、新しい現象を呈した、即ち武斷派中の一部は文治派と結んで帝政主義の在朝黨となり、文治派中の一部は武斷派と相近いて在野黨となつたのである、而し相近いたのである、相結んだのではない、大隈の改進黨と板垣の自由黨とは同じく在野黨でありながら、相結ぶには至らなかつた、曾に相結ばなかつたのみならず、寧ろ相反目して、犬猿の間柄であつた、是は一は英國主義で、立憲君主論者で、漸進的で、秩序的であるのに、一は佛國主義で、民主論者で、急進的で破壞的であつたので相容れざるものがあつたであらうが、是等の事情のみでは此二黨が共に藩閥といふ大敵を控へながら相軋轢した所以を說明するに足りない、別に深い因緣が存じて居らねばならぬ、即ち一は文治派であつて、一は武斷派であつて、曾て

朝にあつて相容れなかつた歴史的の因縁を有してゐたからなのである、改進黨の行動が穩和で、紳士的で、自由黨の行動が危激で壯士的であつたのはよく二黨の性質を說明して居る、是であるからして改進黨と自由黨との軋轢は、必しも其標榜した主義の爭ではなかつた、詮じ詰むれば、矢張武斷派と文治派の爭に過ぎなかつたのである、歴史的因縁を有する感情の衝突であつたのだ、主義や主張やのやうな理屈の上の爭は融和が出來るが感情の衝突ほど融和し難いものはない、改進黨と自由黨とは即ち感情の衝突であつたので、其在朝黨といふ大敵を前に控へ乍ら、互に小異を立てゝ大同し得なかつたのは是が爲めである、

此の如く在野黨が二派に別れて相鬩いて居たので、在野黨は萬歳であつた、即ち征韓論以後の政府は文治派の天下であつて、明治十四年に大隈の退いた後は、其中の異分子が除いたので、益々鞏固で安全であつた、元來維新後の政府は、薩長土肥が維新に最も功勞が多かつた所以よりして薩長土肥の政府であつた、而るに土の代表者たる後藤、板垣、肥の代表者たる副島、江藤次て大隈が去つてのちは土肥の勢力の朝廷の上に地を拂ふて、薩長の天下となつた、是に

於てか政界の分野は、在朝黨が薩長で、在野黨が土肥で、在朝在野の爭は薩長と土肥との爭で、在野黨の攻擊の口實は薩長藩閥退治であつた、而し實際に於ては藩閥と藩閥との爭權に過なかつたのだ。

三

斯く在野黨が自由黨と改進黨に分れて內鬩して居る間は、在朝黨は漁夫の利を占めて安泰であつた、順境であつた、が國、敵國外患なければ亡ぶといふ語の如く、敵が無くなれば內輪揉がするのは能くあるやつて、在朝黨の間でソロ〳〵軋轢が始つた、夫れは明治十八年に伊藤が素晴しい勢で官制の大改革をやつて、三大臣九卿を廢して總理大臣以下九大臣を置いて、三條公を內大臣に葬つてしまつて、己が總理大臣を以て宮內大臣を兼ね、宮中府中の權を一手に握つてからの事で、其軋轢は何てあつたかといふと、閥と閥との爭であつた、即ち在朝黨の薩閥と長閥との爭であつた、薩長の爭權といふのが是である、所が此爭權を更に詮鑿して見ると矢張文治派と武斷派の軋轢であるのが面白いではないか、即ち薩閥は武斷派を代表し、長閥は文治派を代表してゐたのである。

茲て一寸薩人の氣風と、長人の氣風とを比較して說明する必要がある、薩人は所謂薩摩隼人て、西偏の鄙人てあつて、中央の文化に洽はない、剛健な素樸な風がある、衣は骭に至り、袖は腕にいたる的の打扮で、大きな脇に長い刀で手をふつて濶歩するといふ有樣である、尤も薩人は一躰は外はかく武骨に出來上つてゐるにも拘はらず、中々心利口で、人をそらさぬうまい所がある、が先づどちらかといへば氣風が武斷的である。

之に反して長州は日本の本島に位してゐて、縱使西の端にあるとはいへ、矢張中國の一部で、薩州などから比へると京都へも近い、それに大內氏時代には凡て京都の華美な風を學んで、それに直接支那（當時は恰度明の時代であつた）と通じて居つて、支那の文化が茲から輸入するといふ有樣であつた、それで學問なども中々盛んであつたらしい、話は餘事に涉るが日本へ朱子學が入たのは長州からである、蓋し日本が正式に始めて支那と通じた時は、支那では隋の時であつて、それから引續き日本からは遣唐使もやる、留學生をもやるといふ有樣で、盛んに支那の文物を輸入し模倣した、大寶令の出來た頃は、日本の朝廷は殆ど純然たる支那風てあつたらしい、そして詔勅や公の文書は皆漢文で書かれて居つて、それにつれて支那の學問も盛んに研究された、所が其時は支那が唐の時代であつたからして、當時の日本の漢學は矢張唐風であつた、即ち訓詁の學であつた。

益々話が岐路へ入る樣ではあるが、序だから支那の儒學の變遷を話して置かう、是は何人でも先刻御承知の事ではあろうが、支那の學風が古から三變してゐる、始めが訓詁學で、次が理學で、其次が考證學である、第一のが漢唐の風で第二のが宋明風で、終のが現代即ち清朝の風てある、訓詁の學は一にまた古學ともいふて、書物の字義の訓詁を穿鑿した時代であるのだ、夫れは秦の始皇が民間の書を焚いたのと、後に項羽が咸陽を焚いて官庫の書が烏有に歸したのとて、漢が天下をとつた時には、天下の書籍は散佚してしまつてゐたのであつた、先秦即ち周末の春秋戰國の時は、諸子百家爭ひ起つて、各々其信ずる所を說いたので中々盛んなものであつた、秦の始皇が天下統一の必要上から此喧しい諸種の學派を勦滅する爲めに書を焚いたのである、漢の時になつて馬上を以

て天下をとつても、馬上で天下が治められない、天下を治めるには禮樂が必要であるといふので、禮樂の復興は即ち儒學の復興であつた。

それで散佚して居る書籍をしきりに蒐めた、所が世はだん〳〵孔子時代から遠くなるし、古聖の說き遺した所は纔に書籍によつて之を知り得可きのみであるのだ、そこで所謂古聖の道を明らめるには、是非とも先づ書物の字義をときあきらめねばならぬのである、そこで訓詁の學なるものが起つて、鄭玄や孔安國や皆盛んに四書五經に字義上の註をしたのである。

唐の學風は依然漢の學風を紹いて訓詁を專らにしてゐたのであつた、尤も兩漢以後即ち兩京以後は所謂六朝時代で眞面目な經學よりも詞賦の浮華が流行た時代であつたので、其餘弊とでもいはうか、唐でも經學の方の研究はさう盛ではなかつたので、學者は寧ろ文章や詩の方に力を入たのである、それであるから李杜韓柳といふ工合に詩人文章家は雲の如く起つたが、割合に經學者は出なかつた、それで儒學を新らしい方面から研究するといふ樣な事もなかつたのである、所が宋に至つて學風が一變した、といふのは後漢頃から支那に入つた佛

敎が、唐以來益々盛んになつて、その佛敎が儒敎に影響したのである、元來儒敎即ち孔子の說いた所は、實踐躬行の、凡夫凡婦も踐み行ひ得可き道であるのであるが、後世に至つて佛敎の樣な高遠な、今の語でいへば哲學的な理屈を聞馴た者には儒敎が如何にも淺膚に感じられるやうになつたので、夫で佛敎と老莊の理屈から考へ出した理氣の說で、儒敎を說明するやうになつた、即ち周子の太極說に次いで程朱などが盛に之を唱へ出した、朱子と較々說を異にした陸象山を祖述したのが明の王陽明で、此理氣の學風即ち哲學化した儒敎は宋明の間にわたつて盛であつた、是ではあまりに空理にのみ騖せて儒敎の本質を失ふからといふので、字義字句を穿鑿する考證の學風といふものが、清朝に至つて起つたのである。

隋唐の際に日本に入つたのは即ち訓詁の學風であつたが、遣唐使留學生を送る事は御宇多天皇頃にやめになつて、其後は支那との交通は僧侶の往來位に止まつた、所が支那の宋明時代になつて渡來した僧侶は、己の敎義を說き明す便利上からでもあらう、理氣の學を齎らして來た、是から日本にも段々宋明理氣

の學が弘まるやうになつたのである、尤も日本でも南北朝以後引續いて戰爭つゞきで殺伐の氣に滿ちてゐるので、其間は學問は僧侶の手に保護されてゐたとは、猶歐州の暗黑時代と一樣であつた、其間に長州は西偏で支那と最も近い位置にあつたからして、支那の文化は直接に此處に輸入することゝなつてゐたのである。

長州は昔から此の如く薩州などに比ぶれば殺伐でない、武骨でない、寧ろ文雅で、早く開けてゐたのであつた、此氣風は自から今に遺つてゐて、長州人は中々通人肌があつて都々逸などを作る、品川は長州人中では眞面目な人物であつたが、矢張都々逸をつくつた、又トコトンヤレの謠なども品川が作つたのであるそうで、伊藤侯も拙いが須磨などで都々逸を作つた事がある、高足駄に朱鞘の落ざし、奇俠男兒と稱せられた奇兵隊の高杉晉作の作つた都々逸がある、木戸などには中々甘いのがある、今でも關西第一であるが、其昔から馬關の花柳界は中々繁昌したもので、伊藤や井上の所謂侯爵夫人は皆此處から拾ひ上げたので、是でも長州人の氣風が通人肌才子肌であつて、薩人などゝは雲泥の差

があるとが譯る、即ち薩は武斷的で、長は文治的であるのだ。

五

此の如く民間にも武斷派と文治派の爭があれば　廟堂にも同じく薩長の爭閥、即ち武斷派と文治派との衝突が絶えなかつたのであつた、其間に自由黨の意氣が多年の間の逆境のために銷沈して、政權を求むるに渴して來て、竟には何年來の主張をも政見をも捨てゝ、政府側と苟合して、從來の武斷派が文治派の伊藤と所謂を其手に收めようとの姑息な考を起して、從來文治派であつた改進黨は進步肝膽相照らす間柄となつた、所が之とともに從來の武斷派の伊藤と所謂黨と名を變じて對外硬論を唱へて、政府に反對することゝなつた、對外硬は外征論の變態で、卽ち武斷派なのである、此時に於ける政界の分野は伊藤と自由黨が提携し、松方と進步黨とが提携して、在野側の武斷派と文治派が顚倒してしまつた、是が政界の一大變象であつた、所が當時の自由黨は銷沈したとはいひながら猶多少當年の意氣を存じてゐることが出來なくて、遂には藩閥攻擊の名の下に多年の敵たる自由黨と改進黨と合躰し

た、寧ろ當時の改進黨は武斷的分子が加はつて、稍々文治的臭味を帶びて來た自由黨と相近づいて來たのであつた、そこで見事政府を乘取つて所謂憲政黨內閣が出來たのであるが、どうも兩雄並び立たずで、憲政黨は分裂して、夫ととも に憲政黨內閣も倒れた、そして憲政黨の名をついだ自由黨は伊藤と合し、進歩黨は憲政本黨の名を被つて、今日に至るまで對外硬的の步調をとつてゐる、其支那保全を標榜としてゐるのは、卽ち排露論者であるので卽ち主戰論者で、伊藤を戴いてゐる自由黨は外交に於ては對外軟で日露同盟論である、是に於て又在野黨の武斷派と文治派が劃然として分れたのである、是が政界の第二の變象である。

在野側が此の如き變化をなしつゝある間に、在朝側も變化を致した、卽ち廟堂では薩の勢力がだん〳〵に減じて長の勢力が增長して來た、薩の本據であつた陸海軍ですら、其陸軍は全く長に占領せられてしまつて、今は纔に海軍に據るのみの孤城落日の有樣となつた、そこで長の勢力は此の如く增長し來ると共に長の元老間に爭鬪が出來た、從來薩長間に衝突が有た間は長の諸元老も相一

致して薩に當つたのであつたが、人間は逆境に居る時は小異も相同するを得るが順境に於ては大同も猶相爭ふ樣になるので、外に對する反撥力が弛むとともに又其の內に於ける結合力が弛んで長人間の衝突が起つたのである、長人間の內閣も矢張武斷派と文治派との衝突であつた、其武斷派を率ゆるのは卽ち山縣で、文治派を率ゆるものは卽ち伊藤であるのだ、是が在朝側の一大變象で、現在の廟堂は卽ち伊藤派と山縣派との爭であるのだ。(全上)

トルストイ伯

一

トルストイ伯が、一種の奇矯なる、而かも眞摯なる、熱誠なる思想家として世に知られたるや久し、而して世人多くは一農夫としてのトルストイ伯を識る、ヤスナヤ、ポリヤナにありて素撲なる服裝にて其自己の有する田地を耕耘しつゝあるトルストイ伯を識る、然れども伯は寧ろ市府の人なり、世人の想像する

ところと異なりて、一年の半はモスコーに在り、而もモスコーに於ける伯が家居の狀を記せるもの尠なし、蓋しモスコーに於けるトルストイ伯は伯自身の抽象也、即ち其影也、ヤスナヤポリアナにありては渠は行へどもモスコーにありては彼は唯、說くのみ、而して其思想の說述者としての時よりは、其思想の實行者たる際に於て、多く世人の注意を牽くなり、何となれば世上言ふ者は多く、行ふ者は少なければ也、故に世人は伯の田圃の耕耘者たり、牧者たり、製靴者たり、小學敎師たるを聞くに熟すれども、其勞作より息ひ、唯其思想の完成に念を勞しつゝある時に於るトルストイ伯に關しては殆ど知る所なきも亦怪しむに足らざる也、伯は露國の長き冬期をモスコーに過ごす也、而して其住する處は町外れなるハモヴニチエスキー巷に在り、モスコー市の中央より馬車を驅ること半晌、林を穿ちて進めば即ち達す可く、門外の標札にはトルストイ伯夫人の寓と記さる、家は古風なる二階建にして高墻を周らしたり、家の內部も亦主人の理想を表するが如き他奇あるなく、人若し往いて其門を叩かば隷僕乃ち出てて客を伯の室に導く可し、伯の室は二階にして、是れ伯が私室にして、而し

て又客廳たる也、此室に達するは、先づ二個の室を通過せざる可らずして、此等の室は華美に粧飾せられあり、平生來訪の客茲に滿てるを常とす、更に進んで右方なる小扉を開けば其小室に達す可し、其室豈は三つの小窓により、夜は一の蠟燭によりて明をとれり、室內には書冊や新聞やの堆積せられたる二つの卓子と一の本箱と、一脚の長椅子と、數箇の椅子と狼籍に置かれあり、此一室こそ卽ち我がトルストイ伯の日夕燕居の處たる也。

伯は中背にして姿勢少しく前に屈み、其顏容は粗野にして、鼻は平く口は大なれども引しまり、額は高く、其下に小にしてくぼみたる眼爛々として人を射る、之を要するに其顏は嚴峻にして氣短なるを表す、若し伯にして其白き長き頰髯を剃り去り、口鬚のみたらしめは、伯は恐らくは哥薩克の一士官と見らるべく、誰か其幻想に耽り、慈心に深き農夫たるを思はんや、更に之をいへば伯の顏は道義本能と道義志嚮とを有する凡人と別つ所なきも、唯其渾身の風貌何となく熱烈なる想像的才能に滿ちたるを異なりとするのみ、故に伯は其本能と信念とに於て、寧ろ信念に強き底の人なり、然れども亦其固き信念を有しなが

らも、物に應じて偏せざる人物たるは、其顔之を表せり。

伯は常に諸外國の雜誌等を玩讀し、客到れば乃ち身を圈手椅に凭せて其讀み し所に就いて語るも、凡て人は何の書をも讀めるものと信ぜるが如し、伯の自 國語を以て對話するに當ては、其用語簡撲にして外語を混ゆるを避け、其音も 日夕相伍する農民の調を帶び、語調緩くして且鈍し、其人と語るとき頻りに身 を搖かし右手をふるを癖とす、彼毎にいふ、予はモスコーを好まず、唯夫人の 健康のために已むを得ずして此に在り、予は冬間茲にあれども、茲にある間は 予は光陰を徒費する也と。

伯の談話は平易に快活に、且卑近なる訓言、比譬を挿める趣味多きものなり、 されど談一たび苛行惡業に及べば其態度忽ち變じて瞋る所あるが如く、毫も相 識らざるものの悲運をきくも猶眉目のうごくを見る、伯は感動せずして義憤す、 伯は感情よりも寧ろ嚴峻なる正義の觀念を有す、其眼中唯善と惡とあるのみ、 惡を疾むの念甚だ強し、伯は苟くも己と相合はざれは毫も假借する所なく、決 して寬容する能はず、故に其燕居に於ても伯の容貌は嚴峻也、嚴厲也、而して

豫言者的也、其語りて其喜ばざる所の者に及べば冷嘲痛罵至らざる所なし、又 眞に愉快を感ぜしときと雖も猶其笑は冷嘲を帶べるが如し。

伯の一日の功程はヤスナヤ、ポリアナに於ても、モスコーに於ても大差なく、 午前は著作に從事し、晩く午餐し、夕には乘馬するか若くは賓客に應接するを 常とせり、賓客は毎に門に滿つるに、伯は之に接するに親疎の別なし、又伯の 文を作るや意を用ふること甚だ勞す、其稿を删正すること再四 猶慊らず、其已に印刷に附して後も、校正刷を雌黃すること鴉塗縱橫、一見殆 ど讀み難きものあり、但其意を勞し、筆を加ふること此の如きに拘はらず、伯 の文は竟にツルゲーフの明晰と整齊となし、而して伯は其本領とする所に對 して他人の一言を挾むを容さざれども、其文字の末に於ける批評には寬容なり、 而して主として伯の文の批評者は卽ち伯の夫人也。

二

曩きに(千八百九十九年)露帝の萬國平和會議の開會を提議するや、伯は此を以 て陋劣なる僞善なりとして曰く、

各國政府が戰を廢むる能はざる所以の者は、蓋し軍備と戰とは、政府の病徴たり、又要素たるものにして、偶起の禍害にあらざれば也、故に予の平和會議を僞善なりといふは、必しも故意にして然りとはいはず、而れども若し人ありて全く其素行を變ずるにあらざれば、行ひ難き事を爲さんことを言はんに、若し其素行變じ得可らずとせば、其の言ふ所は則ち僞善也、今皇帝の提議は、即ち是のみ、僞善の提議たり、而して列國が之を容認せるも亦僞善のみ、僞善の容認也、共に其成功を必して之をなすには非ざる也、列國は只、相戰ふの機會を減じて自己の病徴を蔽はんためにするのみ、即ち是に由て列國政府は唯其自己の良心によりてのみなさるべき眞の醫治を、姑く避けんとするのみ、而れども列國政府は其計畫をすら遂げ得ざる可く、此會議は決して戰の危險を減じ又其禍害を少うする能はざる可し、何となれば相戰ふを以て利なりとする兩軍備國の間に信用なる者あるべからざれば也、已に互に相信せず、其軍備の制限を誓はんこと決して望み得べきことにあらず、若し互に相信ぜざれば始めより軍備を要せざるべきのみ、已に爭を決するに百萬の兵を要せずと

せば、何が故に五十萬の兵を要す可き乎、已に五十萬といふ、二十五萬亦可ならざる乎、若しよく二十五萬にして事を決し得可しとせば、十人一人亦可ならざる乎、而かもよく此の如くならざる者は互に相信ぜざるが爲のみ、嘗てセバストポールの圍まれしや其一堡塞を相奪ふこと數次にして決せず、是に於てワルソウ公は敵に對し兩軍より各一人を出し將碁を鬪はして之を決せんことを申込みたることありき、然れども此は笑を以て迎へられたるのみ、何となれば將碁によつて事を決するは易しと雖ども、其輸けたる者更に兵力を以て之を奪ふことのなきを保し得可らざれば也、將碁を鬪はして事を了す可らずして、人を相殺す所以の者は、結着茲にあれば也、即ち一方にして他を殺すこと多くして而る後始めて約を守らしむ可ければ也、然れども制限したる兵を以て相戰ふことは結着にあらず、何となれば敗れたる者更に新に兵を募りて戰を再びし得れば也、但、平和條約は之に對して規定する所あり得可らざるに非ず、然れども已に戰に臨む以上、何れの國民と雖とも敵の必ず信を守らざるものたるを信ず、何れの國民と雖ども、戰時に於て義務として信

を守ることをなすものにあらざる也。

或はいふ列國間已に相戰ふの法に於ては一致する所ありと、然り、然れども何の國も未だ相戰ふの力を限るに一致せるものあらざる也、且つや政府は當に外國に對して軍備を要するのみならず、內國に於ても亦之を要す、即ち國と國と相信ざさるのみならず、亦政府と人民と相信ぜざる也、而して此事や政府なるものゝ須要なる機能なるが故に、如何なる政府も平和を目的とする能はず、若し凡ての人類皆其良心の指導する所に從ひ、互に相信賴せば、即ち政府なけん、則ち戰なけん。

三

又伯が曾て其唱道する所の說の、寺院的基督敎に背戾したるの故を以て、國敎より破門さるゝや、伯は平然として意に介する所なく、伯の夫人が之に對しボピエノスユッフに激烈なる抗議をなし、又其門下生五百人が親しくカザン寺院に到り伯と同じく亦破門せられんことを要請しつゝある間に於て、伯は則ち其破門に關し何等管長に酬ゆる所なく、却て國政改革に關する剴切なる長文の

意見書を皇帝に呈したり、蓋し伯時事に慨する所あり一身を挺して社會改革の戰士たらんとし、復其身上の毀譽に顧慮たるに遑なかりし也、伯は其意見書に於て劈頭先づ當時情勢の紛々顚ぶる憂ふ可きものなるを喝破して曰く

殺人又あり、暗殺又あり、是に於てか其死刑あり、恐怖あり、虛僞の告發あり、威嚇あり、嫌忌あり、而して一方に於て憎愛あり、復仇あり、生を捨て起たんとする者あり、凡ての露人は別れて兩陣となれり、而して大罪を行ひつゝあり、又行はんとしつゝある也、是れ何の故ぞ、之を靖んずるの時亦果して何の時ぞ。

吾人は今權勢有る人々に告ぐ、上皇帝より下大臣參政及宗室親近等皇帝に獻替の輔弼をなす人々に告ぐ、吾人は敵として告ぐるに非らず、同胞として告げんとするなり、爾或は同胞といふを欲せざらんか、夫も亦可なり、然れども吾人苦む所あれば爾も亦同じく苦を受ざる可らず、若し爾此等の苦を脫し得可しとなさば、願くば之に努むる所あれよ、知らずや、非難す可きは動搖せる一揆に非ずして一身の歡樂をのみつとむる

施政者にある也、問題は爾が身に害を加へんとする敵を防ぐにあらずして、社會の不平の由て原づく所を探り、之を除くにある也、人たる者何ぞ不和と敵意とを欲せんや、寧ろ相愛し相和して住まんことを擇ぶ也、但今日に於て人心の動搖して害を爾に加へんとするが如きものは、爾が啻彼等のみならず、幾千萬の同胞より見て、人類の至善たる自由と光明とを奪ふ一害物たるが如き觀あればなるのみ。

伯は更に進んで改革の實行に論及し、

世人の爾に抗し、爾を攻むることを輕めしめんは易事のみ、易事なりと雖ども、而かも此事確に爾に平和を與ふるに足るの緊要事也、

とて、而る後徐ろに其實行の條項を說けり、第一には農民に與ふるに、他の民衆と同等の權利を以てす可きをいひて、冷酷なる、專權なるゼムスキー、ナカルリキの制を廢し、農民に課する賦役及其移住のために旅行券を買ふを免し、農民にのみ科する體刑を廢する等の細目に渉り、第二には特別防禦法なる軍法の廢す可きをいひ、第三には敎育の自由を說きて政府が黔首を愚にせんとするの

不可を論し、第四は最も重要なるものとして宗敎の自由につき論じて曰く

此の事の必須なるは、必ずしも歷史及科學が示す所の、全世界が認むる所の、眞理たるが爲のみにはあらず、宗敎の禁制は其目的を達する能はずして、却て反對の結果に出でゝ、其禁遏せんとする所を激成するに至る者也、豈啻に然るのみならんや、政府が信仰の自由に干涉するに因て不德の最害なる、最惡なる者を喚起す、何ぞや僞善是れ也、此れ豈に基督が最も疾む所に非ずや、亦更に甚しきものあり、政府が信敎問題に干涉するは、個人並に全民衆の至高なる幸福に達するを碍ぐ、至高なる幸福とは何ぞ團結是也、此團結たる一宗敎の外面の撿束によつて强て把住せらる可きものに非ず、必ずや眞理に向つての自由の進步に由らざる可らず。

信敎の自由の拘束に對しては痛擊餘す所なく、終りに筆を結ぶに當りて左の如く說けり、

以上說く所は最も溫和なる且つ容易なる者にして露人の大半が等しく渴望する所たる也、若しよく此に聽かば庶幾くは以て人民を慰撫す可く、又以て之

を其塗炭の苦境より拯ふを得ん、若し政府にして吾人の言にきかず、今の狀を悛めざれば其罪は動搖せる人民の上にのみあらず。

而かも伯の言は容れられず、伯の說は悅ばれず、平和會議を提議したる露國はこれ先づ滿遼の野に我と旗鼓の間に見へつゝあり、內政亦改善せらる所なく依然として政府自ら革命の導火線に點火しつゝある也。（癸卯二月）

同胞

錄

を其塗炭の苦境より拯ふを得ん、若し政府にして吾人の言にきかず、今の狀を悛めざれば其罪は動搖せる人民の上にのみあらず。

而かも伯の言は容れられず、平和會議を提議したる露國はこれ先づ滿遼の野に我と旗鼓の間に見へつゝあり、內政亦改善せらる所なく依然として政府自ら革命の導火線に點火しつゝある也。（癸卯二月）

同胞

錄

送白河鯉洋之金陵

九州の鯉洋將さに海を渡つて西の方大陸に之かんとす、蓋し兩江總督の聘に應じて、學政の顧問に任じ兼ねて南京師範學堂の教務を總べんが爲めなり、古より金陵は王氣の伏する處、往け矣鯉洋、以つて大に爾が才を振ふに足るものあらん。

鯉洋、爾と予と學ぶ所を同じうし、志す所を同じうし、而して拄鬱久しく伸びざる亦之を同じうす、想ふ爾と予と僑を千桑木にともにし、被を同じうし、襲を一にし、環堵肅然の裡白眼當世を看佗したる、當時の意氣何ぞ壯なりしや、而かも事、志と違ひ、爾は神戸に、予は水戸に東西相別れて各筆政に當る、既にして予は更に去つて大陸に遊び、歸つて烏城に留まり、爾福陵に在ること五年、予烏城に留まること四年、然れども爾がいふ如く區々たる弄文と擾々たる政爭に營々する、洵に我徒の志にあらざる也、而して今や爾は江左の學政新施設の經營に參せんが爲めに大陸に入らんとす、固より此事

爾が學の才とを傾倒するに當らざるべしと雖ども、然れども亦以て其平生學ぶ所志す所を試むるに足らん、往け矣、鯉洋、江左は古より人物輩出の地、今と雖ども俊秀の子弟必ず多し、之を啓き之を迪き、天下有爲の士を造る、洵に爾が任也。

夫れ國際の勢力を扶植せんとする、先づ其國の子弟を敎化するより其功の大なるは莫し、外交の力兵備の力以て其國を懾服し威服せしむるに足らざるに非ずと雖ども、是れ一時のみ、外面のみ、眞に其國の民の心を懷柔し、之をして我を信じ我に賴らしめんとする、敎化の力に非ざれば不可也、外交文書と軍艦と、竟に我の文化を其國民に輸入し、德を以て深く其民心に植ゆるに若く能はず、我の文化を以て一人を薰化し得ば、卽ち精神的に我が勢力其一人を支配し得たる也、卽ち我國際の勢力之に由て此一人に扶植するを得たる也、十人より百人、百人より千人、我が文化の及ぶ所、漸く普くして、我國際の勢力も亦之とともに及ぶ也、今日の極東の事をいふもの、徒らに眼前の經綸に急にして、此根抵の經營を忘る、其本を忘れて其末に馳す、艨艟徒らに壯、械器徒らに精、

以て一時の雄を稀すべきも、永く其國民の歸嚮を定むるに足らざる也、清國の經營其功の最も大なる者を問はゞ、我の文化を彼に移植するより大なるは莫く、予の曩きに大陸に游ぶや、また此に志す所あり、而かも一私立の黌舍微力終に何の効す所なくして去れり、今爾の往くは則ち官府の聘による、以て大に爲すあるに足らん、往け矣鯉洋、爾が此行ひとり一清國の文運に繫るのみならず、我國勢の消長亦焉に關る、之を大にしては東洋の平和亦焉に關る、爾が任や大なり、努めざる可けんや。

且夫れ我國の文化を大陸に輸入するは、卽ち世界的文明を輸入する也、亞細亞の天地を打して、世界的文明の靈光に浴せしむる所以也、世界的文明の統一は世界人類精神上の統一也、人類精神上の統一は卽ち永久の平和を此地上に喚び來す所以也、爾、帝國の一民としては國際の勢力を彼地の俊秀に扶植すべし、而かも時と地とを超絕したる學者の任としては、須らく彼の哀々たる四億萬の臣生に此文明を光被して、我が人類の福祉と平和を增進する大福音を傳へよ、更に之をいはん乎、東西兩洋各開化を殊にす、之を渾融し之を醇化し、打して

一丸となして、大なる統一的世界的の文明を造るの我國民の天職たることは我徒の宿論に非ずや、爾今去つて大陸に往く、親く東亞文明の本質と由來とに察し、汎く西歐文明の醇と長とを採つて、彼の子弟を訓育せば、我徒の宿論以て其實行の第一着を成し得るにあらずや、往け矣、鯉洋、往いて我徒の志を行ひ、兼ねて世界文明の福音を傳へよ、是れ學者としての吾人の任也。

往け往け、鯉洋、江南二月花の發くこと早し、梅花揚柳笑うて爾が行を迎へん、而かも煙雨、南朝の二百八十寺、想ふに爾が懷を傷めしめ、又爾が志を振はしむるものあらん、往け矣、鯉洋、烏城に在る嶺雲遙に爾が行を送る。

（癸卯四月）

兒玉篁南に復す

篁南老兄足下、迷悟は不二、大に迷ふは即ち大に悟る也、足下多情累をなして讃州に隱るゝ、蓋し亦大に迷ふて而して大に悟るものか非耶、丈夫の行藏進

退必ずしも繩墨に拘はらず、姑く乾坤一擲の雄志を抑へて忽ち枯淡の道場に心を錬るの人となる、其端倪す可らざる所亦蓋し足下の足下たる所以か。

僕は老莊に同して情の自然に復歸するを人生の極致とするものなれども、僕の所謂情とは情欲の情と同じからず、情欲の情は即ち性欲の謂にして、心理を智情意の三に別たば、欲は即ち智の混ぜる情なり、飢えて食はんとするは情なり、食ふに甘きを欲するは欲なり、其欲する所、甘きにあるは即ち智也、故に欲は智の混じたる情也、僕が所謂情とは淳樸なる情なり、自然なる情なり、智の矯飾を加へざる情なり、所謂未發の中なり、智を加へて發すれば則ち善あり惡あり、未だ發せざるが故に劣も冥も善なく惡なし、僕の自然に復歸すとは此情に復りて此の情を恣にするの謂也、此の情を恣にするとは欲を恣にすると同じからず、飢て食ひ渇して飲む、矯めず飾らず、情の自然に游ぶの謂也、ショーペンハウアーは此の情と彼の欲とを混同するが故に、其哲學説に批難を免れざるのみ、其所謂意欲は此に謂へる欲なり、意欲の泯絶は欲中に混ぜる智の分子の泯絶也、欲中の智の分子を泯絶すれば即ち純情のみ存ず、故に意欲の泯絶

とは純情に反るの謂なり、或はショーペンハウアーが意欲を泯すに意欲を以てせんとするの矛盾を嗤へど、意欲の泯絶は物に對して執せず着せず自ら離るゝにありて、決して意を經て強て之を泯ぼすには非ず、所謂解脫とは執着の解脫に外ならずして、其執せず着せざる所即ち如々なり、如々は自然なり、自然にして即ち得るなり、蓋しショーペンハウアーは未だ此の一點に於て徹底し能はざる者あるに似たり、然れども之を詮すれば茲に到らざる能はず、而して所謂如々は解脫の狀にして、僕の所謂純情に悉卽ち不羈なるの謂なるを、情と欲との相混じ易き、ショーペンハウアーを祖述せるニーチエは、亦欲を以て情に誤り、欲を恣にするを以て其主張とするに至りたるなり、彼はショーペンハウアーを奉じて、之を傳ふるに其精髓を誤りたる者也、彼の說の病根は實に茲に存ず。

古來の哲學者が殆ど其全躰を擧げて、情を卑めたるも、蓋し亦情を以て慾と混同せるに本づけるものにして、抑も欲の卑しむべきは其情なるがためにあらず、寧ろ其情に混ぜる智の分子にあり、飢て食はんとし、渴して飮まんとす、何んの陋かあらん、たゞ甘きを食らひ、醇なるを飮まんとする則ち罪惡の禍機

こゝに伏する也、情は粹也、純なり、素なり、樸なり、自然なるの情は渾沌なり、何の善何の惡かあらん、智之に加はつて始めて惡あり、惡あるが故に善あり、世人の所謂善惡は相對なり、之を超越せる絶對は卽ち未發の情なり、自然の情也、純情はたゞ其尙ぶべきを見て卑しむべきを見ず、陋なるは欲なり、欲中の智也、世愈々降つて愈々唯智を貴ぶ、智を貴ぶが故に智巧偏進す、智巧にして卽ち罪惡あり、道德の上に卑しむべきは情に非ずして智也、僕の所謂情の自然に復歸するとは智を去りて純なるの情に反らんとするの謂のみ、情の自然に反りて一切の智巧を擺脫し了したる處、卽ち莊子が所謂無何有の鄕に優游するにして、僕が以て至樂境とする所は卽ち是也、畢竟するに迷ひとは智の上の論也、大に迷ふて大に智に遠ざかれば自ら情の純に反る、悟とは又卽ち是也、故に大に迷ふは卽ち大に悟る所以也、

るや否やを、僕、足下の書を得たるの日を以て作州に入り、昨乃ち還る、七年の夢のあと、錦河の瀨音は今に疇昔の哀を咽び、長法寺の曉の鐘、空しく孤客の腸を斷つ、殘燈酒醒めての愁人の思、想ふに足下が今讀の江山に嘯傲すると

大に異なる者あらんか。

讃陽江山の靈夫れ長く足下を護りて庶幾くは動履清福なれよ。（癸卯四月）

佐藤秋蘋に與ふ

一

秋蘋足下近況を詳にせず、敢て問ふ動履住勝なりや否や、僕去年今月母の喪に丁りて國に歸り、今年今月亦亡き養母の遺骨を奉じて國に歸る、不孝の兒狂骨を抱いて、江湖に飄零し、慈恩未だ報ゆるに及ばず、却て此の疎狂の予を憂えつゝ泉下猶瞑する能はざるの客たらしむ、風樹の感徒に切に昨非をおもへば痛悔極り莫し、嗚呼男兒三十を超えて、猶窮途に潦倒し、意氣日々に銷沈して、功名の志亦衰ふ、想ふに餘生幾何ぞ、鏡に照せば髮白を加ふると漸く多からんとす、予は竟に父母在して奉養の孝を盡す能はず、父母死してまた父母の名を著はす能はずして、予も亦空しく亡き數に入らんとする歟、日を餘すこと僅に

四旬にして今年亦暮れんとす、人や老い易し之を如何せんや。

外情累を爲す、予自ら我が病を知る、而かも今に至つて悛むる能はず、十年薄倖の名、予窃に之を恥ぢ、人も亦之を嘲る、然れどもよく予の心事を知れる者は足下也、想ふに此等の事のために僕を罪する自から佗と同じからざる者あらん、男兒たゞ功名ある耳、風雲一たび乘ず可くんば決然として手に唾して即ち起たん、多情我に累す、而して予はまた此多情の裡に韜晦する也、去月事を以て屢々作州に至る、山川舊の如し、曾游を懷へば渾て夢なり、舊識の者に會へば、則ち我に往事を語る、胸に刻まれたる當年の恨を喚起して予に物思へとや、予は恥づ予當年此地を去る時、心窃に期すらく、輕車肥馬に鞭つに非ざるよりは誓つて復此地に入らじと、而して顧みて依然たる流浪の客たるを、予は恥づ。

作州に至る毎に、則ち水戸を想ふ、那珂の流、仙波の湖、梓街の絃歌今如何、いばらき社の同人皆健在なりや、予が水戸を去れる時、壁に題せし『いくばくの思抱いて歸る鴈ぞ』の一句猶墨痕を留むるや否や。

相見ざる者二年、一夕の歡會何の日をか期すべき、足下閑あらば一度西に下

れ、山陽の山水皆凡、以て吟興を催すに足るなかるべきも、相會ふて酒を置いて舊を話し、願くは此相思を慰せん、不鐫。（壬寅十一月）

二

年又新まる、兄も一年を老いたり、吾も一年を老いたり、漸く老い來つて、日月の過ぐるや亦漸く忙しきを覺ゆ、年の過ぐるや忙しくして老や來ること早く、老は來ること早くして功の成ること猶未だし也、日暮れて途遠し、年の新まる毎に心徒らに促々たり、吾は此の如くにしてまた一年を老いたらん、一年又一年、窮途の潦倒は依然として鬢髪既に數莖の白を添ふ、鏡面に對して自ら恥づること多し、兄や吾に比すれば猶春秋に富む、吾や馬齡既に三十に加ふるに四、顧みて何ぞ老いたるや、夫れ男兒立ちて、而して一家の名を成す、多く三十左右の時にあり、而して吾や名の未だ聞ゆるなくして壯心漸く年とともに銷沈せんとす、豈に哀しむ可らずとせんや、男兒世に生る、當さに一事の不朽に傳ふるありて、青史の上に其名を留むべし、然らずして凡庸に伍して醉生夢死し、何の抽づる所なく何の秀づる所なくして終らば、寧ろ初より生れざるの勝れるには若かず、其姓名骨とともに朽ち、其功屍とともに埋められれば、何を以て此我なる者が此世に生れ、此土に活きたるの證とせんや、我にして砂漠上を步行すると同じく、其痕跡足を擧ぐるとともに消ゆるなば、吾は何を以て天の此我を降し、父母の此我を生みたる所以に酬ゆんや、哀々たる父母我を生みて劬勞す、而して我にして名を揚げ父母を著はすに足らずんば、已ぬる哉、吾果して何の爲めに此世に生れ、此土に活くべき、而して碌々早く半生を過ぎて、今に猶江湖落托の客たり、逝きた る時は多く迎ふべき時は少くして、此逝きたる多き時既に爲す有る所なし、迎ふべき時果して何の爲す有る所あるべき、往事を追懷すれば渾て非也、來時亦何の是なる所あるを得べきか、少年は希望のみ也、漸く老いて漸く追悔のみ多し、追悔の多きは希望の滅ずる也、昨非を悟るは今亦非なる也、昨も非今も非、何の日にか果して是なるべき、今の昨は前の今の今也、今の今も亦後の今の昨たらん、前の今も非、今の今も非、後の今も亦非ならざらんや、又非、又非、又非、我は終に此の如くにして終るべきか、後路も暗憺、前路も暗憺、之を念

へば人をして焦悶に禁ゑざらしむ、今年今日また一年を老い、墓門又程を近うす、新年吾に於て何の慶ぞ、人は新年にあふ毎に強いて希望をつくり、是を以て相慶す、然れども其強ひて希望をつくるは、強ひて、舊年の失望を忘れんがためのみ、新年の御慶は附景氣の御慶のみ、附景氣の御慶たらざるもの世果して幾人ぞ、但兄と吾とは確に新年にあふ毎に何の慶する所なき者也、可なり屠蘇に酔へ、君が代を歌へ、而かも結んで解けざる衷心一片の此憂塊を奈何ん。

戯れに三世相を披らき見る、吾れの甲子は少き時憂ひ事甚だ多く、三十五歳にして始めて榮達すべしとあり、荒誕いふに足らずといふか、然れども吾は姑らく此說に從ふて更に來るべき年を樂み待たんか、榮達か榮達か、大に可なり、大に榮達せば先づ大に財を故友に配たん、次に大に天下の貧民を恤まん、天下の文士を飼ひ殺しにして大に其材を伸べしめん、大に天下の英才にして學ぶに資なき者を養はん、刑餘の窮民を養はん、大に遊俠を養ひ、大に客を養はん、更に餘財あらは大船をつくりて海に浮び、社會なるものと國家なるものとの齟齬たる拘束を逃れん、想ふに足下亦大に榮達するの日、吾と其爲す所を同じうせん、此日願くば足下と手を貨財山積の裡に握りて、大に天下の膽豆の如き小富豪を罵殺し笑殺せんか、呵々、三十六年正月。

切磋契

内藤湖南

嶺雲詞兄足下、前二月此地に邂逅し、而して匆々細叙に緣なし、深く以て憾と爲す、爾後一たび西下して、足下を訪はんと欲す、未だ暇あらざる也、伏して惟ふ、近日佳勝なりや否や。

岡山はなつかしき地なり、長澤別天が山陽新報に在りし時、僕廣島より反るの途、之を其寓に訪ひ、同じく某の旗亭に酌み、宇喜田八郎を談じ、同じく後樂園に游び、同じく某の旗亭に酌み、宇喜田八郎を談じ、新太郎少將を談じ、熊澤了介を談じ、今古に俯仰して、身世に歎息して、燈炮し酒冷なるを覺えざりき、別天當時已に了介を傳するに意あり、

孜々として舊文遺書を蒐集せしが、故ありて荏苒果さず、而して其の東京朝日の聘を受けて東歸するの後、僅かに一年餘にして、志を齎らして逝けり、記す僕の滬上に遊びし時、足下と藤田劍峯と、文酒徵逐、歡洽極まりなきや、語別天が病に及て、三人相見て慘然として樂しまず、僕の歸るや、乃ち門司に在て、別天の死を聞き、悲傷自ら禁へず、折簡して足下に訃告し、以て其の哀を分ちしことを、曩には足下が岡山に赴くや、乃ち別天を憶ふの文を草して、之を中國民報に載するを讀み、去日の悲み新なるが若く、益々一たび岡山に至り、相與に別天と游べる處を徘徊して、手を攬て同じく放聲號哭せんと欲す、而して未だ能はず、一たび思て岡山の地に到れば、別天と曾游の跡、宛然として目に在り、胸臆壹鬱として涕泗橫流するを覺えず、嗚呼舉世皆喜笑す、獨り吾輩人の哭するを容さゞらんや。

國府犀東、臺灣に容れられずして歸り、博文館に入る、博文館の雜誌界に於けるは、大阪朝日の新聞界に於ける也、僕大阪朝日に在りて、而して新聞界に樂しむこと能はず、知らず犀東能く博文館に在りて雜誌界に樂しむことを得るや否や、筆を下せば千言、一代を震撼す、世の以て豪快とする所なり、僕頗る當世の記者なる者を知る、其の辨ずる所、窃かに以て企及すべからざるなしとす、而かも世の豪快とする所に於て自ら豪快とする能はず、中夜にして以て思ひ、吾が尙友する所に比し、吾が心に存する所に質す、惕若として自ら容れらるゝが若し、記者の地位を以て鄙と爲すに非ざる也、言の擇ぶ能はざるは、悲の存する所なり、日夕机案相接し、談笑相交はり、而して此の悲と憤とを俱にすべき者、之あるか、是を以て快々として樂しまざる也、且つ人の世に在る、猶ほ之れ一猴なり、幸にして類を同じうする人間の繩に縻がれて、而して指使者の節可笑しき歌調につれて、跳躍顚起、其の技を盡すが若し、吾と足下と猶ほ之れに指使せらるゝを免かると雖も、かの更に大なる指使者の歌調、終に吾輩をして技を盡さゞる能はざらしむるを奈何せん、尙ほ何の豪快の言ふべきあらんや。足下に非ずんば、孰れか此を以て相告語すべき者ぞ。

僕將さに數日の後を以て、東京に入り、呂泣、別天等の墓を拂はんとす、僕

記者を以て業とすと雖も、幸にかの日比谷原頭の車聲馬嘶は、僕が事と相關からざる也、勾留一旬、再び此に來るの後、須らく足下を訪ひ、盡くかの以て世人と相語るべからざる所の者を語るべし、足下幸に之を待て。（辛丑一月）

國府犀東

嶺雲兄梧下、十年は長きが如くにして、しかも短し。人世のまことに電の如く露の如きを覺ゆ、孔明廬を出づるの年、ずてに三年前に空過して、首を回らせば始めて大學の學寮に、傍ら操觚鉛槧を事とせしよりは、はや十年の長き星霜をば、夢の如くに銷磨し盡くせり、贏得したるは何物ぞ、區々たる文筆の虛名と、尨雜なる三十幾部の愚著と之れあるのみ、當年意氣宇宙を呑みし者、十年二十年、今何の狀ぞ、文章經國、竟に半文錢にも値せざるを覩る。

昔人必らず兒孫をして、讀書字を知らしめざるべきをいへり。吾輩不幸にして生れて書卷を知り、また文字を知り、梵漢英佛露獨、あの〳〵讀んで聊かその事を知る、是れ以て常に人の末だ思慮し及ばざる所を思慮し、限ある現在の

身を以てして、限りなき宇宙、天地、人生に於ける未來を思慮す、思慮限りなくして、苦痛の滿身常に重きに堪えざるを覺ゆ、世に不幸なるは、讀書の子、是れなめり、吾輩復必らず兒孫をして書を讀み字を知らしむるをなさゞるべし、國家は全力を擧げて敎育の普及を勵行す、されど吾輩は敎育を受けて自ら不具者となり、畸形兒となり、將さに永遠の後昆に對し、不具畸形の祖先として、一の新系統を開かんとす、遺傳相續の已むなき以上には吾輩の兒孫がまた世々吾輩と同じく不具畸形の生民たるべきを疑はず、是れ永がく兒孫の爲めに哀むべきこと也。

奇字を問ひ、蘊奧を極はめ、古今を商搉し、中外を稽徵し、天地萬物、宇宙萬靈、すべて吾輩藥鑵中の物にあらざるはなし、吾輩の大は、天地之を掩ふべからず、宇宙また之を容るべからず、五六尺の空骸を以て、此の如く大に此の如く廣し、容れられずして然る後に大なるを知るとせば、夫子の道もまた窮せるかな、吾輩の不具にして畸形なるは、此の如く大に過ぎ、廣きに過ぐ。故に斧斤の以て刮るべきなく、鋸鑿の以て删るべきあらず、天地を俯仰するに、た

ゝ不具畸形の大なる者として、太陽の下に側立し、地球の上に匍伏するのみ、吾輩未だ嘗つてしかく側立し、しかく匍伏するほど無能なるべき運命を賦與せられざりしを知る、しかも不具者として依然として側立し、畸形兒として居然として匍伏す、此の如き不幸なる者、あらゆる動物、生物中を周覽するに、三千世界を遍訪して、たゞ吾輩等數人之れあるの外、またとあるべき筈もなし。

見よ物質の力は、以て電氣を迸らし、種々の動力を出して、造化の工を奪ひ、富の産出益す大にして、動力器械が支配せる一大世界は、人生と地球との大部分を占領せり、而して吾輩は全く器械の局外に立ち、物質力の度外に棲息す、是れ以て二十世紀の民とすべきか、また舊世界の人類とすべきか、將たまた三十世紀、四十世紀、五十世紀の未來に於ける生民とすべきか、已んぬるかな、不具者、休せんかな、畸形兒、吾輩は斷じて狹き日本に臣民たるの資格なく、また複雜なる器械の世界に、その管理使用者たるべき文明國人たるの資格ある となし、火曜の世界に去らんか、土星、乃至海王星の世界に去らんか。

乾坤こゝに一轉して、虎の年は無窮に逃げ出し兎の年はその頭を擡げ來る。

虎立つて兎之を逐ふ、人生はかくの如くして天地十二萬年來、相續して窮極あるとなし。白き太箸に挾める雜煮の餅、もはや年の數を食ふほどの勇なくして、鶴龜の象眼せる朱塗の大木盃、今はなみ〳〵と滿引するに力なし。正月の嬉しかりし垂髫の年、いまや再び來らず、而して宇宙は依然として日月星辰を運行せしめ、地球は依然として春夏秋冬の推移を繼續す、五月蠅きかな、天地の間、森羅萬象、いたづらに無垢にして清淨なる人の青眼を遮る、吾輩それ目をつぶし、耳に手を宛て、口を緘して、庚申塚の三猿を學ばんかな。屠蘇三杯の醉加減、酒神人の手に魅入りて、人の筆を走らしめ、貴重にして一字千金二千金も啻ならざる金玉の文字をば、かくの如き囈語を臚列するが爲に、たゞ無意識に紙上の塗鴉を捺せしめたるは、是れ吾輩の責に非ず。不具にして畸形なる吾輩たゞ、酒神の命にこれ從ひ、酒客の忠實なる臣民として、酒泉侯に封せられ、死して酒星となつて天の一方に輝くの外を知らず、呵々。(癸卯一月)

笹川臨風

一

嶺雲兄足下、足下何ぞ東奔西走席暖まるに遑あらざるの甚しき。吾黨の士江湖に流離するもの多し、然れども轉移暫くも已まざるは獨り足下を推す。抑も足下道を說かんが爲めに斯くの如きか、數奇世に遇はざるが爲めか、足下固より傳道の君子に非ず、又游說の策士に非ず、然らば則ち足下の轉々休まざるものは數奇世に遇はざるが爲めなり。

世知るもの少し、合はされば則ち去る、男兒耿介の志固より當に斯くの如くなるべし、然れども若し一たび遇ふ所あらんか、其能を悉し其力を致し其才を傾けて長く流風餘韻を遺すべきは固より士の相酬ゆべき所に非ずや。岡山縣は足下曾遊の地、又夙緣あるの地、況や坂本氏の足下を知るあり、足下其才を傾け其力を致し、其能を悉すべき所之れ或は此地にあらんか。願みるに岡山は曾て友人別天長澤氏のあるあり、僕亦少らく居る、其士と其俗とは之を詳にす。思ふに足下靈活燃犀の筆庶幾くは中國を風靡し其俗を化し、覇を關以西に稱するを得んか、僕固より之を信ぜんと欲す。（庚子十月）

二

嶺雲兄足下、蟋蟀堂に鳴く、秋闌にして風冷かに、人をして愁殺せしめんとするものあり、耿々たる孤燈の下足下の復書を獲て感殊に深からずんばあらず、嗚呼足下、馬齡而立を超えて未だ事の成す能はざるもの豈獨り足下のみならんや、指を屈すれば學舍を出でゝより星霜既に五を經たり、而して諸葛出廬の時を過ぐること方に四、猶今に於て江湖に放浪するなり、猶依然として憒々の徒と伍して遑々たるなり、自ら顧みて何ぞ振はざるの甚しき、吾黨の士、人多く區々たる末技を以て之を云々す、嗟、吾黨豈文章を以て世に知るゝを欲するものならんや、大丈夫苟も生く、尋章摘句の如きは固より吾が能に非ざるなり、胸中虹の如き氣は獨り豪語壯言群小を驚倒せしめんが爲に非ず、要は奇策妙機一世を攪破せんが爲めなり、滿腹の抱負は獨り語らんが爲に非ず、大に其經綸を施さんが爲めなり、縱橫の計就るゝと就らざらざるとは天のみ、吾徒は唯斃れて後已まんとす、人生もと蹉跎たり易く計圖多く挫折すと雖も此志石には匪ず、以て轉すべからず、傲骨不磨長へに屈せざるべし、男兒生きて功を成さずんは、

死して蠻夷の中に葬られんのみ、豈碌々として嘖々の徒と槽歷の間に駢死せんや、思ふに足下僕と其齢を同うし、三十にして而して一、人生正に大に爲すあるの時に際す、豐富なる春秋、赫灼たる前程、僕自ら杯を把て之を祝さんとす、足下亦其上途を餞して而して何ぞ大に奮はざる、近日藤田劍峯滬上より歸りて都門に入る、日に相會して蟄龍の吟を發す、若し風雲に際すれば蛟龍固より池中の物に非ざるなり、遙に吉備の天を望み足下を想ふ、好在なれや、頓首。

（庚子十一月）

一

雲兄足下、

年聿に暮れなんとす、滿目の風物轉た人をして凄其の情に堪へざらしむる也。蓋し年末は回顧也、新年は希望也、年末は人をして多くは悔謝と失望とあらしめ、而して新年は人をして常に希望と、光明とあらしむる也、然れども予を

佐藤秋蘋

以て之れを見る兩者共に非也、抑も人や生れて天地の悠久に立つ、渺たる滄海の一粟、蓋棺千秋假令論の定まる者ありといふと雖も、畢竟蜉蝣の一夢たるに過ぎざる也、之れを天地の悠久なるに比して果して何の加ふる處かあらんや、新年に際して喜ぶ、非也、年末に於て悲しむ更に大に非也、希望といふ、只一の幻影のみ、悔謝といふ、只一の愚痴のみ、幻影を捉へんとして而して後ちに愚痴の來る、固より其處のみ、希望を抱きて而して後ちに悔謝の來る、豈に怪しむを須ゐんや、然り年末は回顧也、新年は希望也、而かも回顧して而して悔謝し、失望するものは愚の極也、希望を抱きて自ら祝福ありとし、光明ありとするのも亦た大に愚の太しきもの也、アヽ我徒此間に處する更らに一段の哲理的工夫あるを要する也。

田中正造翁の直奏文、秋水の手に成る、讀んで而して泣かざるものは人に非ざる也、文何ぞ痛絶なる、辭何ぞ哀絶なる、凛乎として此に懦夫を起しめん也、秋水の文、足下と相並んで千秋なるを得べき也。

曩きに中國紙上に足下の書を讀み、一再且つ之れを卒ふるに堪へず、遂に燈

下に抱きて通宵慟哭して止まざりき、人生老ひ易し半壁の燈影、夜々蕭條たる双髪を照らし來りて、獨り自ら感慨に堪へざる也。

遮莫人生何の處にか避債の臺を按排せん、生兵法に曰はずや三十六計逃ぐるに若かずと、此に於て乎予は月の二十日を以て遠くに避けて北海道に逃げんとす、兆民先生の句にいふ笑向北門風雪中と、而して此日我が兆民先生は逝ける也。

窃かに思ふ、予や遂に逆境の人也、順境の人に非ざる也、富貴若し期し得べくんば執鞭の士と雖も予何ぞ辭せん、而かも危い哉、予の人と爲りや、口を開けば則ち人を嘲り、筆を手にすれば則ち俗を罵る、當世を俯仰して苟くも合はんことを求むるは、予の能くする處にあらざる也、予は只一片の狂骨を抱きて窮途に潦倒し、風塵に憔悴して止まんのみ。

想ふ昔時青年の夢、白馬銀鞍今安くにかある、身には病あり、胸には痛あり、十二欄干醉ふて劍を舞ふ、當年の狂、今や予に於て見るべからざる也、年末に於て轉た感慨に堪へざるもの、ァ、予も亦た遂に回顧して而して悔謝し、失望するの愚を學ばんとする歟、然り我徒此間に處する更らに一段の哲理的工夫を要する也。

時下幸ひに自玉せよ、頓首、

兆民先生逝くの日、　病秋嶺

二

嶺雲兄足下、

僕ついに意を決して急に出游の途に上り、月の十一日を以て漸く此地に入れり、曇きに足下の書を得てより西下の念切りに動き、既に一たび行李を收めて其途に就かんとしたりしも、不幸にして事志と違ひ、旭川の畔、高樓酒を置いてまた足下と快談するに由なく、今や雲樹遠く相隔りて、夢魂徒らに旭川の畔を遶るものあるのみ、是れまことに人生の一恨事況んや僕や此地に入りてより日猶ほ淺く、交游未だ甚だ多からず、滿肚の騷愁、夫れ誰れに向つてか談せん、只だ僅かに詩酒の間に沈湎して、一時の不平を慰するに過ざるのみなるに於てをや、落寞の境界、また太だ憐れむ可らずや。

足下と滬上に手を分ちてより既に一閲年、當時足下と手を携へて街上の一旗

亭に酌み、高晩大論、灰に書きて山河の形勝を談じ、東亞の經綸を策し、風雲口に在り、時事眉に在り、意氣慷慨、眞に一世を曠ふするの慨ありしもの、今や茫として一夢に歸し、足下先づ病を獲て歸朝の途に上り、而て足下は其地に、僕は此地に與に筆を載せて新聞の事に從ふ、知らず、是れ何等の惡因緣ぞ、古にいふ、文章は經國の業なりと、而して足下年少、夙に文を以て海內に鳴り、半生の功業、既に多くは文章の力に成る、顧みて僕や則ち如何、依然として江湖淪落の一措大のみ、思ふて此に到る、僕豈に怛怩として故人に愧づるものなきを得んや。

瀛車室蘭を出てゝ次第に北海道の內地に入るに從ひ、所謂石狩の原野は、天低く、野曠く、一望渺として涯りなく、人烟全く絕へて、時に一隊の農夫、馬を牧して來るの處、宛として往年劍を負ひ馬に跨りて大陸の平原を過ぎりし當時の光景を想ひ起さしむるものあり、嗚呼曾遊目に在り、而して僕や今此の如し、只だ願ふ、得意一たび足下に相會して、一樽の風月、大に此間の心事を談ぜんことを、天下の大、而かも以て僕の狂を容るゝに足らず、僕また自ら世に

背き、俗に忤ひ、敢て當世に容れられんことを求むるに意なし、人生只一人の知己あり、彼の紛々たるの群小に向つて談ずる能はざるものを將つて之れを談ずるを得ば、則ち足る、僕の足下を思ふの情切なるものある、また之れが爲めのみ、然り、まことに之れが爲めのみ、足下猶ほ僕の狂を舍つるなくばん幸也。

（辛丑二月）

三

嶺雲足下、

大江日夜に下る、人や老い易く、年は空しく暮る、況んや旅鬢蕭散、分明一夜既に二毛の生ずるを見るをや、嗚呼丈夫飄零して、今應さに此の如し、如何ぞ幾多の感慨なきを得んや。いばらき社樓上、足下が壁に題せし一句は、墨痕淋漓、今猶ほ其人を見るが如し、社中の同人、日に相對するや、談の必らず足下に及ばざるはなし、想ふ、十二欄干、醉ふて相依り、大聲劍を拔いて莫哀を歌ふ、當年の意氣何ぞ夫れ豪なる、半生の游俠、千金手に從ふて散じ、一代の豪華、萬緡坐に拋ちて聲あり、歌吹海中、誰れかまた今日巢父の嘆あるを思はん

んや、十年の夜雨、往事茫として恰も夢の如し、唯だ見る、仙湖の月、那珂の水、依稀たる風光、獨り舊時の觀を更めざるを。

多情累を爲す、僕も亦然り、英雄の氣、兒女の情、豈に獨り足下をのみ罪せんや、我が徒由來多情の薄倖子、空しく風蘭に憔悴して、滿肚の骯髒遣るに處なし、加ふるに平生の多病善愁を以てす、多情我れを累するもの亦た何ぞ怪まん、若し風雲一たび乘ずべくんば、豈に竟に池中の物ならんや、丈夫素と意氣を貴ぶ、斷じて黃金に非ざる也、伴狂自ら甘じて多情の薄倖子となる、此間の心事、獨り足下と共に之れを談ずべきのみ、嗚呼天下茫々、誰れか知己ぞ、僕を知る者は足下也、足下を知る者も恐らくは僕ならん。

古人の句にいふ、飛蓬各自遠、且盡手中杯と、僕斯句を誦する毎に、則ち足下を憶ひ、足下を憶ふ毎に、則ち斯句を誦し、未だ嘗つて泫然として杯中の淚を酌まずんば非ざる也、別後今幾年々ぞ、雲樹遙々、相思徒らに切なるを覺ゆ、知らず、何の日か、復た重ねて杯を春風に擧げん、時下向寒、幸に切々自玉せよ、不宣。（壬寅十一月）

金蘭記

序

嶺雲子、頑狂、禮に嫻はず、又偏狹、人を容るゝ能はず、故に交游廣からず、足長上の門に入らず、其友多く我と同じく轗軻沈淪のものに非ざれば、則ち布衣文筆の徒、皆雌伏して、其名未だ聞えざるもののみなり、然りと雖ども、此等幾多池中の蛟龍、豈に他日雲を興し雨を喚びて上天に騰るの秋なからんや、一部の金蘭記、以て他日の券となす。（丁酉八月鶴城客窩に於て）

笹川臨風

純乎たる江戸ッ兒、意氣を喜び、情に醇し、平日薩長等の田舍侍、跋扈して、江戸ッ兒任俠の氣風を壞りたるを慨し、嘗て日本人に『江戸兒を吊す』るの文を草し、頃日また『混世魔語』の一篇に、都門南北の氣風を論じて、大に南方の非江戸的なるを罵る、其專攻する所、國史にありと雖ども、旁ら漢文學を喜び、

最も小説戯曲を嗜み、『支那小説戯曲小史』の著あり、支那の小説戯曲を歴史的に論述せしものの破天荒たり、國史に在ては意を本古史に注ぎ、其説く所獨創の見地多し、江湖文學に出せる『出雲民族興亡史案』の如き、以て其一斑を窺ふるに足ん歟、彼が風采は卽ち瀟洒たる一箇の風流才子、間雅整飭、又多能にして、謡をよくし、清元をよくし、茶を點し、花を挿くる等、宛然たる往日旗下の貴公子、其文も又絢爛錦麗才人の調あり、これ蓋し彼が其最も嗜む所の支那の小説戯曲に得來れるもの乎。

臨風、友情懇切、其岡山に來るの序を以て、作に來り余を訪ふこと二回、左の書は卽ち其最後津山より岡山に歸りし時、余に寄せしもの、情緒纏綿、惻々人を動かすものあり、

逢ふことの稀にいて、別るゝとの何ど久しき、君と語りしも夢の如し、相去ること十六里、是より我にして東に行けば、何の日か又君と臂を交へて、微宵痛飲することを得ん。

曉夢糢糊たり、殘月鎌の如し、鶴水の畔に君と辭して、舟棹軋々中流に出づ

顧みすれば津山全市寂として聲なし、孤客舟中に在つて、豈に無限の感慨なからんや、我は唯、何となくうら悲しく、心淋しきを思ひぬ、俯仰すれば我胸怪しきまでに塞がりぬ。

舟、流を下りて、日漸く出づ、舟中君の贈る所の正宗を開て、舟中の人と飲む、天神山の勝を過ぎて、午下一點を過ぐる頃、舟、和氣村に着す、和氣は寒村、停車場前の一破屋に上り、獨り炬燵に凭る、津山の夕を思ひ來りて、我肉動き、我血の沸くを覺えぬ、君が彼夕に於ける芳志を思ひて我情禁せず、我は殆ど泣かんとせり、若し此時にして我に筆あらんか、君を泣かしむるの文を草し得たりしものを。

人生幾干ぞ、蜉蝣の命にも似たる一生の間に、人に屈し、我性を矯め、金錢の奴となりて我情を變ずるが如きは、君と我との能くする所に非ず、向上猛進あるのみ、直行徑進なるのみ、毀譽何ものぞ褒貶何ものぞ、權貴に服せられ、威武に依て動くは、男兒の愧つる所、君よ奇蛸の氣を消耗すると勿れ、我等の面白きとして一生を無茶に暮さん歟。

田舍の生活はのんきなり、然れども活きたる人間は活きたる社會に出でざる可らず、我等は活世界に活動せざる可らず、生存競爭場裡に花々しき働をなさざる可らず、歸を憶ふの君は債を畢つて直ちに歸東するを要す、唯杞憂あり債を畢らんとするの君は必ず債を增す可らず、債を增すの曉は、何れの日か君をして奇峭の氣を吐かしむるを得ん、相與に、語て笑ひ泣くことを得ん、東京に於て我友のうちに君を欠くは我が堪へ得る所に非ず、我不平と我憂愁は君にのみ語り、君に依て散ずるを得べきもの多し、君又何とか思ふ。

津山に在て君と語ること三夕、我意殆ど語り盡くしたるが如くにして、未だ語り畢らず、鶴水舟中獨坐の時、瞑想に沈で君を懷ふこと切なり、今朝曉來雨瀟々禁ずる能はずして此書を草す、君それ獨り今日何を思ふ、爐に凭て書を讀むか、文を草する歟、抑も佳人と淺酌低唱するか、又獨り靜坐今昨を俯仰感慨する歟、君よ老ゆ可らず、いつまでも若くあれ、

嗚呼我猶蠢々して未だ鶴城の地を去る能はず、臨風に對して愧つること多し、臨風、頃日、佳耗を得たり、君も亦願くは意氣を消耗して老ゆるあること莫れ。

藤田劒峰

由來、阿波の地人物を出だすこと、劒峰の如き盖し有數なり、劒峰滿肚悉く覇氣、如之才氣穎脫、其爛々たる炬眼彼が爲人を表現するもの、同人相稱して奸賊的眼光なりといふ、其號は之を其鄕の高峯劒山にとれるもの、而てよく彼が氣象の峭拔なるに稱ふ、其身を持するに撿束なく、其疎懶なると、同人中第一と稱す、朝、嗽々に及はすして蓐中直に飯を喫すること往々、其机席の間亦常に書帙狼籍足を容る可らず、同人未だ嘗て彼が讀書するを見ず、而かも彼れ文を爲れば博引旁證、彼いふ、我既に蓐に入て後讀書一時間するのみと、彼れ識見人に絶し、議論常に意表に出づ、其修むる所漢文學にあり、支那文學の特質を以て之を地方的の影響に歸し、南北西の三に分つて之を論ずるは、彼の宿論なり、頃日『先秦文學』の著あり、秦以前の文學史にして、彼が支那文學史稿の第一篇なり、彼れ文を爲るに未だ嘗て稿を更へず、又未だ嘗て之を再閲だもせず、而も其筆力雄健高邁、事を論じて明快犀利、甚だ不用意に成れるの文に似ず、

同人中文に於ては第一劒峯を推すべし、彼又甚だ韓非が冷酷を喜ぶ、左の書は余が今春肺を病み、煩悶し殆んど絶望せしとき、寄せて以て我を勵ませしもの彼が氣象を見るべし

此頃は心の內に溫かき所もなし、起きて酒、醉ひては寢ぬ、時々糊口の爲め、くだらぬ事を書き、日を暮すばかり、これでも人は生きたきものなり、死なうなどとはまだ思はれず、友人等が高等官とか何とか云ふてさわぎても、あまり羨しくもなく、夢には大臣にもなるほど豪語致居候、劒峯意氣銷沉せりといふものは、あまりに速斷に過ぎたり、人生五十、前途猶二十年あり、世間が冷なれば、我も世間に冷かならん、世間が刻なれば我も世間に刻なるまでの事、やれるだけやりて死ぬまでの事、我はこんな積なり、足下も何だ春秋に富むの身を以て、死ぬの、生きるのいふにも當らざるにあらずや、氣を丈夫にもて、心を鬼にせよ、世間にまけな、病氣に勝てよ、くだらぬ事もいふだけいはねば、我氣に入らず、乞ふ恕せよ、

讀來つて嚴父に對するが如し、峭刻の裡、自ら溫情を存ず、蓋し劒峯もと情に熱烈なり、故に韓子の冷酷によつて、自ら抑へんとするものにあらざらんや。

藤井紫影

青松白砂の須磨明石と、一葦海水を隔てゝ千鳥の通ふといふ淡路島に生れし紫影は、溫籍其風色に似て、彼れ御師範役たる劒客の家に生れたりとも見えず、父は維新の初、淡路と阿波と事を搆ふるとありし時、難に死して家道迍邅の間に成長したるしに似ず、氣象些の酸澁を着けず、風丰秀麗、才氣洒脫、眞個一才人の風あり、故に其文も亦一種輕妙和樂の趣ありて、和氣言外に溢る、垂髫にして圃珍の投書家たり、後京都高等中學に在りし時、屢々都の花に其所作の小說を寄す、『色法師』の如き蓋し其傑作なり、又柵草紙にアヽヴイングが『スリーピー、ホロウ』を譯載せしことあり、大學を出でゝ後、福岡修猷館に招かれ、今彼地に敎職たり、頃日帝國大辭典の著あり、彼れ藤岡東圃と同年を以て大學を卒る、學に於てすれば紫影東圃に若かず、而して才に於ては東圃終に紫影に及ぶ能はず、彼の愛にあるや、弊衣蓬髮、五六年間茶褐の色既に褪せたる一羔袍を纏ふ

て、人の指笑を顧みず、我と最も親交、彼れ酒を嗜み、酒を飲む必ず我と共にす、當時共に是れ一窮措大、二人の嚢裡を合して常に半圓に滿たず、故に毎に藪蕎麥に飲む、二杯の笊そば、酒三陶とを以て限とす、我の酒量もとより、到底彼に若かず、彼れ醉へば毎にいふ、好男子惜らくば酒を飲まずと、今や我酒量漸く多く、一人にしてよく麥酒一瓶を倒すを得るに足る、而して紫影既に伉儷あり、よく當年の意氣ありや否や。

近來斷然酒樓に行かず、敢て細君を恐るゝに非ず、人と飲む毎に、一年前の舊惡露顯するに僻易仕候、昨一竿を肩にし、鞘川に釣る、江上の秋風、快いひ難し

すて兼ねてことしも此に秋の風

去年の夏、彼及び東圖と須磨に會せんとを計る、齟齬終に相見ず、今年四月余九州に入らんと欲して病の爲めに志を得ず、今夏も亦相見るを得ざるべし、徒らに往日を懷ふて悵々に堪へず。

小子昨日當地に罷越、十二三日頃まで滯在の筈、それより岡山邊にて一泊、

歸福の都合に候、貴兄當月中御滯在なれば、到底不得拜晤、殘念に候、藤岡氏にも一日違にて會はず、

笛の名は青葉とやらん杜鵑

此れ去年その須磨まり當時東京にありし我に寄せしもの。

白河鯉洋

笹川臨風曾て江湖文學に同人の消息を記していふ、(註はわが挿む所)

夜闌に寒更に深し、耿々たる孤燈の下、爐を擁して端なく同人の近狀を思ふ、向ヶ岡の夜鬼窟夜鬼窟は余が當年の寓を指して之をいふ往年同人相謀つて東亞說林を出たすや余が寓常に同人間の梁山伯たり、時に政治界に躍起の語行はる、同人の言論皆粗放にして、文界の一躍起連たり、余其躍起の言音相近きにより寓を名つけて夜鬼窟といふ)既に四散す、東亞說林に滿腔の抱負を吐きたるもの今焉くにか在る、嶺雲作に入て僻勃たる不平を山水の間に消散し盡すを得ず、獨り歸を懷ふて慨轉た切、柳々(小柳)廣陵に蟄して又往日大醉放

吟の意氣なし、東圃(藤岡)洛に在て山紫水明の間に嘯吟し、紫影筑紫に赴て久しく綺語を作らず、寂巖(西谷)は默たり奥羽の野に潜み、南山(藤田)は俗せり中國の都に師たり、願て在都の諸同人を見んか、憮然として相見て往日を語るも然かも劒峯(藤田)或は將さに鵬翼を張て千里遠游せんとするの志を抱く、既に壯なり、臨風や唯空しく徒爾たるのみ、それ近日を以て西遊して東圃嶺雲の諸同人と快談せんか、鯉洋溫容嬉々たり、在都の同人中最もよく學を勉むるものか、同人の四散斯くの如し、我は一夕盡く會して、高談放語彼の大氣の和を亂して、天地をして黑風白雨の巷と化せしむるの快を欲す。

實に同人四散し、且つ劒峰既に遠く禹城に游び、都門唯臨風と鯉洋とあるのみ、鯉洋同人中にあつて齡最も弱し、濶達膽氣あり、酒を飲む斗にして醉はず、同人中最もよく飲む者、彼か眉目の清秀に似ざるなり、去年夏彼れ單身富士に登る其發するに臨んで書を寄せて曰く、

單騎一瓢を携へて不盡山頭に向ふ、旭暾に對して大白を擧くるの快は、正に近日にあらん、此處四日許帝城に背き候、

其文以て彼が氣象を觀るべし、彼れまた、余が爲めに、余が久しく京に歸らさるを憂へて、今年初、書を致していふ

鼻つ垂らしを御相手の育英事業とやら、我黨の生來不得手の事にも有之、餘り長く田舍虫に蝕せらるゝも由々敷次第に候得ば、初春に芽出度歸京しては如何

而して事志と違ひ、幾たびか歸らんと欲して今に得ず、空しく東天を望んで雲山の杳たるを恨むのみ。

藤岡東圃

加州百萬石の封下、近時有爲の士を出たすこと多し、磅礴せる雄藩の氣象、今日に迸發せるものか、其大學にあるものを以て之を見るも、東京を除けば石川のもの殆んど最多數を占め、軍人に於ても、亦殆んど薩長を凌て之に駕せんとするの勢ありと、盖し石川の人凡て思慮愼密、頭腦明快、彼の最も數學に巧みなるが如き以て證すべし、藤岡東圃は石川の人、博覽强記、篤學にして識見

あり、其著、『日本風俗史』の如き以て、彼が學力を見るべし、我黨の士皆多少の覇氣を存して、獨り東圃は純乎たる學者、深く自ら藏して、鋒鋩を露はさず、國文を專攻し、兼ねて國史に通ず、最も意を有職故實の事に留む、風俗史は平出鐘二郎氏と合著する所にして、而して足利氏以前は多く東圃が筆にかゝる、平出氏は名古屋の人にして亦博覽、最も德川時代の風俗に通ず、故に德川時代は多く氏の筆に成る、東圃の思慮の密にして強なるや、卒然として一事を問ふも、諄々として、答ふるに、始終を以てせざれば已まず、又名勝古跡を訪ふこと好み、至れば即ら幽を討ぬ、古を吊し、備さに歷觀して倦むなし、其人を見れば蒲柳の質、衣に勝へざるか如く、而して事に對して用意周到、事をなすに精力人に超ゆ、彼がよく大著ある所以歟、我の畏友唯東圃あり。

今日よりはわびつゝも寐ん秋風の

東圃今京都にあり、去年我の作に來るや、途京に留ること二日、京にあるの諸友と東山の一旗亭に飮みて別る、時に東圃偶吟十首を以て我に贈る

まづぞ吹くてふ西にむかひて

大そらに雲たちさわぐ君に今日
わかれて居れば雲たちさわぐ

會ひし日のすぐの別れは春の夜の
夢よりもなほわびしかりけり

白雲のおりゐる時はをき方に
霽れぬおもひのありとこそ知れ

月影のさやけき時は出てゝ見よ
見る人ありとわれもいて見ん

人なれば忘れもすべしさりとても
はな咲くおりはおもはざらめや

ゆく人の聲のみ耳に殘りつゝ
松のみどりの今日もかはらず

おもひかね嵐の山に來て見れば
ともになかめし花は散りけり